西ノ辻遺跡第42次発掘調査報告

2001.9

東大阪市教育委員会

はじめに

この半世紀間における東大阪市域の変貌には目を見張るものがあります。道路・鉄道の整備・新設と住宅・会社・工場・商店などの建設は、広がっていた田園風景を一変させてしまいました。西ノ辻遺跡周辺も例外ではなく、現在は田畑をほとんど見ることができません。しかし、この地域の開発は今に始まったことではなく、弥生時代から平安時代ごろまでは住居・墓地などを営んだ集落があり、その後中世以降は一部を除いて田畑化したことが近年の発掘調査から判ってきました。

本遺跡は、東大阪市に数多く存する遺跡の中でも、古くから弥生時代の遺跡として周知され、注目されてきた遺跡のひとつです。今回の調査においては弥生時代の集落に伴う複数の大溝、別の墓域の発見、中世および近世以降の耕作地の様相など多大な成果を上げることができました。本書の内容は地域史の形成過程解明の一助となるものと思っています。

現地調査および資料整理にあたりご協力いただいた関係諸機関、諸氏に厚くお礼申し上げます。

平成13年9月

東大阪市教育委員会
教育長　奥田健次

例　　言

1．本報告書は、共同住宅建設工事に先立って実施した西ノ辻遺跡42次発掘調査の報告である。
2．発掘調査は、日本エスコン株式会社と協議を行い、その依頼を受け「覚書」を締結して、東大阪市教育委員会が2000年１月17日から２月26日まで実施した。
3．現地調査は若松博恵が担当し、吉田綾子の協力を得て実施した。遺物整理および報告書作成に伴う作業は才原金弘のもと槇原美智子などがそれにあたった。
4．動物遺体の同定については、大阪市立大学医学部第2解剖学教室の安部みき子さんの教示を得、報文を頂いた。
5．本報告書は、遺物の整理およびその執筆が先行したことから遺構と遺物を章別とする記述形態をとった。その結果、第３章４．ａは槇原・若松、ｂは村上昇（立命館大学大学院）、ｃは槇原、ｄは安部、第４章は吉田・若松が執筆し、それ以外は若松が執筆・編集した。
6．現地の土色および土器・土製品の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人色彩研究所監修『新版標準土色帖』に準拠した。
7．現地調査にあたっては、日本エスコン株式会社、安西工業株式会社、本山公平、東朋子（敬称略）など多くの方々の協力を得た。記してお礼申し上げます。

本文目次

第1章　調査に至る経過と遺跡の概要 …… 1
第2章　位置と環境 …… 2
第3章　調査の概要 …… 4
　1．調査の方法 …… 4
　2．層序 …… 5
　3．遺構 …… 11
　　a．縄文時代以前 …… 11
　　b．弥生時代 …… 12
　　c．古墳時代 …… 20
　　d．奈良・平安時代前半 …… 20
　　e．中世期 …… 20
　　f．近世・近代 …… 23
　4．出土遺物 …… 27
　　a．弥生土器 …… 27
　　b．縄文土器 …… 52
　　c．石製品 …… 58
　　d．動物遺体 …… 63
　5．調査の結果 …… 66
第4章　西ノ辻遺跡における歴史的景観の変遷概略 —まとめにかえて— …… 67

挿図目次

第1図　調査地点位置図 …… 1
第2図　西ノ辻遺跡の石碑 …… 2
第3図　遺跡周辺図 …… 3
第4図　調査トレンチ位置および地区割設定図 …… 4
第5図　基本層位図 …… 5
第6図　北トレンチ南断面図1 …… 6
第7図　北トレンチ南断面図2 …… 7
第8図　南トレンチ北断面図1 …… 8
第9図　南トレンチ北断面図2 …… 9
第10図　自然流路平面図 …… 11
第11図　弥生～奈良・平安時代遺構平面図1 …… 13・14
第12図　弥生～奈良・平安時代遺構平面図2 …… 15・16
第13図　南トレンチ大溝2内土器出土状況平面図（部分） …… 18
第14図　南トレンチ方形周溝墓台状部および大溝2断面図 …… 19
第15図　北トレンチ中世遺構平面図 …… 21

第16図　近世棚田平面図 …… 22
第17図　南トレンチ棚田端石列―溝Ｂ内―平面図 …… 23
第18図　南トレンチ大溝２内出土弥生土器実測図 …… 29
第19図　南トレンチ第４層・大溝２内出土弥生土器実測図 …… 30
第20図　南トレンチ第４層・大溝２内出土弥生土器実測図 …… 32
第21図　南トレンチ大溝２内出土弥生土器実測図 …… 33
第22図　南トレンチ大溝２内出土弥生土器実測図 …… 34
第23図　南トレンチ第４層・大溝２内出土弥生土器実測図 …… 37
第24図　南トレンチ大溝２内出土弥生土器実測図 …… 38
第25図　南トレンチ第４層・大溝２内出土弥生土器実測図 …… 39
第26図　南トレンチ大溝２内出土弥生土器、北トレンチ大溝１・落ち込み出土土製品実測図 …… 41
第27図　南トレンチ大溝２内出土弥生土器実測図 …… 42
第28図　南トレンチ大溝２内出土弥生土器実測図 …… 43
第29図　北トレンチ出土弥生土器・土製品実測図 …… 45
第30図　北トレンチ出土弥生土器実測図 …… 46
第31図　弥生土器拓影 …… 48
第32図　縄文土器拓影１ …… 53
第33図　縄文土器拓影２ …… 55
第34図　打製石器実測図 …… 59
第35図　磨製石器・砥石実測図 …… 60
第36図　西ノ辻遺跡遠望（東より） …… 67
第37図　各次数調査位置図（付．文献一覧） …… 68
第38図　調査成果による歴史的景観変遷模式図 …… 71～74
第39図　地図に見る近代から現代への変遷図 …… 75
付　図　西ノ辻遺跡周辺小字切図 …… 裏中扉

表　目　次

第１表　地区・時代別遺構表 …… 10
第２表　主な土坑・ピット・溝一覧表 …… 24～26
第３表　弥生土器器種・産地別表およびグラフ（第42次） …… 50
第４表　弥生土器器種・産地別表（第43次） …… 51
第５表　縄文土器集計表 …… 57
第６表　縄文土器一覧 …… 58
第７表　サヌカイト観察表 …… 61・62
第８表　サヌカイトの個体別表およびグラフ …… 62
第９表　動物遺体同定表 …… 64・65
第10表　出土哺乳類の出現頻度表 …… 65
第11表　弥生時代中期出土のイノシシの下顎骨の計測値表 …… 65

図 版 目 次

図版1 遺構　調査地全景（東より）
北トレンチ断面部分1—F地区—
北トレンチ断面部分2—H地区—
図版2 遺構　北トレンチA・B地区　自然流路（北より）
南トレンチA～D地区　自然流路（東より）
南トレンチA地区　自然流路堆積状況—北断面—
図版3 遺構　北トレンチC・D地区（北より）
北トレンチD～F地区（北より）
北トレンチF・G地区（北より）
図版4 遺構　北トレンチG・H地区（北より）
北トレンチ大溝3内土器出土状況（南より）
北トレンチH地区（北より）
図版5 遺構　北トレンチI地区—大溝1・4など—（北より）
北トレンチ大溝1内土器出土状況（南より）
北トレンチJ地区周辺—落ち込み—（北より）
図版6 遺構　北トレンチ落ち込み内土器出土状況（南より）
北トレンチ落ち込み内シカ角・イノシシ下顎・土器出土状況（南より）
北トレンチJ～K地区—土坑13、大溝3など—（北より）
図版7 遺構　南トレンチD地区（北より）
南トレンチE地区周辺（北より）
南トレンチF地区周辺（北より）
図版8 遺構　南トレンチG～J地区（東より）
南トレンチG地区—大溝2など—（北より）
南トレンチH地区—大溝2など—（北より）
図版9 遺構　南トレンチ大溝2内土器・動物遺体出土状況（南より）
南トレンチ大溝2西溝断面（北より）
南トレンチ大溝2東溝断面（北より）
図版10 遺構　南トレンチ方形台状部断面（東より）
南トレンチI・J地区—大溝1・3など—（北より）
南トレンチJ地区（北より）
図版11 遺構　北トレンチG地区中世期遺構（北より）
北トレンチD・E地区中世期遺構（北より）
南トレンチG地区近世棚田境石列（南より）
図版12 遺物　南トレンチ大溝2出土弥生土器
図版13 遺物　南トレンチ大溝2出土弥生土器
図版14 遺物　南トレンチ大溝2出土弥生土器
図版15 遺物　南トレンチ大溝2出土弥生土器
図版16 遺物　南トレンチ大溝2出土弥生土器

図版17　遺物　南トレンチ大溝２出土弥生土器
図版18　遺物　南トレンチ大溝２出土弥生土器
図版19　遺物　南トレンチ大溝２出土弥生土器
図版20　遺物　南トレンチ大溝２出土弥生土器
図版21　遺物　南トレンチ第４層・大溝２出土弥生土器
図版22　遺物　南トレンチ第４層・大溝２出土弥生土器
図版23　遺物　南トレンチ第４層・大溝２出土弥生土器
図版24　遺物　南トレンチ大溝２出土弥生土器
図版25　遺物　南トレンチ第４層・大溝２出土弥生土器
図版26　遺物　南トレンチ大溝２出土弥生土器
図版27　遺物　南トレンチ大溝２出土弥生土器
図版28　遺物　南トレンチ大溝２出土弥生土器
図版29　遺物　北トレンチ大溝１・落ち込み出土土製品
　　南トレンチ大溝２出土弥生土器
図版30　遺物　南トレンチ大溝２出土弥生土器
図版31　遺物　北トレンチ大溝３・落ち込み出土弥生土器
図版32　遺物　北トレンチ大溝１・３・土坑13出土弥生土器
図版33　遺物　北トレンチ大溝３・落ち込み出土弥生土器
図版34　遺物　南・北トレンチ出土縄文土器
図版35　遺物　南・北トレンチ出土石製品
図版36　遺物　南・北トレンチ出土石製品
図版37　遺物　南・北トレンチ出土石製品
図版38　遺物　南・北トレンチ出土動物遺体

第1章　調査に至る経過と遺跡の概要

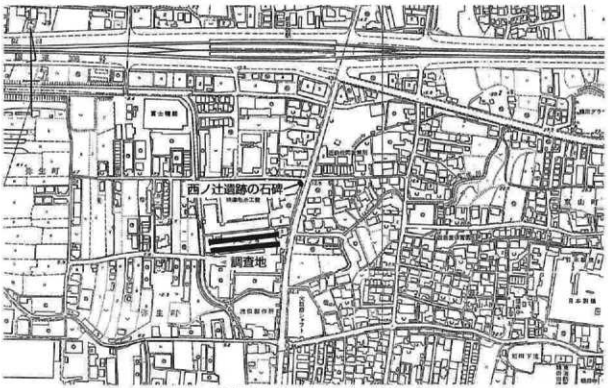
平成11年10月22日付けで、弥生町1415－３、1412、1455、1456における共同住宅建設の届け出があった。当該地は西ノ辻遺跡のほぼ中心部に位置し、北・南隣接地など周辺地域から弥生・古墳時代の遺構・遺物が確認されていることから、既存建物解体に伴い同年11月15日、建築予定域内の東・中・西の3ヵ所について試掘調査を実施した。その結果、中・西の２ヵ所で古代から弥生時代にわたる遺物（土師器、須恵器、弥生土器）と遺物包含層を確認した。このことから発掘調査の実施について、調査範囲確定のための再試掘調査を行うなどの協議を重ね、諸々の事情により東大阪市教育委員会で対処することとなり、「覚書」を締結して、平成12年１月17日から２月26日まで調査を実施した。

西ノ辻遺跡は縄文時代から江戸時代に亘る複合遺跡で、とくに弥生時代中期末から後期中葉の土器様式名―西ノ辻N式、Ｉ式など―に見られたように弥生時代の遺跡として周知されている。発掘調査は平成13年４月現在43次を数えるが、その大半は国道308号線内の鉄道（近鉄東大阪線）・道路（道路拡幅・第二阪奈有料道路）建設およびその周辺開発に伴ったもので、遺跡の北部に集中している。

旧石器時代の翼状剥片および縄文時代早期から後期の土器片などは少量出土しているが、遺構は確認されていない。縄文時代晩期になると突帯文土器が今回の調査地だけでなく、石器・土偶などとともに点在して出土し、ピット・溝も検出されている。

弥生時代には、中期でも中葉以降から後期の土器が埋没谷内などから多量に出土し、その周辺から方形周溝墓・大溝・住居跡などが検出されており、全容は明らかではないが、この時期に大きな集落が営まれていた。

古墳時代前期の資料は明確ではないが、後期になると須恵器・土師器・韓式系土器・製塩土器・盾持ち人物埴輪などの遺物、掘立柱建物・井戸などの住居関連遺構や埋没谷内から貯水・導水用の水利



第１図　調査地点位置図（1／5000）

第２図　西ノ辻遺跡の石碑

施設が検出されている。

奈良から平安時代前半は須恵器・土師器などの遺物と建物跡、木枠井戸、土坑などが検出されており、北・中部に集落が営まれている。平安時代末期から鎌倉時代にかけ、広い範囲で整地が行われ、耕作地などが整備された。鎌倉・室町時代以降、とくに北部で瓦器・土師器・呪符木簡などの遺物、掘立柱建物・井戸などの遺構が数多く検出されており、これは旧植附村へと引き継がれ、東高野街道沿いの西之辻（宿）などの村落も形成されていった。

平成11年10月、岡本元氏の御寄贈と本山公平氏の御協力によって周知の西ノ辻遺跡の石碑の再建がなされ（第２図）、また、平成13年２月２日には、本山氏の御好意によりこの石碑建立地が新たに大阪府の条例に基づく史跡指定地となった。

第２章　位置と環境

西ノ辻遺跡は、生駒山地の西麓部に形成された扇状地上、標高７～20mに位置している。現在の行政区分では東大阪市東山町、弥生町、西石切町３丁目、南荘町、宝町にわたり、東西400m、南北約600mの範囲を有している。現在、遺跡の南西端付近から北東端付近にかけてほぼ南北方向に旧国道170号線、その東に旧東高野街道がほぼ平行して走り、北端には近鉄東大阪線・第二阪奈有料道路を内包する国道308号線が東西方向に延び、その周辺には住宅、会社、工場、商店などが立ち並んで、田畑は一部に残存しているのみである。

西ノ辻遺跡の周辺には、旧石器時代以降の各時代の遺跡が数多く分布している。

旧石器時代の遺跡は、東方の千手寺山・正興寺山・山畑と本遺跡や西接する鬼虎川遺跡などから、ナイフ形石器・翼状剥片などの旧石器が出土している。

縄文時代になると、東接する神並遺跡から早期の押型文土器や土偶・石器と集石遺構などが見つかっており、押型文土器は本遺跡や日下・山畑遺跡などからも出土している。前期には温暖化がピークに達し、鬼虎川遺跡東部などからこの時の海蝕崖が検出されるとともに、前期土器も出土している。後期には南接する鬼虎川遺跡をはじめ、神並・芝ヶ丘・日下や南方の縄手・馬場川遺跡などから後期土器・石器・土偶が出土し、本遺跡からも少数ではあるが検出している。晩期には日下・鬼塚や馬場川などの遺跡に集落が営まれた。

弥生時代になると、鬼虎川遺跡西端に長原式土器と前期土器を包含した貝塚があり、同遺跡中央部および植附遺跡などから前期土器や溝が検出されている。中期になると鬼虎川遺跡には数条の大溝を伴う大集落が形成され、貝塚や多くの方形周溝墓なども検出されている。この状況は平野部の瓜生堂遺跡などでも見られ、やや遅れて本遺跡も中期後半から後期前半に大集落が形成された。後期の遺跡には段上・上六万寺・北鳥池遺跡などがある。

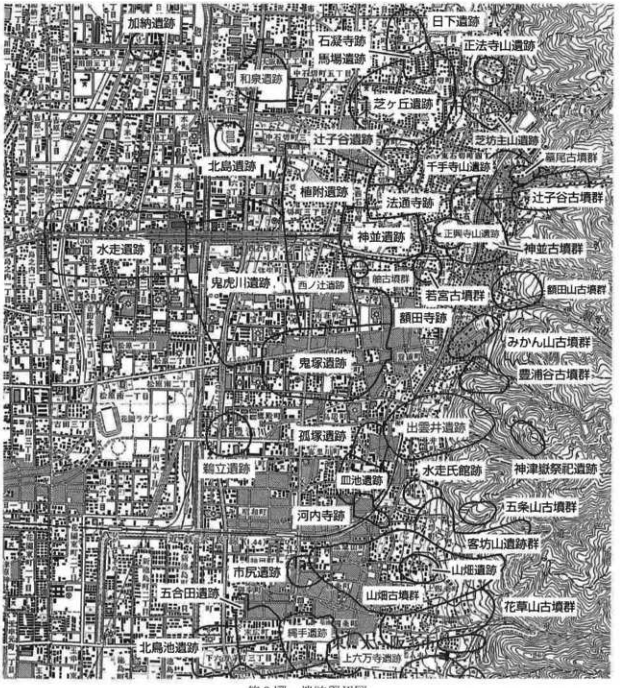
古墳時代前期には鬼虎川遺跡の南部および五合田遺跡など、後期には本遺跡をはじめ鬼虎川・植附・芝ヶ丘・市尻遺跡などに集落が営まれる。前期の古墳は見られないが、北方の塚山古墳をはじめ猪の木塚古墳、客坊山１号墳など中ごろ以降築かれるようになり、神並・出雲井・客坊山・山畑などに群

集墳、横附・段上遺跡に小型低方墳など、後期古墳が山麓部を中心に数多く築造された。

飛鳥から平安時代前期には、河内寺、法通寺、石凝寺、やや後出する客坊廃寺などの寺院が建立され、本遺跡や鬼虎川・神並・鬼塚遺跡などから、集落関連の遺物・遺構が検出されている。

平安時代後半から鎌倉時代には、広い範囲で整地活動が行われた。本遺跡や神並遺跡などから、掘立柱建物・井戸などとともに耕作跡が検出されており、西方の水走遺跡ではこの時期に大掛かりな開発が実施された。

室町時代には、本遺跡をはじめ、暗峠越奈良街道、東高野街道沿いなどに村落が営まれ、その多くは江戸時代以降まで存続した。それとともに、客坊城、平野部の若江城などが戦乱期を中心に築城されたが、安土・桃山時代までにほとんど廃絶してしまった。



第3図　遺跡周辺図

第3章 調査の概要

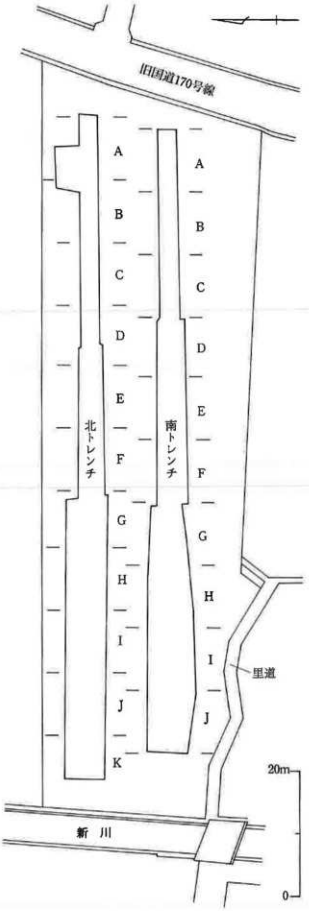
1．調査の方法

調査は埋蔵文化財に支障をきたす杭伏せ部分を対象とし、幅3mの東西方向に細長い北・南2本のトレンチを設定した（北トレンチ東部に一部突出部あり）。ただし、図面上既存建物（図面提出）などに伴う破損部および西側の新川との関係などを配慮してとくに東西端部分は除外した。その結果、上面での北トレンチの長さ約106m、南トレンチの長さ約100mとなった。

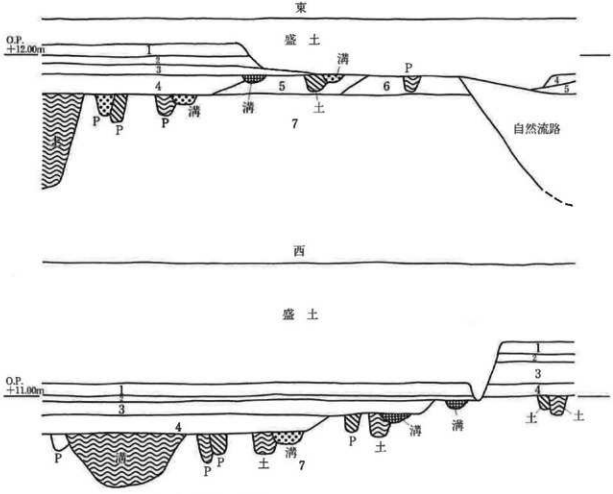
調査対象地は旧国道170号線（旧外環状線）に西接し、東西約120m、南北約35mと東西に長い敷地で、もと軍需関連の工場、のちプラスチック関連の会社とその工場（トープラ）が建っていた。道路面は標高約 O.P.+13mを測るが、敷地全体は道路面から少し傾斜して下り、西端の南北方向に流れる新川までほぼO.P.+12.5m前後に整地され、その上に会社関連の建物などが構築されていた。そのため新川東岸および西岸にはコンクリート擁壁があり、川を挟んだ西岸との間に約1mの高低差が生じている。

試掘調査の結果段階で、調査対象層までの深度が中東部で GL－0.3m、西部で GL－1.5m、と西へいくほど盛土の多いことが確認されていた。そのため東西方向に細長いトレンチは、調査対象幅は3mであるが、安全傾斜を考慮して平面幅は基本的に3m、4.5m、6mの3段階に分けた。また、調査に伴う掘削残土は敷地内において処理する必要があったことから、両トレンチとも基本的に東西2回（1・2段階部分と3段階部分）に分け反転方法による調査を行った。

調査に際し国土座標などの委託ができなかったため、両トレンチとも任意にトレンチ東端から10m間隔で地区をA～Kに設定して区画し―調査途中で調整のため北トレンチC地



第4図　調査トレンチ位置および地区割設定図



第5図　基本層位図

区、南トレンチD地区のみ9.4mになっている—調査を実施した（第4図参照）。

2．層序

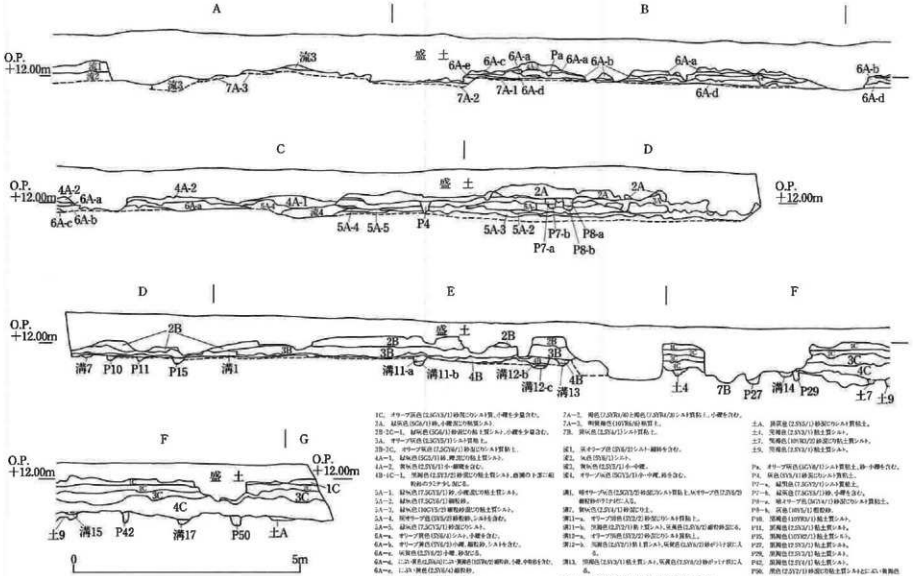
本調査地内は調査開始時にほぼ平坦であったが（O.P.+12.5m前後）、後に詳述するように各時代によって地形・土地利用の様相はかなり違っていた。縄文時代以前には北東から南西方向に流れていた自然流路、幾度かの中断はあるが弥生～奈良・平安時代前半における集落域の、中世前半における大掛かりな整地（第4層）、近世から近代には東から西に向かっての3段以上の棚田が形成されていた—旧・既存建物などの建築工事および解体時にその多くは撹乱されてはいたが現況地盤から深度の異なる近世から近代にわたる耕作土または床土を確認（第1・2・3層）—、建築工事に伴う盛土。各層とも土色・質などは調査地域内で若干相違し、細分した。基本層位には各層とも主体となる層名を記しておく（詳細は第6～9図参照）。

基本層位（第5図）

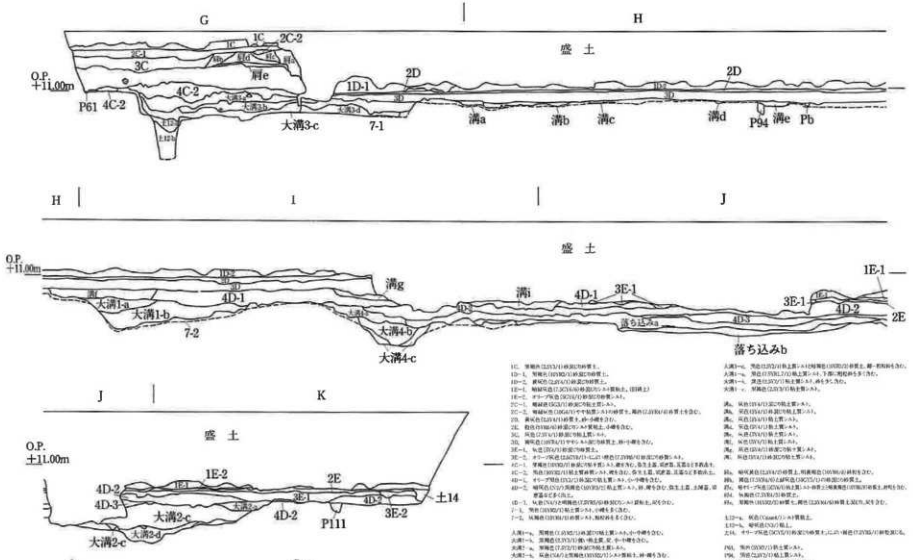
第1層　耕土（近代）　黒褐色砂混じり粘質土・暗緑灰色砂混じりシルト質土。

第2層　床土（近代）　橙色・褐灰色の砂混じりシルト質粘土。
縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器などの小・細片、瓦丁片など出土。

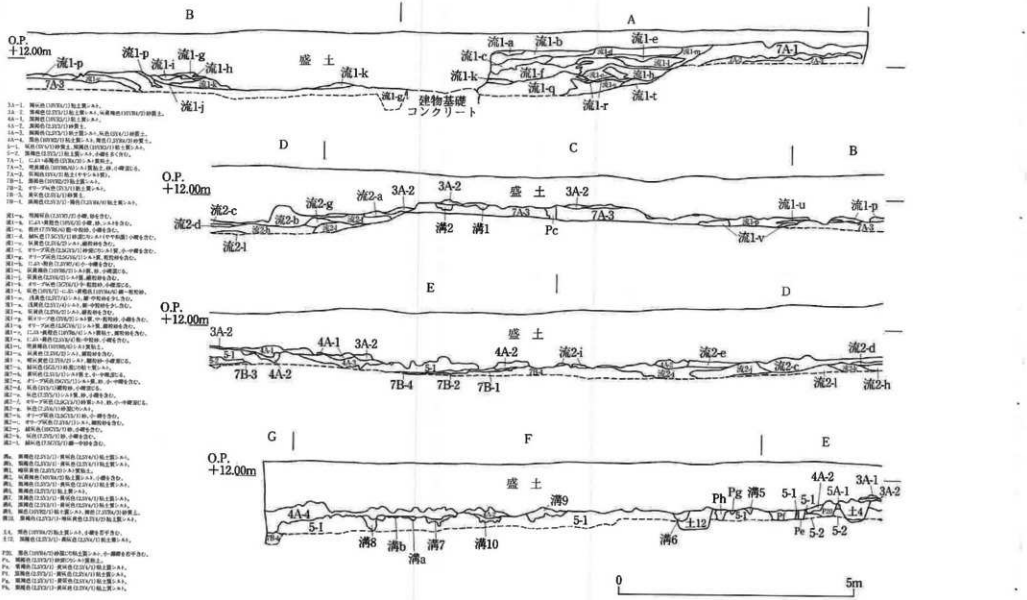
第3層　耕土（近世）　暗灰黄色・灰色の砂混じり粘土質シルト。



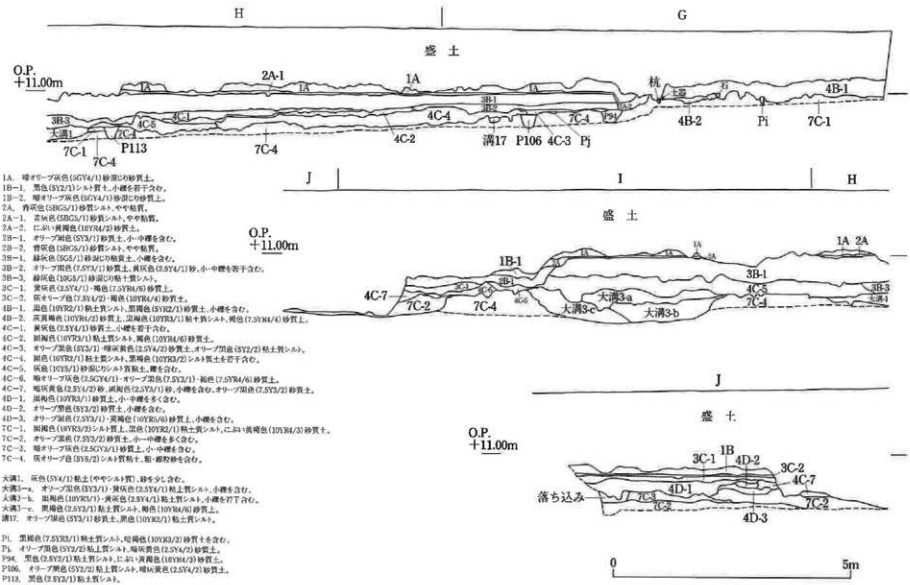
第6図　北トレンチ南断面図1



第７図　北トレンチ南断面図２



第8図　南トレンチ北断面図1



1A. 暗オリーブ灰色(5GY4/1)砂混じり粉質土。
1B一1. 黒色(5Y2/1)シルト質土、小礫を若干含む。
1B一2. 暗オリーブ灰色(5GY4/1)砂混じり粉質土。
2A. 青灰色(5BG5/1)粉質シルト、やや粘質。
2A一1. 青灰色(5BG5/1)粉質シルト、やや粘質。
2A一2. にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土。
3B一1. オリーブ褐色(5Y3/1)粉質土、小~中礫を含む。
3B一2. 青灰色(5BG5/1)粉質シルト、やや粘質。
3B一3. 緑灰色(5G5/1)砂混じり粘質土、小礫を含む。
3B一3. オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘質土、褐灰色(2.5Y4/1)砂、小~中礫を若干含む。
3B一3. 緑灰色(10G5/1)砂混じり粘土質シルト。
3C一1. 黄灰色(2.5Y4/1)・褐色(7.5YR4/6)砂質土。
3C一2. 灰オリーブ色(7.5Y4/2)・褐色(10YR4/4)砂質土。
4B一1. 黒色(10YR2/1)粘土質シルト、黒褐色(5YR2/1)砂質土、小礫を含む。
4B一2. 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土、黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト、褐色(7.5YR4/4)砂質土。
4C一1. 黄灰色(2.5Y4/1)砂質土、小礫を若干含む。
4C一2. 黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト、褐色(10YR4/6)砂質土。
4C一3. オリーブ黒色(5Y3/1)・暗赤黄色(2.5Y4/2)砂質土、オリーブ黒色(5Y2/2)粘土質シルト。
4C一4. 黒色(10YR3/1)粘土質シルト、黒褐色(10YR3/2)シルト質土を若干含む。
4C一5. 灰色(10Y5/1)砂混じりシルト質粘土、礫を含む。
4C一6. 暗オリーブ灰色(5.5GY4/1)・オリーブ黒色(7.5Y3/1)・褐色(7.5YR4/6)砂質土。
4C一7. 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂、褐灰色(2.5Y3/1)砂、小礫を含む、オリーブ黒色(7.5Y3/2)砂質土。
4D一1. 黒褐色(10YR3/1)砂質土、小~中礫を多く含む。
4D一2. オリーブ黒色(5Y3/2)砂質土、小礫を含む。
4D一3. オリーブ褐色(2.5Y3/1)・黄褐色(10YR5/6)砂質土、小礫を含む。
7C一1. 黒褐色(10YR3/2)シルト質土、黒色(N1/)粘土質シルト、にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土。
7C一2. オリーブ黒色(7.5Y3/2)砂質土、小~中礫を多く含む。
7C一3. 暗オリーブ灰色(2.5GY5/1)砂質土、小~中礫を含む。
7C一4. 灰オリーブ色(5Y5/2)シルト質粘土、粘~細砂砂を含む。

大溝1. 灰色(5Y4/1)粘土(ややシルト質)、砂を少し含む。
大溝3一a. オリーブ黒色(5Y3/1)・黄灰色(2.5Y4/1)粘土質シルト、小礫を含む。
大溝3一b. 黒褐色(10YR3/1)・黄灰色(2.5Y4/1)粘土質シルト、小礫を若干含む。
大溝3一c. 黒褐色(2.5Y2/1)粘土質シルト、褐色(10YR4/6)砂質土。
溝17. オリーブ黒色(5Y3/1)砂質土、黒色(10YR2/1)粘土質シルト。

Pi. 黒褐色(7.5YR3/1)粘土質シルト、暗褐色(10YR3/3)砂質土を含む。
Pj. オリーブ褐色(5Y3/2)粘土質シルト、暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土。
P94. 黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト、にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土。
P106. オリーブ黒色(5Y2/2)粘土質シルト、暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土。
P113. 黒色(2.5Y3/1)粘土質シルト。

落ち込み. 暗オリーブ灰色(5GY3/1)砂質土、小礫を含む。

第9図　南トレンチ北断面図2

縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、サヌカイトなどの小・細片、寛永通宝・釘・刀子各片出土。

第4層　整地土（中世前半）　黒褐色・オリーブ褐色の砂・礫混じり粘土質。
縄文土器、弥生土器、石器、須恵器、土師器、瓦器、サヌカイト片、動物遺体など多量に出土。

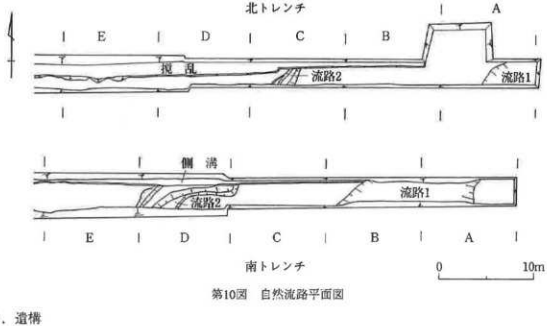
第5層　自然堆積層　緑灰色粘土質シルト、中央部付近のみで確認。
無遺物、弥生から中世の遺構検出面。

第6層　地山上層　オリーブ黄色シルト・小礫混じりシルト質粘土。
北トレンチ東部・南トレンチ西南部などで確認。無遺物、自然流路、弥生時代から中世の遺構検出面。

第7層　地山　黒褐色・黄灰色・灰褐色の砂混じりシルト質粘土。
無遺物、弥生時代から中世の遺構検出面。

第1表　地区・時代別遺構表

地区 / トレンチ	(西) K J I	H G	F E	D C	B A (東)	時代
北トレンチ	———	———	———	自然流路	自然流路	縄文以前
	ピット・大溝	ピット・土坑・大溝	ピット・土坑	ピット	———	弥　生
	落ち込み・土坑・ピット	ピット	ピット・土坑	ピット	———	古　墳
	———	ピット	ピット・土坑	———	———	奈良・平安
	———	耕作溝	耕作溝	———	———	平安後期
	整地	整地	整地	整地	———	鎌　倉
	耕作溝	耕作溝	耕作溝	耕作溝	———	室　町
	耕土	耕土	耕土	耕土	———	江　戸
	耕土・床土	耕土・床土	耕土・床土	床土	———	明治～
	工場から共同住宅					現　代
南トレンチ	———	———	———	自然流路	自然流路	縄文以前
	ピット・大溝	大溝・方形周溝墓・溝・ピット	ピット・土坑	ピット	———	弥　生
	土坑	ピット・溝	建物・ピット・土坑	———	———	古　墳
	———	ピット	土坑	———	———	奈良・平安
	———	———	耕作溝	耕作溝	———	平安後期
	整地	整地	整地	整地（極めて少）	———	鎌倉
	———	———	———	———	———	室　町
	耕土	整地・耕土	———	———	———	江　戸
	耕土・床土	耕土・床土	———	———	———	明治～
	工場から共同住宅					現　代



第10図　自然流路平面図

3．遺構

遺構は、後世の削平・撹乱などにより、そのほとんどを第５～７層（地山）の自然層上面において、時代の異なるものを同一に検出した。それは、縄文時代以前の自然流路、弥生時代の大溝・方形周溝墓・井戸・土坑・ピット・溝、古墳時代の掘立柱建物・井戸・土坑・ピット、奈良・平安時代前半の土坑・ピット、平安時代後半から末頃の溝などである。切り合い関係、出土遺物、土色・土質などで時代・時期を明確にできたものもあるが、不明なものも少なくない。また調査地の東部を除く中・西部では中世前半の整地層と中世から近代に亘る耕作跡（耕土・床土）などを検出した。以下、時代ごとに主な遺構の概略を記す。

a．縄文時代以前（第10図、図版２）

調査地の東側において地山直上で、縄文時代以前の自然流路を２筋確認した。

流路１　北トレンチＡ地区東部においてゆるやかにカーブして北東から南西方向にのびる自然流路の西肩のみを検出。検出幅5.7m、深さ1.5m以上。Ａ地区東側の大半は流路内。上部は後世、とくに近代以降の建築物などによって撹乱されていた。残存部の上層はシルトを主体とし（流１・流２）、下層は黄褐色の小・中礫が厚く堆積していた（流３）。湧水のため最底部まで確認できず、遺物も検出できなかった。

南トレンチにおいてはこの流路１を、Ａ地区では「く」の字に屈折してほぼ南北方向に延びる東肩、Ｂ地区では北東から南西方向に延びる西肩を検出した。検出幅12～14m、深さ２m以上。棚田形成時の削平や近代以降の建築物―コンクリート基礎残存―などによって中央以西は大きく撹乱されていた。流路内はシルト、砂、礫などの堆積が見られ（第６図、流１～４）、1.5～２m掘削したが、湧水が多く最底部まで確認できず、人工的遺物は出土しなかった。

流路２　北トレンチＤ地区で北北東から南西（東肩）・南南西（西肩）に延びる自然流路を検出した。検出幅1.1～2.5m、深さ0.35～１mを測った。流路内はオリーブ灰色砂混じり小・中礫（流４）であったが、遺物は出土しなかった。

南トレンチにおいてこの流路２をＣ地区西端からＥ地区東端にかけて検出した。北壁側幅10.3m、南壁側幅４m、深さ１m以上―湧水のため完掘できず―を測った。東肩は北北東からトレンチ内でＳ字状に大きく折れて南南西方向に延び、斜面は２段に落ち南側ではテラス状をなしていた。これに対

し西肩は北東から南西方向に延び、斜面は段をなしていた。流路内はシルト、砂、礫などが堆積していたが（第８図、流１－ａ～ｖ、流２ａ～ｉ）、人工的遺物は出土しなかった。流路２は北・南トレンチ内から南トレンチ北側で蛇行していると思われる。

今回検出した２筋の流路（流路１・２）は、その間を後世の撹乱などによって削平されていることなどから、その関係は不明であるが、本来は１つの流路とも、２股に分かれ主流（流路１）と支流（流路２）とみなすこともできる。流路は堆積層内から全く遺物を検出していないこと、流路埋没後の堆積層（第５層）上面で弥生時代以降の遺構を検出したことなどから縄文時代以前のものと思われる。現在、本調査地の東・南側を北東から南西方向に流れ、新川にそそいでいる鬼虎川の縄文時代以前時の流路をなすものと考えられる。

第４章のｂ・ｃにおいて後述するように、弥生時代以降の遺構および中世の整地層などから、縄文時代の遺物―大半は突帯文土器―を検出しているが、縄文時代にあたる明確な遺構といえるものは確認できなかった。

ｂ．弥生時代

遺構は地山および自然流路堆没後の自然堆積層（南トレンチＤ地区第５層など）上面において検出した。この時代の遺構としては、大溝、方形周溝墓、井戸、ピット、土坑、溝などを確認した。遺構は検出状況などから２時期以上に分かれる。以下、トレンチごとに大溝形成以前と思われるものを１期、大溝形成並行期を２期として分け、明確な遺構についてのみ記す。

１期

北トレンチ（第11・12図、図版４）

土坑12　Ｇ地区大溝３内東南隅の底で検出した。径0.57ｍ、深さ0.94ｍの円筒形を呈していた。土坑内はａ．灰色シルト質粘土、ｂ．暗灰色粘土（下部は粗～細粒砂を含む）に分かれ、弥生土器片とともに石鏃（第６表No.８）などが出土した。井戸。

P60・65・101～105・118　大溝３内外で検出した。P118以外、間隔は一定ではないが、ほぼ東西方向に並び、埋土も灰褐色（5Y4/2）砂混じりシルトで、一連のものと思われる。

南トレンチ（第12図、図版10）

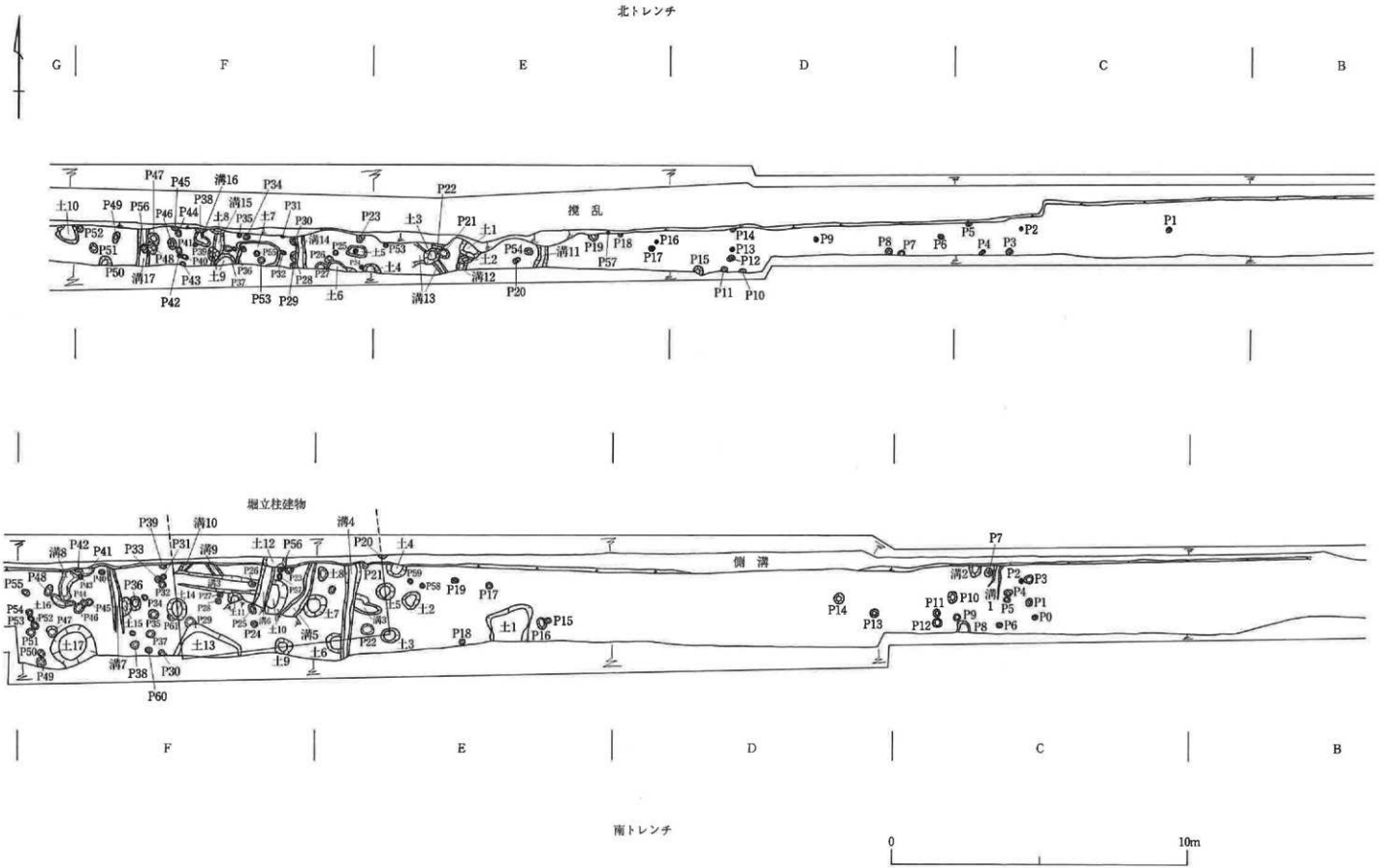
大溝１の底で検出したピット群（P115～120・122）、大溝２内のピット（P110）または切断されている溝（溝７）・ピット（P107～109）なども検出したが、明確な状況・性格は不明。

２期

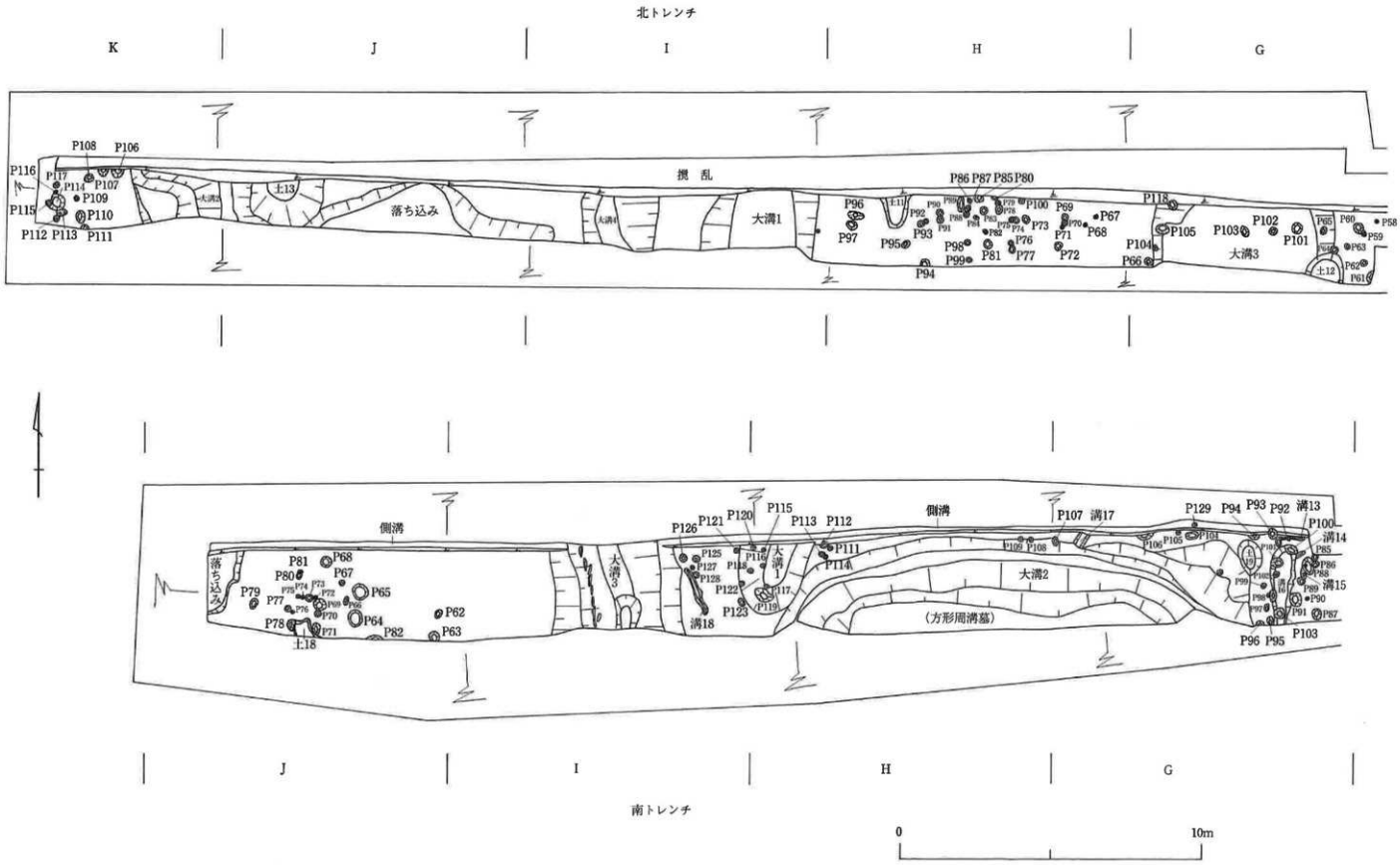
北トレンチ（第11図、図版４～６）

大溝１　Ｉ地区東よりで検出した南北方向に延びる溝。東肩部は溝ｆによって削られていたが、検出幅3.7ｍ、最深0.68ｍを測った。東斜面がやや急なのに対し、西斜面は浅い凹凸のある緩やかな傾斜になっていた。溝内は東上部にａ．中・細礫を含む黒褐色砂混じりシルト、ｂ．下部がやや粘質の強い中・小礫、炭を含む黒褐色粘土質シルト。遺物はａからも弥生土器小・細片が出土したが、大半はｂからで、高坏（137・142）などの弥生土器、土製紡錘車（98）、縄文土器片（197・200）、石包丁（17・19）、削器（第７表No.79）、サヌカイト片（第７表No.40・48・53）、イノシシ（239・240など）・シカ（第９表５・６）などの動物遺体、ヒトの脛骨（第９表４）であった。溝底面は北側が低く、活用時には若干の水があったと思われる。溝は出土遺物などから中期後半には埋没したものと考えられる。

大溝２　Ｊ地区で検出した南北方向に延びる溝。東肩の大半は土坑13によって切られていたが、南断面近くで残存最高部の一部を確認した。検出幅5.3ｍ、最深0.8ｍを測った。現在の撹乱によって



第11図　弥生～奈良・平安時代遺構平面図1



第12図　弥生～奈良・平安時代遺構平面図2

東斜面はえぐられていて詳細は不明であるが、西斜面にテラス状の平坦部があり浅い凹凸をもつ逆山形を呈していた。溝内はａ．黒褐色砂混じり粘土質、ｂ．砂礫を含む灰色・黒褐色シルト質粘土、ｃ．暗灰色砂混じりシルト質粘土、ｄ．砂礫を含む灰色・暗灰黄色粘土の４層に分かれ、ａ～ｃは埋土、ｄは堆積土である。遺物はｃ・ｄ内にはほとんどなく、ａ内から若干の弥生土器片を検出したほか、大半のものはｄからで、高坏（135）などの弥生土器、縄文土器浅鉢（205）、サヌカイト片（第７表No.56）、ヒトの頭骨片（第９表23）が出土した。溝底面は北側が低く、活用時には水が流れていたと思われる。溝は出土遺物などから中期末には埋没したものと考えられる。

大溝３　Ｇ地区で検出した南北方向に延びる溝。検出幅 5.8～6.4m、最深 0.8mを測った。溝断面はほぼ平たい逆台形を呈し、南西部分に黒褐色粘土質シルトと暗褐色砂質土の混土（ｄ）の隆起が見られた。その他は、ａ．黒色砂混じり粘土質シルト、ｂ．やや粘質の黒色砂混じり粘質土、ｃ．オリーブ黒色砂混じりシルト質粘土に分かれていた。遺物はａ・ｂから若干の弥生土器片を検出したが、大半はｃからで壺（127・128）高坏（134・143・144）脚台（136・139）甕（140・141・146・147）などの弥生土器、土製紡錘車（129）、削器（第６表No.36）、サヌカイトの石核・剥片（第６表No.46・54・74）、動物遺体片（第９表60・61）が出土した。溝は出土遺物などから中期末には埋没したものと考えられる。

大溝４　Ｉ地区で検出し、大溝１の西にほぼ平行して南北に延びる溝。西肩は落ち込みなどで一部削平されていた。検出幅 2.4～2.6m、最深 0.9mを測った。断面は逆台形を呈し、溝底面は北側がやや低かった。溝内はａ．下部に粗粒砂を含む黒色粘土質シルト、ｂ．やや粘質の黒褐色粘土質シルト、ｃ．黒褐色粘土質シルトであった。遺物は弥生土器片（甕・鉢・高坏）などで、ａ・ｃから若干検出したが、多くはｂから出土した。溝は出土遺物などから中期末には埋没したものと考えられる。

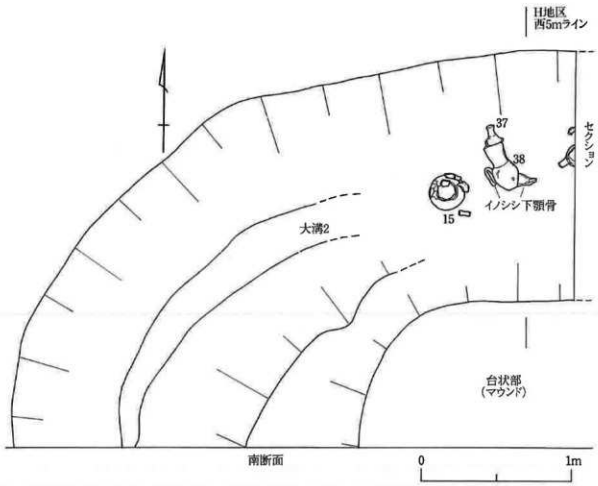
南トレンチ（第 12図、図版７～10）

土坑 17　Ｆ地区の南西部で検出した。径1.5m、深さ 1.31mの円筒形を呈する。土坑内はオリーブ褐色（2.5Y4/3）砂混じりシルト質粘土で、下部は砂の包有が多くなり湧水。遺物は壺・甕などの弥生土器片が出土。中期後半には埋没したと考えられる。井戸。

大溝１　Ｈ地区西端で検出した南北方向の溝。検出長 2.3m、幅 2.5m、深さ 0.3mを測り、トレンチ内で終わっていた。断面浅いボール状を呈し、溝内は砂を少し含む灰色粘土で弥生土器片が少量出土した。溝は北トレンチの大溝１に対応するものと考えられるが、かなり浅く、後述する大溝２との関係などから、その接触部近くで終息させたものと思われる。溝は出土遺物などから中期末には埋没したものと考えられる。

大溝２・方形周溝墓　Ｇ・Ｈ地区で検出し、平面コ字形を呈する。検出の東西長14.5m、（北溝）、南北長西側２m（西溝）・東側2.5m（東溝）、幅3.8～2.2m、深さ0.8～1.07mを測り、溝底は東と西で約0.4mの高低差があった。溝は北東角にテラス状の段が見られるが、断面は段を有するＶ字形を呈し、下部約１／３は堆積土（西溝ａ～ｄ、東溝ａ～ｃ）でほとんど遺物を含まず、上部埋土の特に下層（西溝ｅ、東溝ｆ）からは弥生土器をはじめ多量の遺物が出土した―第14図参照―。遺物は弥生土器が最も多く、壺・高坏・鉢・甕・器台などで（第18～28図）、その他縄文土器（172・175・178・179・184～187・190・193～196・205）、石器―石錐（８）・石槍（第７表15・19・29）・石鏃（第７表No.10）・削器（第７表No.28・75・81・84）などの打製、石包丁（20）・石斧（21）などの磨製―、壺・鉢などのミニチュア土器、骨製刺突具、イノシシ・シカ・ヘビ・トリなど（第９表24～37）の動物遺体、サヌカイト石核（第７表No.64）であった。

大溝外の地山面は東と西で約 0.5mの高低差があり、大溝外南西部には盛土が約 0.3m見られ



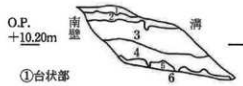
第13図　南トレンチ大溝２内土器出土状況平面図（部分）

（第14図③Ⅰ・Ⅱ）、西側に溝掘削時の土を盛り上げて整地し、高さを調節したものと考えられる。

このコ字形の大溝は、方形周溝墓の北溝と西・東溝の一部と考えられる。周溝に画された残存する台状部はほとんど自然堆積層―第６・７層（第14図①）で大溝埋没時および中世前半の整地・近世以降の耕作などによって盛土の大半は削平されてしまっていた。残存する斜面は２～３段の段をなし、検出の東西底辺13.3m、残存上辺10.1m、南北底辺2.4m、残存上辺0.75m、高さ0.85～1.07mを測った。台状部は北端部のみで埋葬施設は検出できなかった。

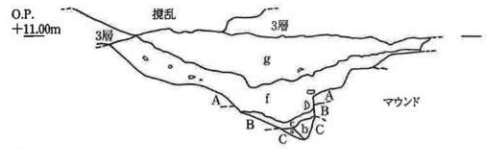
大溝の北西部の埋土内から検出した供献土器と考えられる土器群（第13図）の長頸の広口壷―体部に穿孔―（38）や16～18の広口壷のように口縁端部を拡張しない壷などが見られ、方形周溝墓は中期前半の後葉ごろに構築され、溝は中期末には埋没し、埋葬施設とともに台状部も削平されたものと考えられる。

大溝３　Ⅰ地区で検出した南北方向に延びる溝。検出の幅3.9～4.4m、最深0.72mを測った。溝掘削時は断面浅いボール状を呈していたが、底面西側に長さ0.5～0.61m、幅0.1～0.15m、深さ0.15～0.25mのレンズ状のピットが南北方向に並び―埋土は黒褐色（10YR3/1）砂混じり土―その上に西斜面を覆うように黒褐色粘土質シルトと褐色砂質土の混土（ｃ）があった。これは板木を差し、埋め込んで立て並べられていたものと思われる。活用時の溝幅は3.1～3.5mで溝底は一部さらに掘り込まれ南側は低かった。溝内は２層に分かれ、ａ．オリーブ黒色・黄灰色粘土質シルト、ｂ．黒褐色・黄灰色粘土質シルトとも埋土であるが、ｂ層下部は砂の包含が見られ、やや粘質であった。遺物は弥生



①台状部

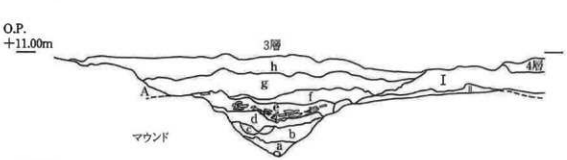
1. 緑灰色(10GY5/1)砂混じりシルト質粘土上小礫(多く含む)
   混層。弥生土器小片出土。
2. オリーブ灰色(5GY6/1)・青灰色(5BG6/1)シルト質粘土。
   小礫・炭を少量混じり。灰オリーブ色(5Y5/2)細粒砂を含む。
   (1・2はマウンドの堆土。)
3. 緑灰色(10GY6/1)細・小礫混じりシルト質粘土。
4. 灰オリーブ色(5Y4/2)細粒砂。オリーブ灰色(5GY5/1)粘土。
5. 明灰黄色(2.5Y4/2)小礫混じり粗・中粒砂。
6. 灰褐色(7.5YR4/2)シルト質粘土。



②東溝

a. 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト質粘土。
b. 灰オリーブ色(7.5Y6/2)砂混じりシルトと砂〜小礫混じる。
   暗オリーブ灰色(5GY4/1)シルト質粘土。
c. 灰色(7.5Y5/1)シルト質粘土。
   (a〜cは堆積土。)
f. 灰色(10Y5/1)砂〜中礫混じりシルト質粘土。炭、弥生土器
   を多く含む。灰オリーブ色(5Y4/1)シルト質細粒砂含む。
g. 灰色(Value4/)シルト質粘土。砂〜小・中礫を少量混じる。
   炭、弥生土器を含む。暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒砂を多く含む。
   (f・gは埋土。)

A. 灰色(10Y5/1)と暗オリーブ灰色(2.5GY7/1)
   と浅黄色(7.5Y5/1)などの混層。小礫を多く含む。
B. 灰オリーブ色(7.5Y6/2)砂混じりシルト質。
   にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルト。
C. にぶい赤褐色(5YR4/3)シルト質粘土。



③西溝

a. 黒色(2.5GY2/1)小礫混じりシルト質粘土。
b. 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)砂混じりシルト質粘土。
c. 灰色(5Y4/1)砂混じりシルト質粘土(粘質強)。
d. 暗オリーブ灰色(5GY4/1)砂混じり粘土(ややシルト質)。
   (a〜dは後積土)
e. 灰色(Value4/)粘土質シルト、砂(中〜細粒)が多く混じる。
f. 緑灰色(10GY5/1)砂〜小礫混じりシルト質粘土。
g. 灰色(7.5Y5/1)砂〜小礫混じりシルト質粘土。
h. 緑灰色(7.5GY5/1)砂〜小礫混じりシルト質粘土。
   (e〜hは埋土、特にe,hから弥生土器片多量出土。)

I. 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)砂混じりシ
   ルト質粘土。小礫、炭を少量含む。
II. 暗オリーブ灰色(5GY4/1)砂混じりシル
   ト質粘土。
   (I・IIは整地土。
A. マウンドの盛土　緑灰色(10GY5/1)
   砂混じりシルト質粘土と小礫の混層

第14図　南トレンチ方形周溝墓台状部および大溝２断面図

土器（壷・鉢・甕）とヒトの右足骨（第９表57〜59）などが出土した。出土遺物などから中期末には埋没したものと考えられる。

その他、第２表に見られるように、両トレンチともＣ地区以西においてこの時代のピット・土坑・溝などを数多く検出したが、性格の明確なものはほとんどなく、大溝との関係も不詳である。

c．古墳時代（第11・12図、図版５～７）

北トレンチ

落ち込み　Ⅰ～Ｊ地区で検出した。検出の東西長10.4m、南北長1.15m、最深0.4mを測り、平面横長の三角形を呈していた。東端部で大溝４の西肩の一部を切り込み、西端部は逆に後述する土坑13によって削り取られていた。落ち込み内はａ．暗青灰色砂混じり粘土質シルト、ｂ．オリーブ灰色砂混じりシルト質粘土に分かれていた。遺物は縄文土器（201・202・207）、弥生土器（広口壷126・131―ａ層、125―ｂ層、鉢138―ｂ層、甕140・145―ａ層など）、土製円板（97）、石器（削器）、サヌカイト片、イノシシ・シカなどの動物遺体と坏・甕などの須恵器が出土した。弥生時代以前の遺物も多く含んでいたが、古墳時代後期の遺構である。性格不詳。

土坑13　Ｊ地区で検出した。大溝２東肩部および落ち込み西端部を切り込んでいた。径2.4m、深さ1.29mを測る、やや尻すぼみの円筒形を呈していた。土坑内は黒褐色（2.5Y3/1）砂混じりシルト質粘土で、下部は砂の包有が多く、湧水。遺物は弥生土器（鉢133など）、須恵器甕片などが出土した。古墳時代後半頃の井戸。

南トレンチ

Ｅ地区　掘立柱建物　Ｐ20―土坑５―土坑３の東列、土坑３―土坑６―土坑９の南列、土坑５に対応する西列の土坑14を検出した。南東部の柱穴土坑２基は土坑13によって消滅したと考えられ、１間約1.8mで東西４間、南北２間以上の建物であったと思われる。各ピット・土坑内はほとんど小・細礫を含む黒色（10YR4/2）砂混じり粘質土で、土坑５の動物遺体片（ウマなど 第９表64・66）縄文土器、弥生土器などとともに土師器・須恵器の破片が出土した。各遺構の計測値、出土遺物は第２表参照。

その他、第２表などに見られるように、他にもピット・土坑などを多く検出したが、建物など性格の明らかなものは確認できなかった。

ｄ．奈良・平安時代前半（第11・12図、図版３・７）

この時代の明確な遺構は以下の通りである。各遺構の計測値と出土遺物は第２表参照。

北トレンチ　Ｆ地区―土坑７―黒褐色砂混じり粘土質シルト弥生土器、土師器各小片と小型トリの長骨出土、ピット２（Ｐ24・27）―黒色（5Y2/1）砂混じりシルト質粘土。Ｈ地区―ピット２（Ｐ74・77）―オリーブ黒色（5Y3/1）砂混じりシルト質粘土。

南トレンチ　Ｆ地区の土坑13―黒褐色（10YR3/2）砂混じり粘土質シルト。Ｇ地区のピット２基（Ｐ85・95）―オリーブ黒色（5Y3/1）砂混じりシルト質土。

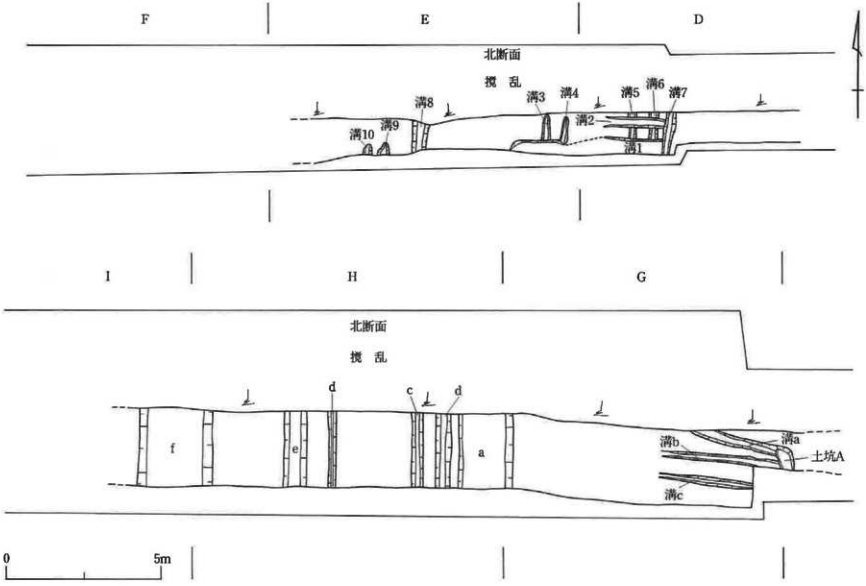
今回検出した遺構は少なく、性格も不詳である。しかし、本調査地の北東で実施された第43次発掘調査において、この時代の井戸・柱穴・土坑などが検出されており、この地域に集落が営まれていて、その一端をなすものと考えられる。

ｅ．中世期（平安時代後半から室町時代）

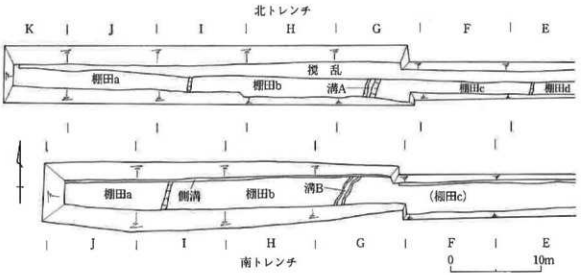
この時期の遺構は明確なピットは極めて少なく、ほとんどが南北または東西方向の溝であった。後世の削平・撹乱により両トレンチともＢ地区以東には遺構がなかった。これらの溝遺構のほとんどは耕作に伴う溝（鋤溝など）であり、大がかりな整地の前と後の２時期に大きく分けられる。各遺構の計測値および出土遺物については第２表を参照。

１期（第11・15図、図版３・11）

整地層（第４層）除去後、地山・地山相当層（第５～７層）および奈良・平安時代以前の遺構上面で検出した。



第15図　北トレンチ中世遺構平面図



第16図　近世棚田平面図

北トレンチ　D～F地区で検出した南北方向の溝14条（溝３～15・17）とそれに先行する土坑２―暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）砂混じりシルト質粘土―。各溝とも上部は第４層が入り込んでおり（埋土）、整地時直前まで活用されていたことが解る。下部はほとんど黒褐色粘土質シルトで、灰黄色砂がラミナ状に含んでいた。

F地区西端からG地区の土坑１基（土坑A）と３条の溝（溝A・B・C）。土坑・溝内の埋土は黄灰色砂混じりシルト質粘土であった。

南トレンチ　C地区の南北方向の２条の溝（溝１・２）は、溝内灰オリーブ色細粒砂がラミナ状に入る黒褐色粘土質シルトであった。

E・F地区のほぼ東西方向に延びる溝３―オリーブ灰色（2.5GY4/1）砂混じりシルト―とそれに先行する南北方向の溝４条（溝４～７）と土坑10―暗褐色（10YR3/3）砂混じりシルト質土。溝４～７内は灰黄色砂がラミナ状に入る黒褐色粘土質シルトであった。

溝はいずれもほとんど南北・東西方向に走り、条里制の施行に基づく耕作溝であることを窺わせている。（第38図＜奈良・平安時代＞、付図参照）。これらの遺構は出土遺物などから平安時代後半ごろのものと思われる。

整地

東側（両トレンチのほぼB地区以東）は後世の攪乱などによって削平されていたが、C地区以西のほぼ全域に広がる第４層。第４層は、黒褐色（10YR3/1）砂混じり粘土質シルトを主体とするが、北トレンチでは２種（中央付近）・３種（西側）、南トレンチでは３種（東側）・８種（西側）に細分できた（第６～９図参照）。これは西または南に向かう、地山・旧地形の傾斜状況などの違いによるもので、同一の性格のものである。これは特に東側にあった縄文時代から平安時代に亘る生活層を削り取った土（客土）を持ち込んで整地したものであろう。

整地土内からは、縄文土器―深鉢（177）・浅鉢（183・189・191・192・206）―、弥生土器―壷（21）・鉢（72）・高坏（87・89・90）や153・160・161など―、石器―石鏃（１・５）石錐（６・７）・石槍（12・13・14）や削器（第６表No.27・30～32）など―、須恵器、土師器、瓦器、サヌカイト片、動物遺体（ウマなど 第９表70～72）などが多量に出土した。出土遺物および検出状況からこの整地は平安時代末期から鎌倉時代前半ごろと考えられる。

２期（第15図、図版11）

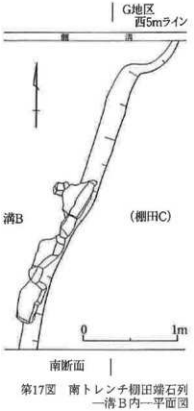
整地後の遺構は近世以降の耕作に伴う整地、近世後半以後の撹乱などによって削平され、ほとんど残存していなかった。そのため、この時期の遺構は北トレンチのＥ・Ｄ地区およびＨ・Ｉ地区で確認できただけである。

北トレンチ　Ｅ・Ｄ地区で東西方向の溝２条（溝１・２）と、それに先行する南北方向の溝８条（溝３～10）を検出。

Ｈ・Ｉ地区では南北方向の溝６条（溝ａ～ｆ）を検出。溝ａ・ｆは幅1.8～2.3ｍで深さ0.2～0.1ｍを測る幅広でその間に幅0.6～0.2ｍ、深さ0.1ｍ以下のｂ・ｃの溝があり、畑の１区画をなしていたものと考えられる。遺物が検出しなかった溝もあるが、弥生土器・須恵器の小細片とともに土師器皿片が出土したものがあった。出土遺物および検出状況などから室町時代ごろのものと思われる。

ｆ．近世・近代

この項ではより明確である近代の棚田状態を先に記し、その後に近世の状況を述べたいと思う。東側は近代後半以降の工場建設などによる削平によって棚田状況を確認することはできなかったが、北トレンチで４段、南トレンチで２段の近代の棚田に伴う耕作土または床土を検出することができた。耕土の上部はほとんど撹乱されていたことから、床土状況―床土上面の高さ―をもとに西側から記していくことにする（第16図参照）。



第17図　南トレンチ棚田端石列―溝Ｂ内―平面図

北トレンチ　耕作土・床土ともＤ地区の大半から東は残存していなかった。１段目―Ｉ地区西７ｍあたりから西の段、床土上面O.P.+10.4ｍ前後、東西幅19ｍの棚田＝棚田ａ。２段目―Ｇ地区6.8ｍあたりからＩ地区西6.5ｍあたりまでの段、床土上面O.P.+10.9ｍ前後、東西幅約19ｍの棚田＝棚田ｂ。３段目―Ｆ地区西８ｍあたりからＧ地区５ｍあたりまでの段、床土上面O.P.+11.8ｍ前後、東西幅約17.5ｍ＝棚田ｃ。４段目―Ｄ地区西7.3ｍ以東は耕土・床土ともなしで、Ｅ地区7.8ｍあたりまでの段、床土上面O.P.+12.1ｍ前後、東西幅10.5ｍ以上の棚田＝棚田ｄ。

南トレンチ　Ｇ地区中央部より以東は床土すらほとんどなく、残存状態は北トレンチよりも悪かった。１段目―Ｉ地区西から西の段、床土上面O.P.+10.4ｍ前後の棚田＝棚田ａ。Ｇ地区西からＩ地区中央付近までの段、床土上面O.P.+11ｍ前後、東西幅19ｍの棚田＝棚田ｂ。棚田ｂと棚田ｃの間には１ｍ近くの段差があるとともに、棚田ｂからの幅約0.7ｍ、深さ0.5ｍを測る北北東から南南西に延びる溝―溝Ａ・Ｂが牽たれていた。溝Ａ内には杭を打ってあるところ（第７図）、溝Ｂには石列を配していたところも見られた（第17図　図版11）。石列は棚田ｃの南斜面下部に自然石を立て掛けるようにして並べられていたが、北側は後世の撹乱で肩とも破損していた。溝内の大半は近代の整地土で埋っており、工場建設直前まで活用していたことが解る。

棚田ａ・ｂ・ｃはそのまま近世段階まで遡るが、ｃ・ｄ間の段差はこの時期にはなかった。棚田ｂ・ｃ間の段差・溝は明らかに近世段階に構築されたものであり、北トレンチの棚田ｃの西端には検出の上面幅1.65ｍ、底辺２ｍ以上、高さ0.3（棚田ｃ側）～0.6（棚田ｂ側）ｍの断面台形状をなす堤が第４層上面に築かれていた（第７図　肩ａ～ｅ）。しかし、南トレンチでは後世の削平によってこの堤は残存していなかった。

第2表　主な土坑・ピット・溝　一覧表

今回の調査では、土坑32基、ピット244個、溝43条を検出したが、時期の明確なものなど主要なものに限った。

南トレンチ・土坑

No.	地区	形　状	規模(cm) 長径	短径	深さ	出土遺物	時期
1	E	方形(欠)	150	(120)	26.2	弥	弥生
2	E	楕円	63	60	19.2		弥生
3	E	楕円	60	43	28.9	弥、須、師	古墳
4	E	楕円(欠)	68	(42)	19.3	須、師	古墳
5	E	円	58	59	28.3	弥、師、縄、貨	古墳
6	E	円(欠)	61	(45)	20.3	弥、師、須	古墳
7	E・F	楕円(欠)	80	(68)	52.5	弥	弥生
8	E・F	楕円	46	28	15.3	弥、師、須	古墳
9	F	楕円(欠)	57	(48)	22.8	弥、須	古墳
10	F	方形(欠)	114	(63)	41.9	弥、師、須、縄、剥	奈良・平安
11	F	円(欠)	43	(33)	15.1	弥、須、師	古墳
12	F	方形(欠)	75	(33)	18.8	弥、師	古墳
13	F	方形(欠)	198	(109)	28.7	弥、師、須	奈良・平安
14	F	楕円	72	63	41.0	弥	弥生
15	F	楕円(欠)	60	(28)	13.0	師、須	古墳
17	F	円(欠)	143	(121)	131.3	弥、師	古墳
18	J	長方形(欠)	60	(67)	6.6	弥、師	奈良・平安

南トレンチ・ピット

No.	地区	形　状	規模(cm) 長径	短径	深さ	出土遺物	時期
2	C	円	25	25	7	弥	弥生
10	C	楕円	32	23	15.5	弥	弥生
17	E	円	22	20	32.6	弥	弥生
20	E	楕円(欠)	33	(10)	8.4		古墳
22	E	楕円	44	36	38.2	弥	弥生
23	F	円(欠)	28	(21)	21.5	弥	弥生
29	F	楕円	33	27	25.5	弥	弥生
30	F	円(欠)	25	(21)	10.0	弥、師	古墳
34	F	円	21	20	21.1	弥	弥生
35	F	円	32	31	50.2	弥、石	弥生
36	F	楕円	46	33	18.4	弥	弥生
37	F	円	31	27	26.0	弥、師	古墳
45	F	楕円(欠)	25	(10)	18.5	弥	弥生
47	F	円	38	34	14.2	弥	弥生
49	F	円	32	32	31.9	弥、須	古墳
57	F	楕円	23	18	8.3	弥、須、師	古墳
65	J	楕円	54	46	30	弥	弥生
68	J	円	33	33	24	弥	弥生
69	J	円	41	41	30	弥、骨	弥生
76	J	円	9	9	6	師、敲石	古墳
78	J	円	28	28	16	弥	弥生
79	J	楕円	34	20	12	弥	弥生
85	G	円(欠)	20	20	10	師	奈良・平安
86	G	円	23	23	7	弥	弥生
88	G	円	31	31	21	弥	弥生
89	G	円	24	24	14	弥	弥生
91	G	円	36	36	11	弥、須、師	古墳
95	G	円(欠)	17	(17)	15	師	奈良・平安
97	G	円	25	25	12	弥	弥生
99	G	円	15	15	5	弥	弥生
106	G	楕円(欠)	52	(18)	12.7	弥	弥生
107	G	楕円	30	10	11.1		弥生
108	H	円	15	15	7.8		弥生
109	H	円	16	16	11.0		弥生
110	G	円	19	19	11.6		弥生
115	H	円	11	11	6.6		弥生
116	H	円	13	13	12.8		弥生
117	H	円	13	13	9.3	弥	弥生
118	H・I	円	15	15	8.1	弥	弥生
119	H	楕円	53	29	7.5		弥生
120	I	円	13	13	7.7		弥生
122	I	円	18	18	15.2		弥生
129	G	円	14	14	3.2	弥	弥生

南トレンチ・溝

No.	地区	形状	規模(cm) 残存	幅	深さ	出土遺物	時期
1	C		120	34	10.0		中世
2	C		40	40	8.2		中世
3	E・F		(700)	57	13.4	弥、須、師	中世
4	E		310	47	10.6	弥、須、師	中世
5	F		200	50	27.5	弥、須、師	中世
6	F		174	43	11.0	師	中世
7	F		220	31	8.5	弥、陶	中世
9	F		50	27	13.0	弥、陶	古墳
10	F		34	31	14.2	弥、師	古墳
15	G		30	16	11.2	弥	弥生
16	G		261	83	9.0	弥、陶	古墳
17	G		52	36	13.5	弥	弥生
A	G		290	103	60.0	弥、須、師、磁	近世

北トレンチ・土坑

No.	地区	形状	規模(cm) 長径	短径	深さ	出土遺物	時期
1	E	方形(欠)	70	(40)	24.5	弥、師、塩、鍋	古墳
2	E	不定形	50	26	25.8	弥、陶、瓦	中世
3	E	長方形	50	40	22.1	弥、須、師	古墳
4	F	方形(欠)	67	(23)	20.3	弥、須	古墳
5	F	長方形	65	34	4.6	弥、陶	奈良・平安
7	F	長方(欠)	138	(80)	25.2	弥、陶、骨	奈良・平安
8	F	方形(欠)	54	(12)	37	弥、陶	古墳
9	F	長方(欠)	70	(32)	10.5	弥	弥生
10	G	不定形	78	50	18.4	弥、石	弥生
11	H	長楕円(欠)	106	(100)	49.6	弥、鍋、剥、骨	弥生
12	G	円	124	124	142.4	弥、石	弥生
13	J	円	240	240	129	弥、須、剥	古墳
A	F・G	長方形(欠)	70	(50)	32.5	弥、陶	古墳

北トレンチ・ピット

No.	地区	形状	規模(cm) 残存	幅	深さ	出土遺物	時期
6	D	円	23	20	10	弥	弥生
8	D	円(欠)	20	(15)	16	骨	古墳
11	D	円(欠)	19	(13)	7.9	弥	弥生
12	D	楕円	30	20	10.1	弥	弥生
15	D	円(欠)	31	(25)	12.7	弥	弥生
17	E	円	20	19	14.7	弥	弥生
18	E	円(欠)	12	(8)	8.3	弥	弥生
19	E	円(欠)	30	(28)	11.7	弥	弥生
20	E	楕円	26	16	5	弥	弥生
21	E	円	34	32	34.5	弥	弥生
22	E	方形(欠)	40	(12)	17.3	弥、須、師、塩	古墳
24	F	円	12	12	10	弥、師	奈良・平安
26	F	楕円	23	18	8.4	弥	弥生
27	F	楕円(欠)	32	(18)	13.7	弥、師	奈良・平安
28	F	楕円(欠)	34	(17)	8.2	弥、師、剥	古墳
29	F	円(欠)	(20)	(13)	5.9	弥	弥生
31	F	円(欠)	17	(5)	16.6	弥	弥生
32	F	楕円	19	12	6.9	弥	弥生
33	F	円	20	20	19.6	弥、師、骨	古墳
34	F	楕円	22	16	27.3	弥	弥生
37	F	楕円	30	21	21.5	弥	弥生
38	F	楕円	50	(13)	28.2	弥	弥生
39	F	円	14	12	4.2	弥、師、須、塩	古墳
40	F	楕円	26	15	9.2	弥	弥生
41	F	楕円	28	19	0.4	弥	弥生
44	F	楕円	25	19	11.1	弥	弥生
46	F	楕円	38	29	37.3	弥	弥生
47	F	楕円(欠)	51	(40)	9.7	弥、鉄滓	弥生
48	F	楕円	36	31	24.1	弥	弥生
49	F	円	30	21	22.5	弥	弥生
50	F	楕円(欠)	54	(30)	20.6	弥	弥生
51	F	円	34	32	15.1	弥	弥生
52	F	円(欠)	18	(16)	7.2	弥	弥生
54	E	円	27	24	22.1	須、師、塩	古墳

No.	地区	形 状	規 模(cm) 長径	短径	深さ	出土遺物	時期
55	F	円	19	18	9.5	弥、須、師	古墳
56	F	楕円	33	10	26.7	弥	弥生
60	G	円	30	30	28	弥	弥生
61	G	円(欠)	38	(38)	15	弥	弥生
62	G	円	13	13	6	弥	弥生
63	G	円	16	16	10	弥	弥生
66	G	円	25	25	?	弥	弥生
69	H	円	20	20	6	骨	弥生
72	H	円	24	24	2	須	古墳
74	H	円(欠)	14	(14)	10.5	弥、師	奈良・平安
77	H	円	20	20	20	師	奈良・平安
83	H	楕円	19	14	15	弥	弥生
84	H	円	11	11	4	弥、師	古墳
87	H	円	15	15	11	弥	弥生
89	H	楕円	46	19	28	師、弥	古墳
93	H	円	21	21	16	師	古墳
94	H	円(欠)	23	(23)	22	弥、師	古墳
96	H	楕円	23	11	22	弥、師、骨	古墳
97	H	円	23	23	14	弥	弥生
98	H	円	18	18	8	弥	弥生
99	H	円	16	16	20	弥	弥生
101	G	円	34	32	23.3		弥生
102	G	円	24	24	12.2		弥生
103	G	楕円	36	24	22.9		弥生
104	G	円	18	15	25.9		弥生
105	G	楕円	42	31	41		弥生
107	K	円(欠)	24	(24)	16	弥、師	古墳
110	K	円	30	30	9	師	古墳
111	K	円(欠)	26	(26)	20	師	古墳
112	K	円	15	15	9	弥	弥生
113	K	円	25	25	15	弥	弥生
114	K	方形	43	43	?	弥、剥	弥生
118	G	円	30	30	16.7		弥生

北トレンチ・溝

No.	地区	形 状	規 模(cm) 残長	幅	深さ	出土遺物	時期
1	D		530	50	11.4	弥、須、師	中世
2	D		190	32	10.0	弥、須、師	中世
3	E		82	28	2.2	弥	中世
4	E		90	24	5.8		中世
5	D		84	28	7.9	弥、須、師	中世
6	D		86	30	5.6	弥、師、須	中世
7	D		140	31	20.5	弥、須、師、骨	中世
8	E		106	54	9.0	弥	中世
9	E		36	36	3.0	弥、須、師	中世
10	E		30	24	4.0		中世
11	E		70	40	17.8	須、師、骨	中世
12	E		59	30	10.7	弥、須、師	中世
13	E		140	70	4.3	弥	中世
14	F		120	36	16.7	弥、師	中世
15	F		110	38	13.8	弥、須、師	中世
16	F		60	50	20.1	弥、須	中世
17	F		124	32	18.7		中世
A	F・G		290	28	7.3	弥、須、師	中世
B	G		380	26	6.5	弥	中世
C	G		310	25	10.0		中世
a	H		240	125	12.0	弥、須、師、石	中世
b	H		240	50	9.0	須、師	中世
c	H		240	37	4.0	弥、須、師	中世
d	H		240	22	4.0	弥、須、師	中世
e	H		240	70	11.0		中世
f	H・I		240	235	20.0		中世

※出土遺物の略字は以下のとおりである。

縄…縄文土器片、弥…弥生土器片、須…須恵器片、
師…土師器片、瓶…製塩土器片、瓦…瓦器片、磁…磁器片、
石…石器、剥…サヌカイト・剥片・石核、骨…動物遺体

4．出土遺物

今回の調査においては縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、陶磁器などの土器類、打製・磨製の石器類、土製品、骨製品、動物遺体、金属製品、サヌカイト片などが出土した。以下、大半を占めた弥生土器、今までの各調査よりも出土割合の多かった縄文土器、土製品、石製品、動物遺体などについて記す。

a．弥生土器

出土土器の器種としては、広口壷・細頸壷・無頸壷・水差形土器・鉢・高坏・甕・甕蓋・壷蓋などがあげられる。これらはさらに器形・文様・製作手法などの特徴からいくつかの形態に分けられる。以下、形態分類を明記し、それに基づいて器種ごとに出土土器の特徴などを明記する。なお、胎土についてはとくに角閃石を含むもの（主に茶褐色を呈する）を在地産とし、この種の土器と異なるものを他地域産とした。その後、主要な遺構―大溝―から出土したものを対象として、器種別・産地別の統計を試みた。

〔形態分類〕

各器種の形態分類は『河内平野遺跡群の動態Ⅲ』[1]を基にし、『亀井（その2）』[2]など他の分類をも参考にした。すべての器種・形態が今回の調査から出土したわけではないこと、とくに口縁部の状態をもとにして行ったこと、さらに後述する統計作りをも念頭に入れ、器種ごとの形態分類を以下のように設定した。

壷は、広口壷のうち頸が外上方に細長いもの（口縁端部を斜めまたは下方に拡張したものを含む）Ａ１、頸が太く口縁部が外反して開き（端部を四角または拡張したものを含む）端部面に文様を施したものＡ２、文様のないもの（凹線・刻み目含む）をＡ４、Ａ１・Ａ２の口縁上に粘土帯を足して端部を上下に大きく拡張したものをＡ３、上のみに拡張したものＡ３′、Ａ１～Ａ４までの各小型をＢ１、Ｂ２、Ｂ３、Ｂ３′、Ｂ４とした。口縁部がやや外上方に短く立つ短頸壷をＣ、細頸壷のうちまっすぐに立つものをＤ１、口縁上部が開き端部を内傾させたものをＤ２。無頸壷のうち内傾し、そのまま終っているものをＥ１、端部を外反貼り付け拡張させたものをＥ２とした。

甕は、外上方にのびる口縁の状況で分け、端部を丸くまたは四角くおさめているものをＡ、端部を折り曲げて下部に拡張したものをＢ、端部を上部に少し拡張させたものをＣ、端部を上下に少しずつ拡張したものをDとし、それぞれの中・小型をＡ′、Ｂ′、Ｃ′、Ｄ′とした。

鉢は、口縁をそのまま丸くまたは四角くおさめているものをＡとし、浅鉢・すり鉢状のものをＡ１、やや深いもので口縁を立たせているものをＡ２、やや深く口縁上を内傾させているものをＡ３。口縁を折り曲げ拡張したものをＢとし、折り曲げて端部を下方に拡張したものＢ１、口縁端外面に粘土帯を足して四角く肥厚させたものＢ２、端部を折り曲げたもの（端部に刻み目のあるものを含む）Ｂ３、各形態には小型のあるものもある。

蓋は、山形・笠形の壷蓋Ａ、天井に面をもつ壷蓋Ｂ、裾端部を丸くおさめた甕蓋Ｃ、裾端部を四角くおさめた甕蓋Ｄとした。

高坏は口縁部を丸くまたは四角くおさめているもので小型をＡ１、大型をＡ２、口縁端部を折り曲げたものＢ１、口縁端部を外方に開き貼り付け突帯を有するもの（垂下させただけのもの含む）Ｂ２とした。

その他に器台、台形土器などがあった。

注１）『河内平野遺跡群の動態Ⅲ』　大阪府教育委員会　財団法人大阪府文化財調査研究センター　1996年。

２）『亀井（その２）』　財団法人大阪文化財センター　大阪府教育委員会　1986年。

〔出土土器〕

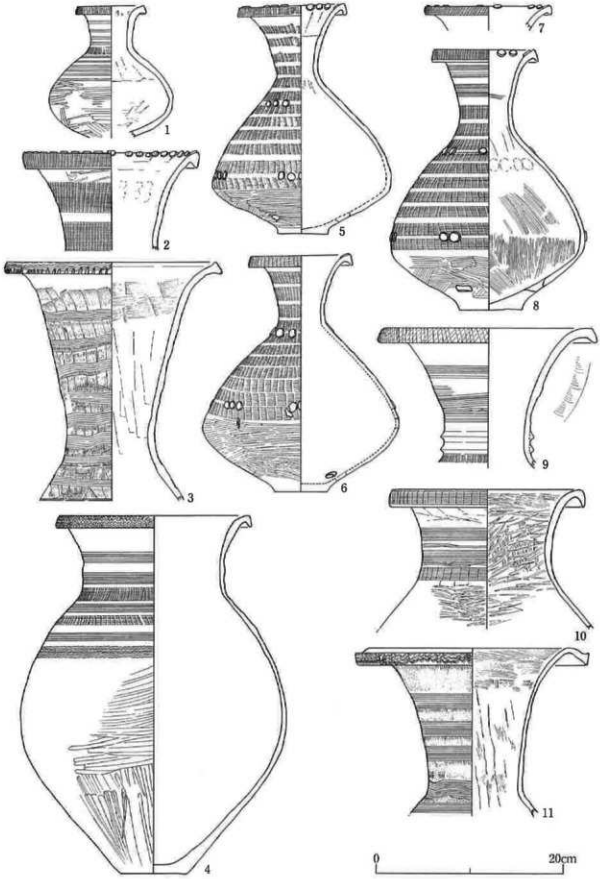
南トレンチ大溝2出土弥生土器（第18～28図、図版12～30）

広口壷A1（2・3・9・11・16～18）　細長い漏斗状の口頸部をもち、口縁端部を斜めまたは下方に拡張する形態。口縁部に櫛描簾状文をもつもの（2）、櫛描波状文をもつもの（3・11）、櫛描斜格子状文をもつもの（9）、口縁部下端に刻み目をもつもの（3）、円形浮文を貼り付けるもの（2）、無文のもの（16～18）がある。（2）の頸部に原体幅の大きい櫛描簾状文（28／3.3cm）、内面口縁端部には無数の円形浮文を貼り付ける。調整は外面ハケメのちヘラミガキ、内面には工具によるナデとユビナデが見られる。口径18.6cm。在地産。（3）の頸体部に蛇行する櫛描直線文（8／1.2cm）、口縁部端面には同原体による波状文、下端部にはヘラ状工具による刻み目が施される。調整は内外面共にハケメ（9／cm）が見られる。口径22.2cm。在地産。（9）の口縁部端面に櫛描斜格子状文、頸部に櫛描直線文（7／1.2cm）、頸体部境に貼り付け凸帯、肩部に同原体による簾状文、内面口縁端部に櫛描扇形文（9／1.7cm）が施される。調整は外面ヘラミガキ、内面にはハケメが見られる.口径22.0cm。在地産。（11）の口縁部端面に櫛描波状文（4／1.0cm）、頸体部に櫛描直線文（10／1.6cm）が施される。調整はハケメ（8／cm）が見られる。口径24.6cm。在地産。（16）は内外面共にハケメ（5／cm）調整が施される。口径19.6cm。在地産。（17）は内外面共にハケメ（5／cm）調整が施される。口径23.0cm。在地産。（18）の頸体部に櫛描直線文（8／1.1cm）が施される。調整はハケメ（7／cm）・ヘラミガキが見られる。黒斑あり。口径23.85cm。在地産。

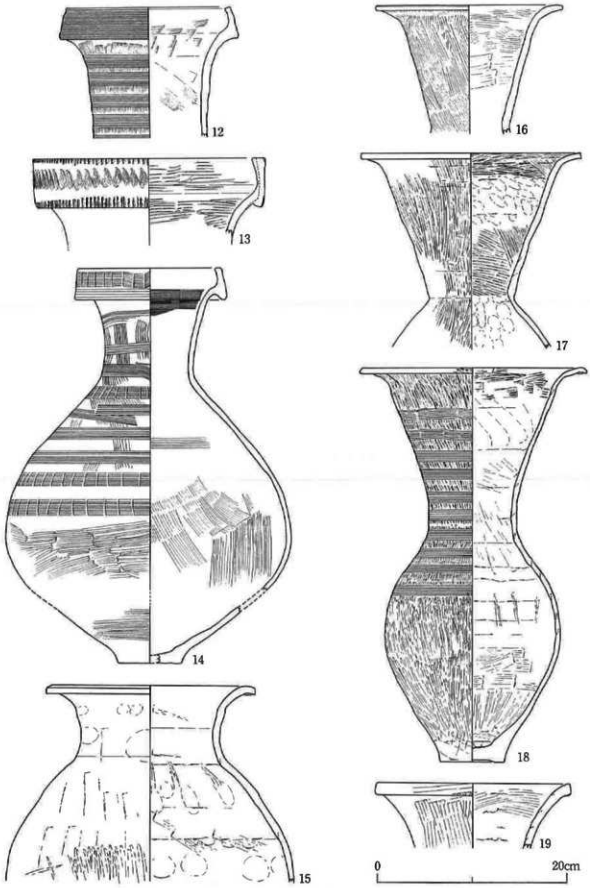
広口壷A2（4・10・22・23）　太い頸部から口頸部が外反し、口縁部端面に文様を施す形態。口縁端部を下方に拡張するもの（4・10）、口縁部端面が面をもっておわるもの（22・23）がある。（4）の頸体部に櫛描直線文（6／1.3cm）・簾状文・波状文と、口縁部端面に同原体による波状文が施される。調整は外面ヘラミガキ、内面にはユビナデが見られる。口径20.0cm。在地産。（10）の口縁部端面に櫛描簾状文、頸部には2帯の櫛描直線文（10／1.3cm）・同原体からなる簾状文が施される。調整はハケメ（6／cm）・ヘラミガキが見られる。口径20.3cm。在地産。（22）の口縁部端面にクシ工具による綾杉文、頸体部境に櫛描簾状文（11／1.7cm）、体部には同原体による直線文が施される。調整はハケメが見られる。口径20.8cm。在地産。（23）の口縁部端面に櫛描波状文、体部に同原体による直線文（8／1.05cm）が施される。調整はハケメ（5／cm）が見られる。口径19.2cm。在地産。

広口壷A3（12～14）　筒状の頸部から外反する口縁部をもち、広口壷A1・A2形態の口縁をさらに上下に拡張する形態。口縁拡張部に施される文様は多様である。（12）の拡張された口縁に2帯からなる櫛描直線文、頸部に同原体からなる直線文（12／1.4cm）が施される。調整はハケメ（7／cm）が見られる。口径17.3cm。在地産。（13）の拡張された口縁に櫛描波状文（10／cm）、その上下端部に同原体からなる刺突文が施される。調整は内面に粗いハケメ（4／cm）が見られる。口径24.5cm。在地産。（14）の拡張された口縁に櫛描簾状文（12／1.6cm）・直線文、頸体部に同原体からなる直線文、頸体部境と体部最大径に簾状文が施される。調整はハケメ・ヘラミガキが見られる。口径15.0cm、器高42.0cm、底径6.8cm。在地産。

広口壷A4（15・19～21・27・28）　太い頸部から口頸部が外反し、口縁端面が無文（凹線・刻み目含む）の形態。口縁端部をわずか上下に肥厚するもの（15・19～21）、口縁端部が下方に拡張されるもの（27）、口縁部が強く屈曲するもの（28）がある。（15）はハケメ・工具によるナデ、外面体部下位にはヘラミガキが施される。詳細は風化のため不明。口径22.0cm。在地産。（19）の口縁部下端に一部にしか残存しないが刻み目が施される。調整はハケメ（3／cm）が見られる。口径20.2cm。在地産。（20）の口縁部端面は凹む。調整は粗いハケメ（3／cm）が見られる。口径13.9cm。在地産。



第18図　南トレンチ大溝２内出土弥生土器実測図



第19図　南トレンチ第４層・大溝２内出土弥生土器実測図

(21) の口縁端部内面に1個の突起、口縁部下端にクシ工具による刻み目、頸体部境に櫛描波状文（5／cm）が施される。調整はハケメ（4／cm）が見られる。口径10.4cm。在地産。(27) は無文。調整はハケメ（6／cm）のちヘラミガキ、外面体部下位にヘラケズリが見られる。口径18.4cm。在地産。(28) の口縁部端面に1条の凹線が施される。調整はハケメ・ヘラミガキが見られる。口径16.2cm。在地産。

広口壷B1（5～8）　広口壷A1形態の小型。(5～8) は口縁部に櫛描簾状文をもつ。(5) の口縁部端面から頸体部にかけて櫛描簾状文（16／1.0cm・19／1.3cm）、底部脇に円形の穿孔、内面口縁端部・肩部・体部最大径部に3個1単位の円形浮文をそれぞれ上から6箇所・4箇所・5箇所と施される。調整は外面底部に5分割からなるヘラミガキ、内面口縁部には工具痕が見られる。口径11.1cm、器高24.6cm、底径5.3cm。在地産。(6) の口縁部端面から頸体部にかけて櫛描簾状文（12／1.4cm）、体部最大径部・底部脇に3箇所の穿孔、内面口縁端部・頸体部境・体部最大径にそれぞれ上から2個1単位を3箇所・12個・3個1単位を8箇所に円形浮文が施される。調整は外面底部に5分割からなるヘラミガキが見られる。口径10.4cm、器高25.5cm、底径5.6cm。在地産。(7) は口縁部端面に櫛描簾状文手法による斜列点文（11／cm）、内面口縁端部には2個1単位の円形浮文が5箇所施される。調整は風化のため詳細不明。口径13.6cm。(8) は口縁部端面に櫛描簾状文（16／1.3cm）・頸部に同原体による直線文・頸体部境から体部最大径に同原体による簾状文、底部脇に穿孔、内面口縁端部・肩部・体部最大径に2個1単位の円形浮文をそれぞれ上から4箇所・5箇所・6箇所と施される。調整は外面ハケメ（8／0.5cm）、底部に3分割からなるヘラミガキ、内面にはハケメ（11／cm）が見られる。口径10.5cm、器高27.7cm、底径6.7cm。在地産。

広口壷B2（1）　広口壷A2形態の小型。(1) は口縁部に櫛描簾状文をもつ。外面頸部と肩部に櫛描直線文（3／0.3cm）、頸体部境の1帯に櫛描直線文と簾状文（9／0.9cm）が施される。調整は外面体部にヘラミガキ、内面にはハケメが見られる。口径7.0cm。在地産。

広口壷B3′（49）　広口壷A3形態の小型。内弯する口縁部が袋状になる形態をもつもの。(49) は外面口縁端部に1条の凹線が施される。調整は内外面共にハケメ（5／cm）が見られる。口径14.5cm。在地産。

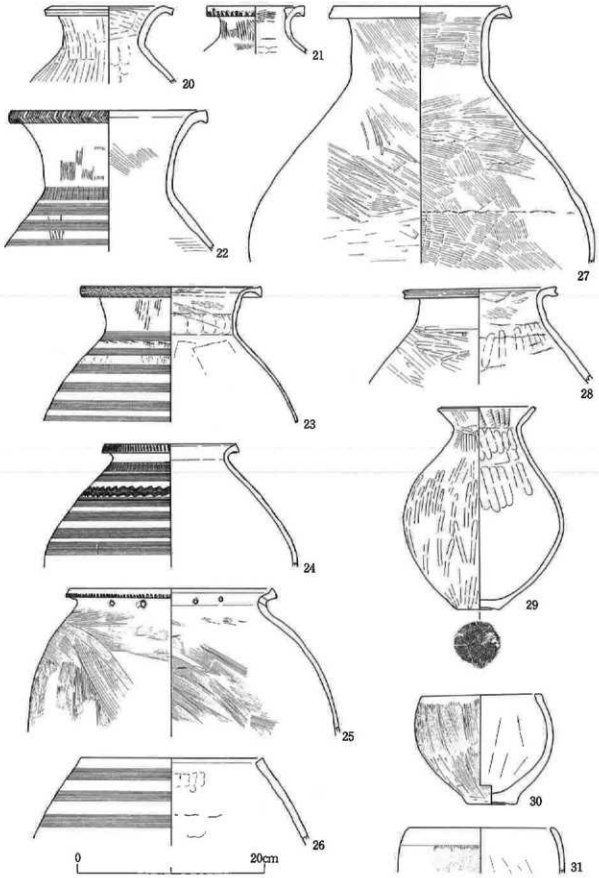
短頸壷C（29）　口縁部がやや外上方に短く立つ形態をもつもの。(29) は外面底部に木の葉痕、口縁部端面に1条の凹線が施される。調整はハケメ（3／cm）・ヘラミガキが見られる。口径9.8cm、器高21.65cm、底径4.4cm。在地産。

細頸壷D1（47・48）　頸が短く、口縁部が直口する形態をもつもの。(47) は外面口縁端部・頸体部境に櫛描簾状文（9／1.5cm）、頸部・肩部に同原体による直線文が施される。調整はハケメ（6／cm）が見られる。口径10.0cm。在地産。(48) は外面に櫛描簾状文（14／1.4cm）が施される。調整はヘラミガキ・ハケメ（5／cm）が見られる。口径10.2cm。在地産。

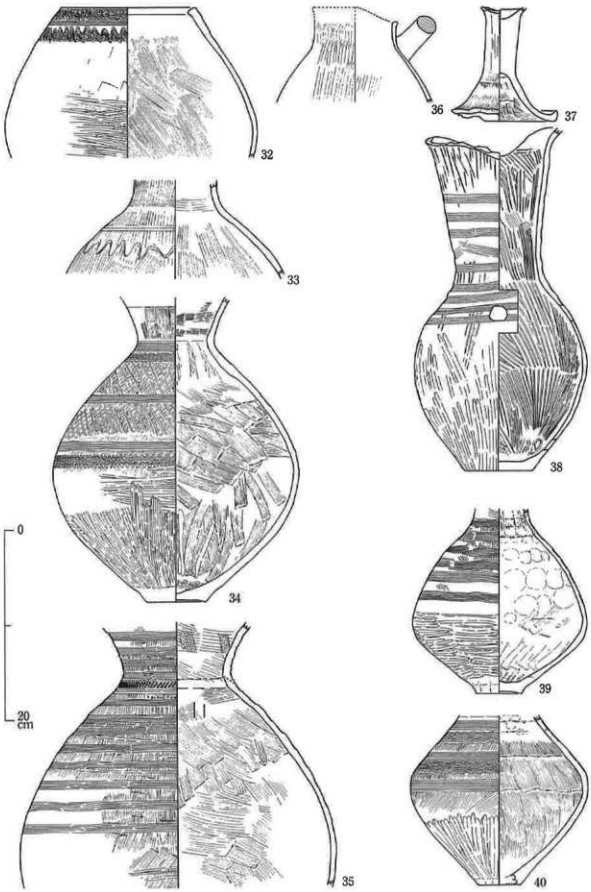
細頸壷D2（50）　細長い筒状の口頸部をもち、口縁端部を内傾させた形態をもつもの。(50) は外面口縁部に簾状文手法の斜列点文と円形浮文、頸部には同原体からなる簾状文（13／1.4cm）が施される。内面にはユビ調整が見られる。口径12.7cm。在地産。

無頸壷E1（26・32）　体部上端をそのまま口縁部とする形態をもつもの。(26) は外面に櫛描直線文（10／1.5cm）が施される。口径19.4cm。在地産。(32) は外面に櫛描直線文風のハケメの上から、波状文（8／1.2cm）が施される。調整は外面に工具によるナデ・ヘラミガキ、内面にはハケメ（9／cm）が見られる。口径14.0cm。在地産。

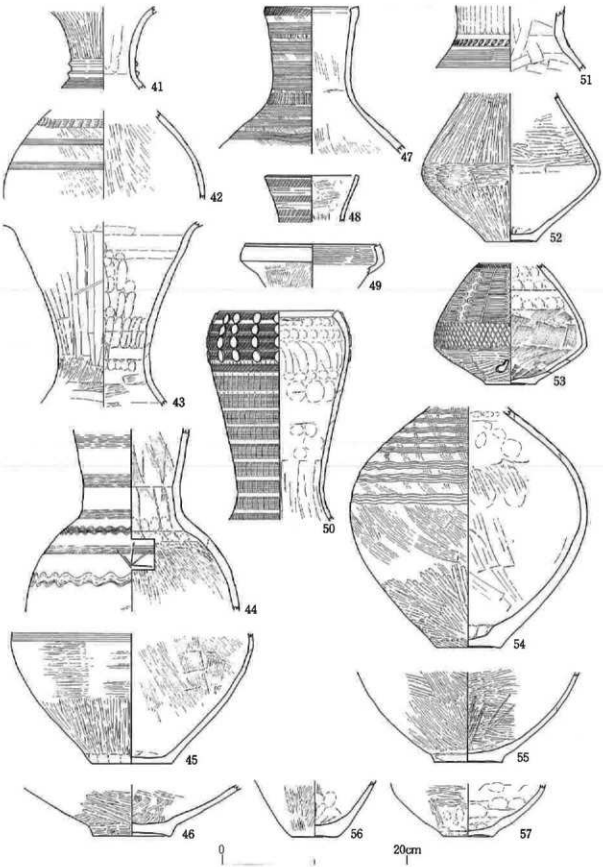
無頸壷E2　(24・25)　口縁部が「く」の字形に外反する形態をもつもの。(24) の口縁部端面



第20図　南トレンチ第４層・大溝２内出土弥生土器実測図



第21図　南トレンチ大溝２内出土弥生土器実測図



第22図　南トレンチ大溝２内出土弥生土器実測図

に櫛描工具による刺突文、体部には同原体による簾状文（14／1.2cm）・直線文・波状文が施される。調整は工具によるナデが見られる。口径13.8cm。在地産。（25）の口縁端部下端に刻み目、頸部に2個1単位を2箇所に円形の穿孔が施される。調整はハケメ（8／cm）が見られる。口径21.6cm。在地産。

水差形壷（36）　器体全体が無文様のもの。（36）は口縁部の一部に弧状の剝込み成形をし、調整は内外面共にハケメ（3／cm）が施される。口径8.9cm。在地産。

形態不明な壷（33～35・38～46・51～57）　ここでは口縁部・体部が欠損し、形態のわからないものを述べる。（33）は頸体部残存。外面頸・肩部に櫛描直線文、肩部に波状文（3／0.7cm）が施される。調整はハケメ（4／cm）が見られる。在地産。（34）の頸体部境から体部最大径までを、上から櫛描直線文（10／1.5cm）・波状文・斜格子状文を繰り返し施される。調整はハケメ（12／cm）・ヘラミガキ・ヘラケズリが見られる。底径6.2cm。在地産。（35）の頸部から体部最大径までを櫛描直線文（6／0.9cm）・頸体部境に1条の同原体による刺突文が施される。調整はハケメ（6／cm）・ヘラミガキが見られる。在地産。（38）の口縁部周縁は故意に打ち欠いたものと思われる。頸部から肩部に櫛描直線文（6／1.0cm）が施される。調整はハケメ（3／cm）・ヘラミガキが見られる。肩部と底部脇の2箇所に円孔を穿いている。底径7.0cm。在地産。（39）の頸部から体部最大径までを櫛描直線文（9／1.15cm）が施される。調整はハケメと体部外面に分割性のあるヘラミガキが見られる。底径4.8cm。在地産。（40）の肩部から体部最大径までを櫛描直線文（9／1.3cm）・同原体による波状文が施される。調整はハケメ（8／cm）・ヘラミガキが見られる。底径4.4cm。在地産。（41）は頸体部境に2条の凸帯をもち、肩部に櫛描直線文（7／cm）が施される。調整はヘラミガキ・ユビナデが見られる。在地産。（42）の肩部に簾状文手法の列点文（／1.1cm）・直線文（5／0.8cm）が施される。調整はハケメ（3／cm）が見られる。無頸壷E形態と思われる。在地産。（43）は無文である。調整は工具によるナデ・ハケメ（7／cm）・ユビオサエが見られる。在地産。（44）の頸部から体部最大径部まで上から、櫛描直線文（10／1.45cm）・同原体による波状文、体部中央には4条からなる線刻が施される。調整はハケメ（4／cm）が見られる。在地産。（45）は体部最大径部に櫛描直線文が施される。調整はハケメ（6／cm）・ヘラミガキが見られる。在地産。（46）は底部。外面に分割性のあるヘラミガキ、内面にはハケメ（10／cm）・ヘラミガキ、外面底部に一定方向のヘラミガキが見られる。底径8.4cm。在地産。（51）の頸体部境に2条の凹線文とその間にヘラによる刻み目、肩部には櫛描直線文（7／1.05cm）が施される。調整は外面にヘラミガキ、内面には板状工具によるナデが見られる。在地産。（52）は無文である。内外面共にヘラミガキ、さらに内面底部にハケメ調整を施す。底径5.5cm。他地域産。（53）は体部上から櫛描列点文・ヘラ描流水文・斜格子文が施される。調整は外面底部に5分割からなるヘラミガキ、内面にはハケメ、体部下位に穿孔が見られる。底径5.1cm。在地産。（54）は肩部から体部最大径まで櫛描波状文（5／0.9cm）が施される。調整はハケメ（6／cm）・ヘラミガキ・工具によるナデが見られる。底径6.8cm。在地産。（55）は底部。内外面共にヘラミガキ調整を施す。底径7.3cm。在地産。（56）は底部。外面にハケメ（8／cm）、内面にはハケメ・ユビオサエが見られる。底径5.0cm。在地産。（57）は底部。外面に分割性のあるヘラミガキ、内面には工具痕が見られる。底径5.4cm。在地産。

鉢A1（65）　口縁部が直口で、口縁端部を四角くもち、浅鉢状の形態をもつもの。（65）は外面口縁部に3条のクシ工具による刻み目凸帯、櫛描波状文（9／1.3cm）が施される。調整はハケメ（9／cm）が見られる。口径37.0cm。在地産。

鉢A1´（62・72・73）　鉢A1形態の小型。（62）は外面ハケメ（4／cm）のちナデ消し、内面ハ

ケメ（6／cm）と２種類の工具をもつ。口径11.0cm、器高4.6cm、底径4.7cm。在地産。（72）の外面口縁部に２条の凹線文が施される。調整はヘラミガキ・ナデが見られる。口径16.0cm、器高7.2cm、底径4.3cm。在地産。（73）の口縁部外面にヘラによる刻み目が施される。調整は内外面共にヘラミガキが見られる。口径16.4cm、器高6.8cm、底径4.8cm。在地産。

鉢Ａ２（71・75）　口縁部が直口で、口縁端部を四角くもち、やや深鉢状のもの。（71）は無文である。調整はハケメ（6／cm）・ヘラミガキが見られる。黒斑あり。口径20.2cm、器高14.75cm、底径8.0cm。他地域産。（75）は無文である。外面にヘラミガキ、内面には工具によるナデが見られる。口径19.4cm、器高11.5cm、器高5.2cm。在地産。

鉢Ａ３（30・31・70・74）　やや深く口縁部を内傾させる形態をもつもの。（30）は外面にヘラケズリ・ハケメ（7／cm）、内面には工具痕が見られる。黒斑あり。口径12.6cm、器高16.85ｃｍ、底径5.3cm。在地産。（31）は外面にハケメ（6／cm）のち口縁部ヨコナデ、内面には工具によるナデ調整が見られる。口径15.2ｃｍ。在地産。（70）の口縁端部外面にクシ工具による刻み目・櫛描直線文（5／0.9cm）・同原体による波状文が施される。調整はハケメ（7／cm）・ヘラケズリ・ヘラミガキが見られる。口径18.2cm。在地産。（74）は無文である。調整はハケメ（6／cm）・ヘラミガキ・ヘラケズリが見られる。口径10.5cm。在地産。

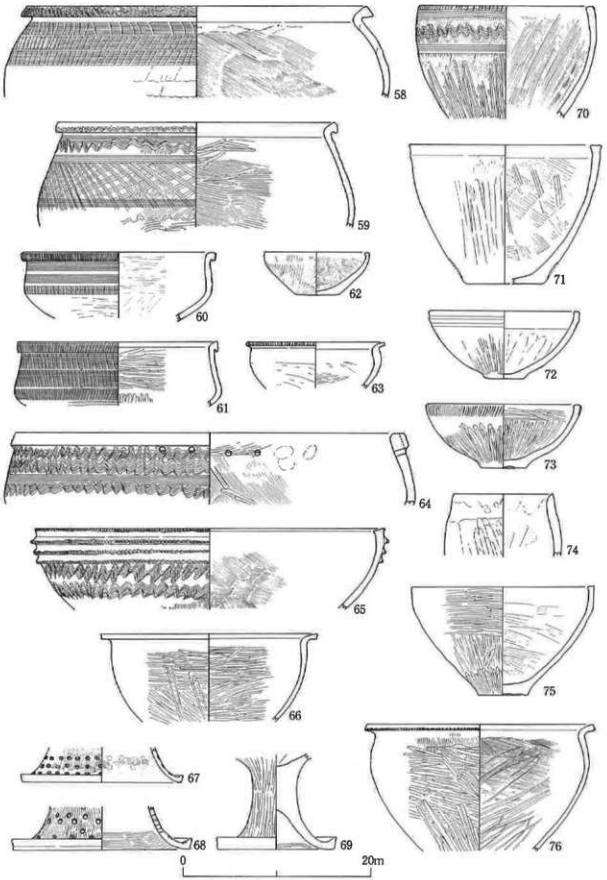
鉢Ｂ１（58・59・61・77）　口縁部を折り曲げて、口縁端部を下方に拡張した形態をもつもの。（58）は口縁部端面に櫛描波状文（9／1.6cm）、体部に同原体からなる簾状文・簾状文手法の斜列点文が施される。調整はハケメ（8／cm）が見られる。口径35.8cm。在地産。（59）は口縁部端面に櫛描波状文（4／0.8cm）、体部に同原体からなる波状文・直線文、クシ工具（3／0.45cm）による斜格子状文が施される。調整はヘラミガキが見られる。口径29.2cm。在地産。（61）は外面を櫛描簾状文（16／1.8cm）を施し、調整はヘラミガキが見られる。口径21.2cm。在地産。（77）の口縁部端面に刻み目、体部には櫛描直線文（７／1.1cm）・クシ工具による斜格子状文（3／0.5cm）が施される。調整はハケメ（13／cm）・ヘラミガキが見られる。口径15.2cm、器高25.4cm、9.4cm。在地産。

鉢Ｂ２（60・64）　口縁端部外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる形態をもつもの。（60）は外面口縁部端面クシ工具による刻み目、体部には同原体による直線文（7／0.8cm）・簾状文が施される。調整はヘラミガキが見られる。口径20.6cm。在地産。（64）の口縁部直下に円孔が２個１単位で穿かれている。穿孔であろう。外面に櫛描波状文（8／1.35cm）・同原体による直線文が施される。調整はハケメ（5／cm）・ヘラミガキが見られる。口径41.0cm。在地産。

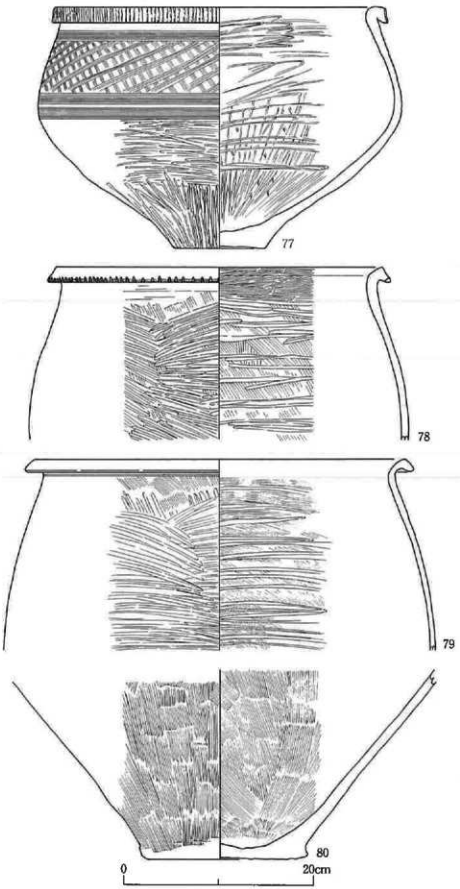
鉢Ｂ３（63・66・76）　口縁端部を折り曲げただけの形態をもつもの。（63）は口縁部端面に刻み目が施される。調整は外面ヘラケズリ、内面ハケメ・ヘラミガキが見られる。口径7.4cm。在地産。（66）は無文である。調整は内外面共にヘラミガキが施される。口径23.0cm。在地産。（76）は外面口縁端部下端に刻み目が施される。調整はハケメ（5／cm・13／cm）・ヘラミガキが見られる。口径24.0cm。在地産。

脚台（67～69）　（67・68）は鉢、（69）は高坏の脚台である。（67）の外面には円形竹管による押捺が施される。調整は内外面共にハケメ（7／cm・14／cm）が見られる。裾径16.7cm。在地産。（68）の外面には円形竹管による押捺と穿孔が施される。調整は内面裾部にハケメ（5／cm）が見られる。裾径19.2cm。在地産。（69）の外面にヘラミガキ、内面裾部には５分割のハケメ（3／cm）が施される。外面裾端部に黒斑がある。裾径12.3cm。在地産。

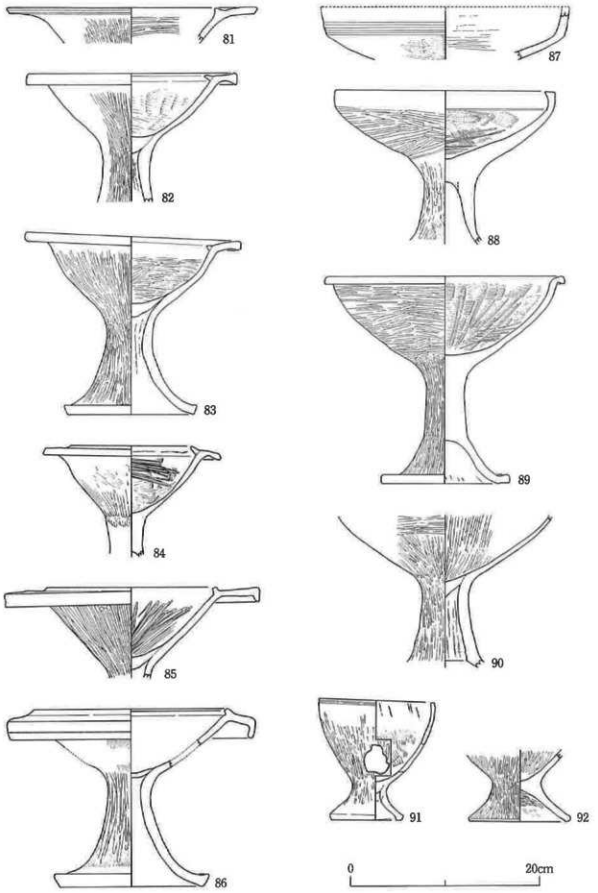
高坏Ａ１（91）　浅い椀状の坏部をもち、口縁端部が四角く、小型の形態をもつもの。（91）は外



第23図　南トレンチ第４層・大溝２内弥生土器実測図



第24図　南トレンチ大溝２内出土弥生土器実測図



第25図　南トレンチ第４層・大溝２内出土弥生土器実測図

面口縁部に1条の沈線、体部中央1箇所には穿孔が施される。調整は外面にヘラケズリ・ヘラミガキ、内面にはハケメ（4／cm）が見られる。口径12.1cm、器高12.8、裾径7.3cm。在地産。

高坏A2（87・88）　高坏A1形態の小型。（87）は外面口縁部に3条の凹線文が施される。調整は外面ハケメ（7／cm）、内面には工具によるナデ・ヘラミガキが見られる。口径26.0cm。在地産。（88）の内面口縁部に1条の沈線が施される。調整は内外面共にハケメ（7／cm）・ヘラミガキが見られる。口径22.9cm。在地産。

高坏B1（89）　浅い椀状の坏部をもち、口縁端部を折り曲げた形態をもつもの。（89）は外面に6分割からなるヘラミガキ、内面にはハケメ（7／cm）・ヘラミガキが見られる。口径24.8cm、器高21.8cm、裾径13.2cm。在地産。

高坏B2（81～86）　浅い椀状の坏部から水平に張り出した口縁部をもつもの（81～84）、さらに口縁端部を下方に拡張するもの（85・86）の形態をもつもの。（81）は口縁部端面に1条の凹線が施される。調整は内外面共にヘラミガキが見られる。口径17.5cm・26.2cm。在地産。（82）は外面にヘラケズリ・ヘラミガキ、内面には板状工具によるナデ調整が施される。口径15.6cm・21.6cm。在地産。（83）は内外面共にヘラミガキ調整が施される。口径15.7cm・21.8cm、器高14.2cm、裾径13.2cm。在地産。（84）の外面はヘラケズリ・ヘラミガキ、内面にはハケメ（7／cm）・ヘラミガキが施される。口径12.6cm・18.7cm。在地産。（85）は内外面共にヘラミガキ調整が施される。口径17.8cm・26.8cm。在地産。（86）の口縁拡張部に1条の沈線状の凹線が施される。調整はハケメ（7／cm）・ヘラミガキが見られる。口径20.2cm・26.1cm、器高18.7cm、裾径14.8cm。他地域産。

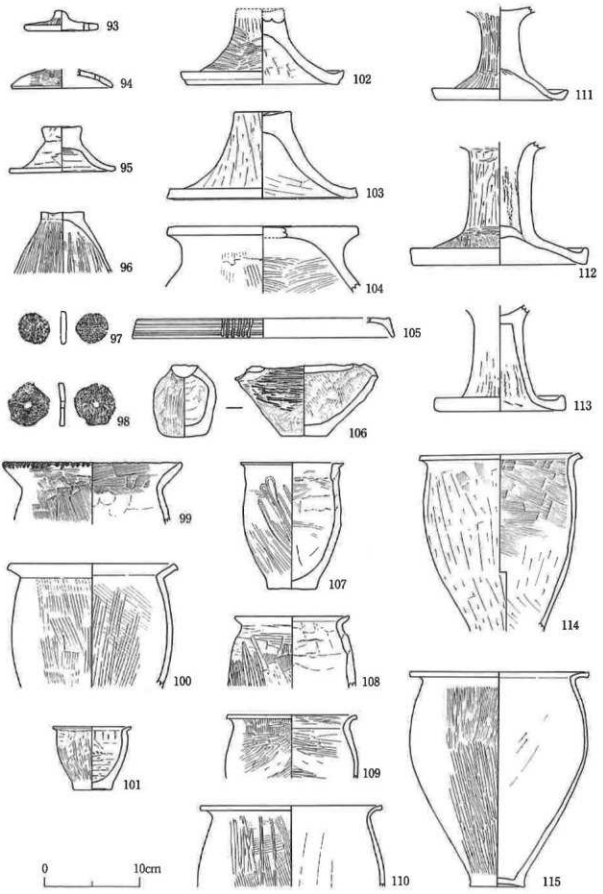
形態不明な高坏（90・92）　口縁部が欠損のため形態不明。（90）は内面に煤が付着していることから、蓋への転用品と思われる。調整は内外面共にヘラミガキが施される。在地産。（92）は小型の脚台部。調整は内外面共にヘラミガキ、裾部内面に一部板状工具痕が見られる。裾径10.35cm。在地産。

壺蓋A（93・94）　山形・笠形の形態をもつもの。（93）は突起状のつまみと、2個1単位の円孔を2箇所穿つ。調整は内外面共にヘラミガキが施される。黒斑あり。口径7.7cm、器高2.1cm。在地産。（94）の1箇所に円孔が施される。調整は外面にハケメ（9／cm）、内面には粗いユビナデが見られる。口径10.6cm。在地産。

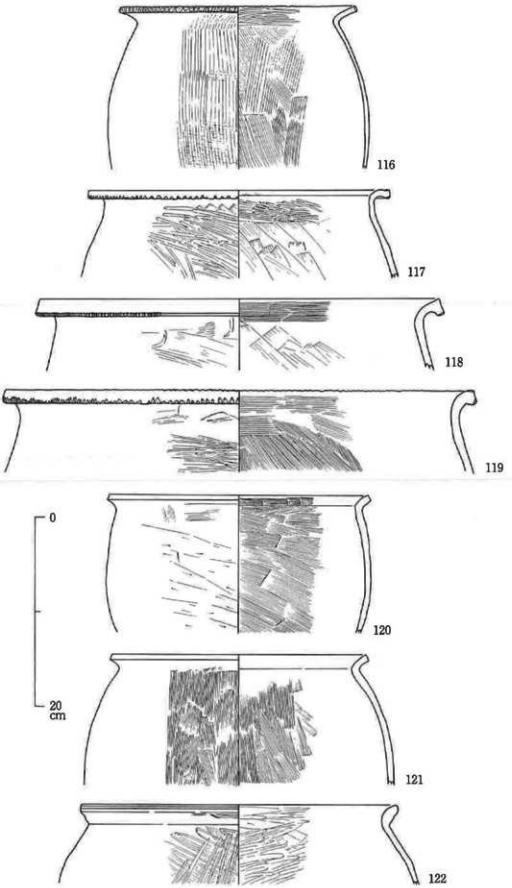
壺蓋B（95）　天井部に面をもつ形態をもつもの。（95）は内外面共に工具によるナデ調整が施される。口径11.0cm、器高4.8cm、つまみ径4.2cm。在地産。

甕蓋D（102・103）　口縁端部を四角くおさめる形態をもつもの。（102）は外面にヘラミガキ、内面には工具によるナデが施される。口縁部に煤が付着している。口径15.8cm。在地産。（103）は外面にヘラケズリ、内面には工具によるナデが施される。内面口縁部に煤が付着している。口径19.9cm、器高8.1cm、つまみ径6.0cm。在地産。

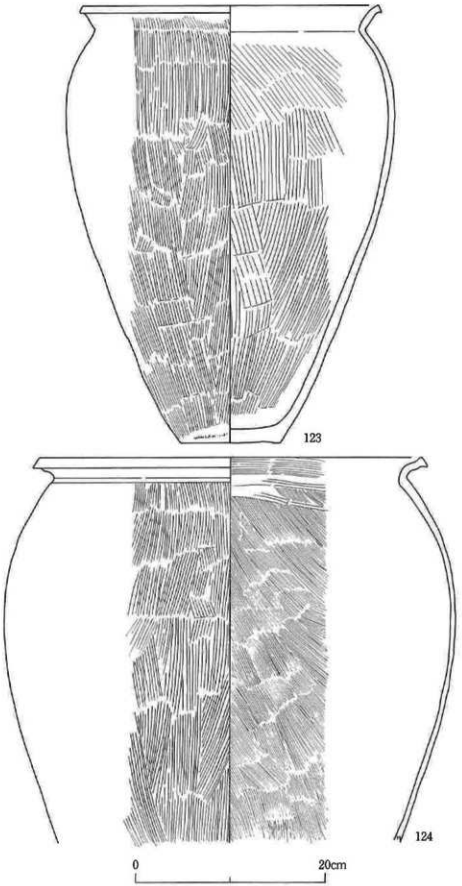
その他の蓋（37・96・111～113）　（37）は（38）の壺の蓋として出土した。高坏脚部からの転用品である。一部の裾部を壺の蓋の径にはまるように打ち欠いている。調整は内外面共にハケメが施される。口縁部に煤が付着している。裾径12.3cm。在地産。（96）の内面に煤が付着していることから甕からの転用品と思われる。調整は外面にヘラミガキ、内面にはハケメ（10／cm）・ヘラミガキが見られる。つまみ径4.4cm。在地産。（111～113）は高坏の脚台からの転用品。（111）の外面はヘラミガキ、脚部内面には工具によるナデが見られる。口縁部には煤が付着している。裾径14.4cm。在地産。（112）の外面にヘラケズリ・ヘラミガキ、脚部内面には工具によるナデが見られる。口縁部には煤が付着している。裾径18.0cm。在地産。（113）の脚部内面に工具によるナデ・シボリメが見られ



第26図　南トレンチ大溝２内出土弥生土器、北トレンチ大溝１・落ち込み出土土製品実測図



第27図　南トレンチ大溝２内出土弥生土器実測図



第28図　南トレンチ大溝２内出土弥生土器実測図

る。外面は風化のため詳細不明。裾径13.8cm。在地産。

器台（104・105）　器台としたが回転台と呼ばれるものである。（104）の調整は内外面共に粗いクシ工具によるナデ、外面天井部はヘラミガキが施される。口径20.0cm。在地産。（105）の口縁端部を下方に拡張し、端面には５条の沈線と棒状浮文が施される。調整は風化のため詳細不明。口径26.0cm。在地産。

異形土器（106）　鳥の形を想定させるが定かではない。調整は内外面共にハケメ（6／cm）、外面上方にはヘラミガキが見られる。黒斑あり。器高7.6cm、底径4.6cm。在地産。

甕（78・79・99～101・107～110・114～124）　口径によって、概ね20cm以内の中・小型甕と20cm以上の大型甕とに分け、さらに口縁部から体部の調整手法と口縁形態の組合せによって細分する。

大型甕A（116・120～122）　口縁端部を四角くするもの（116・120・121）、口縁端部を丸くおさめるもの（122）の形態をもつもの。（116）は「く」の字形に外反する口縁から、口縁端部はクシ工具による刻み目が施される。調整は内外面共にハケメ（3／cm）が見られる。口径24.6cm。在地産。（120）の口縁端部は面をもつ。調整は外面ヘラケズリ、内面にはハケメ（9／cm）が施される。黒斑あり。口径27.2cm。在地産。（121）の口縁端部は面をもつ。調整は内外面共にハケメ（7／cm）が施される。口径26.7cm。在地産。（122）の口縁端部は丸くおさめる。調整は外面にハケメ（7／cm）、内外面共にヘラミガキ、外面底部にはヘラケズリが施される。口径33.4cm。在地産。

大型甕B（78・79・118・119・123）　口縁部を折り曲げて、口縁端部の下部を拡張した形態をもつもの。（78）は口縁端部下端にクシ工具による刻み目が施される。調整はハケメ（5／cm）・ヘラミガキが見られる。口径34.2cm。在地産。（79）は口体部境に１条の沈線が施される。調整は内外面共にハケメ（7／cm）・ヘラミガキが見られる。特に外面は分割性のあるヘラミガキ。口径38.8cm。在地産。（118）の調整はハケメ（9／cm）・板状工具痕が見られる。口径42.0cm。在地産。（119）の口縁端部上下に刻み目が施される。調整は外面にヘラミガキ、内面にはハケメ（5／cm）・板状工具によるナデが見られる。口径49.0cm。在地産。（123）の調整は内外面共にハケメ（2／cm・5／cm）が施される。口径31.0cm、器高46.0cm、底径10.5cm。在地産。

大型甕D（117・124）　口縁端部を上下に拡張した形態をもつもの。（117）の調整は板状工具によるナデ・ヘラミガキが施される。口径31.6cm。他地域産。（124）の調整は内外面共にハケメ（5／cm・11／cm）が施される。口径40.0cm。在地産。

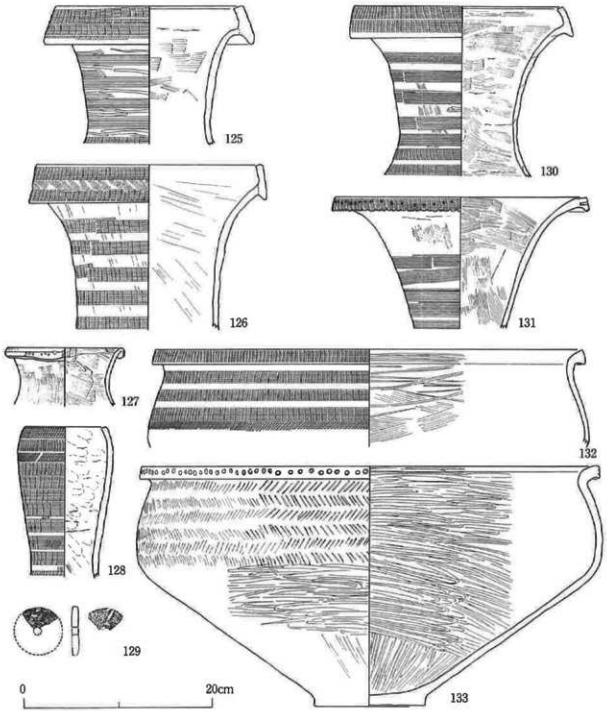
中・小型甕A´（99・101・107・108・110・114）　大型甕Aの形態をもつもの。（99）は口縁端部にクシ工具による刻み目が施される。調整は内外面共にハケメ（13／cm）が見られる。口径18.4cm。他地域産。（101）は小型甕。調整は外面ヘラケズリのちヘラミガキ、内面にはヘラケズリ・工具によるナデが見られる。口径8.2cm、器高6.6cm、底径3.9cm。在地産。（107）の口縁部は上方に面をもつ。調整は内外面共に工具によるナデ、さらに外面にはヘラミガキが施される。口径10.8cm、器高13.3cm、底径5.0cm。在地産。（108）の口縁端部は丸くおさめる。調整は外面に板状工具によるナデ・ハケメ（9／cm）・ヘラミガキ、内面にはユビナデが見られる。外面に煤が付着している。口径12.0cm。在地産。（110）の調整は外面にハケメ（5／cm）、内面には工具によるナデが見られる。口径18.9cm。在地産。（114）の調整は内外面共にハケメ（10／cm）・ヘラケズリが施される。内外面共に体部には煤が付着している。口径16.6cm。在地産。

中・小型甕B´（100・109）　大型甕Bの形態をもつもの。（100）の調整は内外面共にハケメ（4／cm）が施される。口径17.0cm。在地産。（109）の調整は内外面共にハケメ（4／cm）・ヘラケズリ・

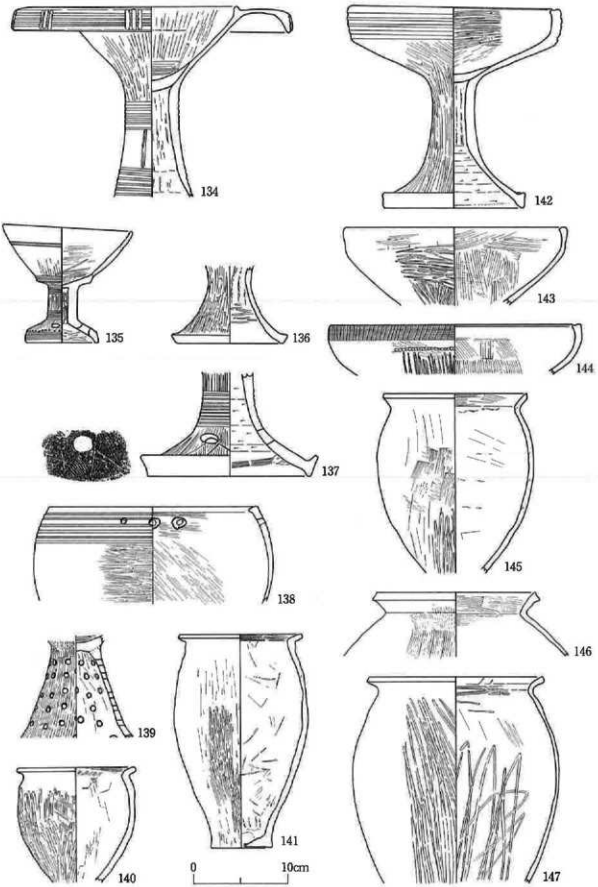
ヘラミガキが見られる。口径13.5cm。他地域産。

中・小型甕C′（115）　口縁端部を上方に拡張させた大型甕Cの形態をもつもの。（115）の調整は外面にハケメ（8／cm）、内面には工具痕が見られる。内外面共に煤が付着している。口径18.6cm、器高22.6cm、底径5.6cm。在地産。

底部（80）　鉢または甕の底部と思われる。調整は内外面共にハケメ（7／cm）が施される。黒斑あり。底径17.7cm。在地産。



第29図　北トレンチ出土弥生土器・土製品実測図



第30図　北トレンチ出土弥生土器実測図

北トレンチ出土弥生土器（第26・29・30図、図版29・31～33）

広口壷Ａ１（131）　漏斗状の口頸部をもち、口縁端部をやや外方に拡張する形態をもつもの。（131）の口縁部端面には櫛描簾状文、下端には刻み目、頸部には同原体による直線文（12／1.3cm）が施される。調整は内外面共にハケメ（6／cm・9／cm）が見られる。口径27.2cm。在地産。

広口壷Ａ３（125・126・130）　筒状の頸部から外反する口縁部をもち、広口壷Ａ１・Ａ２形態の口縁をさらに上下に拡張する形態をもつもの。（125）の口縁拡張部には２帯からなる櫛描簾状文、頸部には同原体による直線文（7／1.0cm）、頸体部境には簾状文が施される。調整は外面にヘラミガキ、内面には工具によるナデが見られる。口径19.6cm。在地産。（126）の口縁拡張部には２帯からなる櫛描簾状文とその帯間に同原体による扇形文、頸部には同原体による簾状文（10／1.4cm）が施される。調整は内外面共に工具によるナデが見られる。外面に黒斑あり。口径23.4cm。在地産。（130）の口縁拡張部には２帯からなる櫛描簾状文、頸部には同原体からなる直線文（11／1.25cm）、頸体部境に同原体による簾状文が施される。調整は内外面共にハケメ（6／cm・11／cm）、外面にはヘラミガキが見られる。口径22.0cm。在地産。

広口壷Ｂ４（127）　頸が太く、口縁部が外反して開き、口縁部端面に文様のない形態をもつもの。（127）はゆるやかに外反する口頸部から、口縁部外方に折返し、端部は肥厚し刻み目が施される。調整は内外面共に板状工具によるナデが見られる。口径12.0cm。在地産。

細頸壷Ｄ２（128）細長い筒状の口頸部をもち、口縁端部を内傾させた形態をもつもの。（128）は外面口縁部に簾状文手法の斜列点文・同原体による小刻みな簾状文、頸部には同原体による簾状文（11／1.8cm）、頸体部境には簾状文が施される。調整は内外面共にハケメ（15／cm）、内面にはユビナデが見られる。口径8.5cm。在地産。

鉢Ａ３（138）　やや深く口縁部を内傾させる形態をもつもの。（138）は口縁部が直口し、端部は面をもつ。口縁部には円孔・６条の凹線文が施される。調整は外面ヘラミガキ・内面にはハケメ（7／cm）が見られる。口径22.0cm。

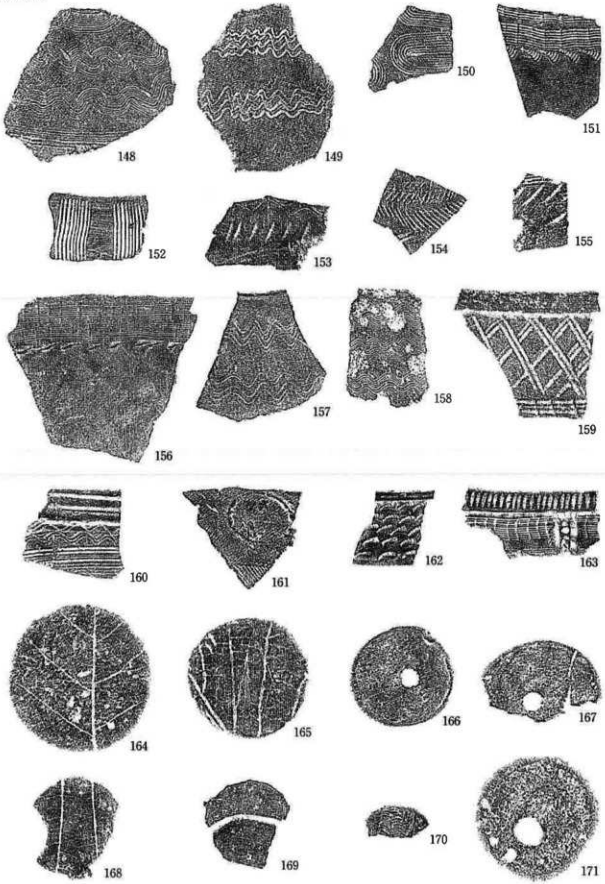
鉢Ｂ１（132・133）　口縁部を折り曲げて、口縁端部を下方に拡張した形態をもつもの。（132）は口縁部端面に櫛描簾状文、体部には同原体による簾状文（12／1.2cm）・簾状文手法の斜列点文が施される。調整は内外面共にハケメ（4／cm）・ヘラミガキが見られる。口径45.0cm。在地産。（133）の口縁部端面に円形の竹管文による押捺、体部にはヘラ工具による斜線文が施される。調整は内外面共に分割性のあるヘラミガキが見られる。口径48.2cm、器高25.4cm、底径11.8cm。在地産。

脚台（136・137・139）　（136）は高坏の脚台。調整は外面にヘラケズリ・ヘラミガキ、内面にはシボリメ・ヘラミガキが施される。裾径11.2cm。在地産。（137・139）は台付鉢の脚台。（137）は脚部に10条の沈線・3方向からなる円孔・未完成とも思われる鋸歯文が施される。調整は外面にヘラミガキ、内面にはヘラケズリ・ハケメ（7／cm）が見られる。裾部端面に黒斑あり。裾径17.2cm。在地産。（139）は円形竹管による穿孔が施される。調整は外面にハケメ（5／cm）・ヘラミガキ、内面には工具痕が見られる。在地産。

高坏Ａ１（135）　浅い椀状の坏部をもち、小型の形態をもつもの。（135）の外面に２・３・４条の凹線文、裾部には４箇所の円孔・円形竹管文による押捺が施される。調整は外面・坏部内面ヘラミガキ、脚部内面にはシボリメ・ヘラケズリが見られる。裾部に黒斑あり。口径13.5cm、器高12.5cm、裾径7.6cm。在地産。

高坏Ａ２（142～144）　高坏Ａ１形態の小型。（142）の口縁部に４条の凹線文が施される。調整は外面・坏部内面にヘラミガキ、脚柱部内面にはシボリメ・ヘラケズリが見られる。口径22.0cm、

NTZ42



第31図　弥生土器拓影

器高21.3cm、裾径14.6cm。在地産。(143) は無文である。調整は外面にヘラミガキ、内面にはハケメ (4／cm) が施される。内外面共に煤が付着している。口径23.5cm。在地産。(144) の口縁部に櫛描簾状文 (13／1.5cm)、体部にはヘラによるキザミ条文様が施される。調整は内外面共にハケメ (5／cm)、外面はヘラミガキが見られる。口径26.0cm。在地産。

高坏B２(134)　浅い椀状の坏部から水平に張り出した口縁部、口縁端部は下方に拡張する。(134) は口縁拡張部に３条の凹線文・３本1単位の格状浮文を９箇所、脚柱部に横方向に６条の沈線を２箇所、その帯間に縦方向の沈線が５箇所施される。調整は外面縦方向・坏部内面に４分割のヘラミガキ、脚柱部内面にはシボリメが見られる。口径17.5cm・29.5cm。在地産。

中・小型甕A′(140・141・147)　大型甕Aの形態をもつもの。(140) の調整は外面にハケメ・ヘラミガキ、内面にはハケメ (17／cm)・工具によるナデが施される。外面に煤が付着している。口径12.6cm。在地産。(141) の調整は外面にヘラケズリ・ヘラミガキ、内面にはハケメ・工具によるナデ、外面底部には一定方向のヘラケズリが施される。口径12.8cm、器高22.6cm、底径6.4cm。在地産。(147) の調整は外面にヘラミガキ、内面にはハケメ・工具によるナデ・ヘラミガキが施される。内外面共に煤が付着している。口径18.1cm。在地産。

中・小型甕B′(145)　大型甕Bの形態をもつもの。(145) の調整は外面にハケメ (7／cm)・工具によるナデ・ヘラミガキ、内面にはハケメ・工具によるナデが施される。外面に黒斑あり。14.9cm。在地産。

中・小型甕D′(146) 大型甕Dの形態をもつもの。(146) の調整は外面にハケメ、内面口縁部には同工具によるハケメ (5／cm) が施される。口径16.6cm。他地域産。

土製円板 (97)　壷の体部片からの転用品。周縁を打ち欠いただけの簡単なもの。表面には櫛描直線文、裏面には工具によるナデが施される。在地産。

土製紡錘車 (98・129)　共に甕・壷からの転用品。周縁を打ち欠いただけの簡単なもの。中央に円孔を穿つ。(98) は内外面共にハケメ (5／cm・7／cm) が施される。(129) は内外面共に風化のため詳細不明。

いろいろな文様 (148～163)　一部ではあるが、出土したいろいろな文様を掲載する。クシ工具による簾状文・波状文・直線文・扇形文・流水文・刺突文・斜列点文・刻み目、ヘラによる斜格子文・凹線文・沈線文・刻み目、棒状浮文などこれらを組み合わせさまざまな文様を作り出している。

いろいろな底部 (164～171)　外面底部に木の葉の圧痕をもつもの (164・165・168)、底部中央に穿孔をもつもの (166・167・171)、底部脇に沈線をもつもの (169)、爪痕をもつもの (170) などがある。(148～171　第31図、図版30)

〔統計〕

西ノ辻遺跡のこれまでの報告書においても器種ごとの形態分類による記述が行われ、器種および産地別の統計を試みられ、その形相も報告されてきた[1]。本調査地出土の弥生土器は、弥生時代の遺構内だけでなく、後世の遺構や整地層、耕作関係層からも数多く出土した。しかし、今回の統計に際しては弥生時代の各大溝 (北トレンチ大溝１～４、南トレンチ大溝１～３) から出土したものに限った。器種は前記の〔形態分類〕に基づき、出土遺物のうち完形または図化したもの以外は口縁部を抽出して各形態別に分けて (明らかなミニチュア土器は除外)、個体数を出した。産地別については裸眼またはスコープ (倍率30倍の実体鏡) を用い、角閃石の有無によって在地産 (生駒西麓産) と他地域産の２つに分けた。角閃石の多・少または僅少によって在地産でもさらに限定することも行われてはいるが[2]、今回は一括しておいた。また、第43次調査の調査・整理者の協力を得て、主要遺構 (土坑

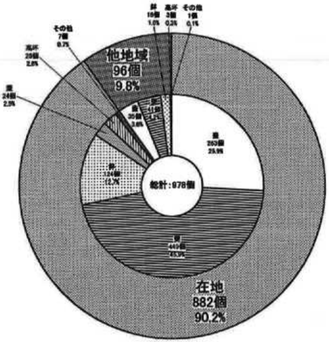
第3表　弥生土器器種・産地別表およびグラフ（第42次）

南トレンチ　大溝2

器種		分類	在地産	他地域産	合計(個)	器形別%	全体%	器種%
壺	広口	A1	55	9	64	216個	29.20%	8.30%
		A2	27	8	35	95.60%		4.50%
		A3	31	0	31			4.00%
		A3'						
		A4	50	7	57			7.40%
		B1	17	1	18			2.30%
		B2	4	0	4			0.50%
		B3	4	0	4			0.50%
		B3'	1	0	1			0.10%
		B4	2	0	2			0.30%
	短頸	C	1	0	1	0.40%		0.10%
	細頸	D1	2	0	2	1.80%		0.30%
		D2	2	0	2			0.30%
	無頸	E1	3	0	3	2.20%		0.40%
		E2	2	0	2			0.30%
小計			201	25	226	100%		
甕	大型	A	32	7	39	9.40%	53.70%	5.00%
		B	27	2	29	7.00%		3.70%
		C	13	1	14	3.40%		1.80%
		D	7	0	7	1.70%		0.90%
	小型	A'	193	8	201	48.30%		25.90%
		B'	31	4	35	8.40%		4.50%
		C'	77	9	86	20.70%		11.10%
		D'	5	0	5	1.20%		0.60%
小計			385	31	416	100%		
鉢		A1	5	3	8	8.40%	12.30%	1.00%
		A2	20	3	23	24.70%		2.90%
		A3	19	3	22	23.20%		2.80%
		B1	20	1	21	22.10%		2.70%
		B2	5	0	5	5.30%		0.60%
		B3	15	1	16	16.80%		2.10%
小計			84	11	95	100%		
蓋		A	3	0	3	15.80%	2.50%	0.40%
		B	1	0	1	5.30%		0.10%
		C	5	0	5	26.30%		0.60%
		D	10	0	10	52.60%		1.30%
小計			19	0	19	100%		
高坏		A1	2	0	2	10.50%	2.50%	0.30%
		A2	4	0	4	21.10%		0.50%
		B1	6	1	7	36.80%		0.90%
		B2	5	1	6	31.60%		0.80%
小計			17	2	19	100%		
その他								
総計			706	69	775			
割合			91.10%	8.90%	100%		100%	100%

北トレンチ　大溝3

器種		分類	在地産	他地域産	合計(個)	器形別%	全体%	器種%
壺	広口	A1	11	2	13	28個	33.30%	14.40%
		A2	1	0	1	93.30%		1.10%
		A3	6	0	6			6.7%
		A3'	1	0	1			1.10%
		A4	4	3	7			7.80%
		B1						
		B2						
		B3						
		B3'						
		B4						
	短頸	C						
	細頸	D1				3.30%		
		D2	1	0	1			1.10%
	無頸	E1	1	0	1	3.30%		1.10%
		E2						
小計			25	5	30	100%		
甕	大型	A	4	1	5	15.60%	35.60%	5.60%
		B	2	0	2	6.30%		2.20%
		C	1	2	3	9.40%		3.30%
		D						
	小型	A'	15	2	17	53.10%		18.90%
		B'	1	0	1	3.10%		1.10%
		C'	4	0	4	12.5%		4.40%
		D'						
小計			27	5	32	100%		
鉢		A1					25.60%	
		A2	2	2	4	17.40%		4.40%
		A3	3	1	4	17.40%		4.40%
		B1	11	0	11	47.80%		12.20%
		B2	2	0	2	8.70%		2.20%
		B3	2	0	2	8.70%		2.20%
小計			20	3	23	100%		
蓋		A						
		B						
		C						
		D						
小計						100%		
高坏		A1					5.60%	
		A2	3	0	3	60%		3.30%
		B1	2	0	2	40%		2.20%
		B2						
小計			5	0	5	100%		
その他								
総計			77	13	90			
割合			85.60%	14.40%	100%		100%	100%



77・井戸6）出土土器についても統計を出してみた。統計表は『亀井（その2）』の表形を基に作成した。

まず今回の調査において大量の弥生土器が出土した南トレンチ大溝2を中心にその傾向を見てみよう。この溝は方形周溝墓の北溝および東・西溝の各一部と考えられ、供献土器と考えられるものもあったが、大半は埋土内から出土し、上記の方法による土器総数は775個を数えた。機種では甕が416個体、53.7%と半数以上を占め、壺29.2%、鉢12.3%などとつづき、高坏は2.5%にしかすぎない。これに対し北トレンチ大溝3（総数90個）では甕35.6%、壺33.3%であるとともに鉢が25.6%、高坏が5.6%と若干異なる数値がでた。この結果は、第43次調査の井戸6が前者（甕47.7%、壺32.6%、鉢15.1%）、土坑77は若干異なるが後者に近く言え（甕35.5%、壺25.2%、鉢36.5%）、第19次調査が甕33.4%で、壺・高坏の計約30%としたのと類似している。土坑77が鉢の割合が高いなど各遺構の性格を考えさせるものもあったが、ほとんどは埋没時の埋土内からの出土であった。全体的に甕の出土量（割合）が多いことは、調査地周辺が生活色の極めて濃い地域＝中期中・後半の住居域であったことを窺わせている[3]。

第4表　弥生土器器種・産地別表（第43次）

SE243 井戸6

器種	分類		在地産	他地域産	合計（個）	割合(%)	全体%	累積%
壺	広口	A1	7	0	7	97.90%	37.80%	8.10%
		A2	4	3	7	29個		8.10%
		A3	5	0	5			5.30%
		A3'	1	0	1			1.20%
		A4	3	0	3			3.50%
		B1						
		B2						
		B3						
		B3'						
		B4						
	短頸	C						
	細頸	D1	1	1	2	7.10%		9.30%
		D2						
	無頸	E1						
		E2						
小計			24	4	28	100%		
甕	大型	A	5	0	5	12.20%	47.70%	5.20%
		B	1	1	2	4.90%		2.30%
		C	1	0	1	2.40%		1.20%
		D	2	0	2	4.90%		2.30%
		A'	18	3	21	51.20%		24.40%
		B'						
	小型	C'	8	1	9	22%		10.50%
		D'	2	0	2	4.90%		1.20%
小計			36	5	41	100%		
鉢		A1	2	0	2	13.40%	18.10%	2.30%
		A2	2	0	2	13.40%		2.30%
		A3						
		B1	4	1	5	33.50%		5.80%
		B2	3	0	3	20.10%		3.50%
		B3	1	0	1	7.70%		1.20%
小計			12	1	13	100%		
蓋		A					2.30%	
		B						
		C	1	0	1	50%		1.20%
		D	1	0	1	50%		1.20%
小計			2	0	2	100%		
高坏		A1					2.30%	
		A2						
		B1						
		B2	2	0	2	100%		2.30%
小計			2	0	2	100%		
その他								
総計			76	10	86			
割合			88.40%	11.60%	100%		100%	100%

SE742 土坑77

器種	分類		在地産	他地域産	合計（個）	割合(%)	全体%	累積%
壺	広口	A1	4	0	4	23個	25.30%	3.30%
		A2	2	2	4	63.20%		2.70%
		A3	13	0	13			12.20%
		A3'						
		A4	1	0	1			0.90%
		B1	1	0	1			0.90%
		B2						
		B3						
		B3'						
		B4						
	短頸	C						
	細頸	D1	1	0	1	3.70%		0.90%
		D2						
	無頸	E1	1	0	1	11.10%		0.90%
		E2	2	0	2			
小計			26	2	27	100%		
甕	大型	A	6	2	8	21.00%	33.90%	7.50%
		B	2	1	3	8.00%		2.80%
		C	1	0	1	3.00%		0.90%
		D	1	0	1	3.00%		0.90%
		A'	15	2	17	45.00%		12.90%
		B'	3	0	3	8.00%		2.80%
	小型	C'	3	1	4	10%		3.70%
		D'	2	0	2	5.00%		1.90%
小計			33	6	39	100%		
鉢		A1	5	1	6	13.60%	54.50%	5.60%
		A2	3	0	3	7.70%		2.80%
		A3	2	0	2	5.10%		1.90%
		B1	3	0	3	7.70%		2.80%
		B2	5	1	6	15.40%		5.60%
		B3	17	2	19	46.20%		16.60%
小計			35	4	39	100%		
蓋		A	1	0	1	50.00%	1.30%	0.90%
		B						
		C						
		D	1	0	1	50%		0.90%
小計			2	0	2	100%		
高坏		A1					0.90%	
		A2						
		B1						
		B2	1	0	1	100%		0.90%
小計						100%		
その他								
総計			94	13	107			
割合			88.00%	12.00%	100%		100%	100%

また大溝2の土器は、産地別では在地産が91.1%と大半を占め、土器の供給はほとんど地元でまかなっていたと考えられる。これは大溝3が85.6%、総大溝でも89.9%であるとともに、第43次調査の井戸6は88.4%、土坑77は89%であった。これはこれまでの統計からも窺え[4]、他遺跡に比べてその自給率は極めて高い[5]。

甕のうち小型甕が総大溝で74.3%を占め、その大半は在地産であり（94%）、大型甕も約89%が在地産であった。これは煮沸用具として日常最も頻繁に使用していた甕（とくに小型）をほとんど身近で作っていたことを示している。

壺のほとんどは広口壺であった（総大溝で275個、94.4%）。そのうち口縁端部に文様を施したもの（A・B1～3）も多く見られたが、無文（頸・底部も含む）のものが26%と1/4を占め、これらの多くは在地産（約83%）であった。無文で口縁内面に円形浮文を施したいわゆる西ノ辻N地点のものは確認することはできなかったが、ほぼ同時期のもので後期土器への移行期を物語っている。口縁部を垂下または上下に拡張したもの（AまたはBの1・3・3′―いわゆる廉状文系土器―）の大半は在地産であった。（約91%）のに対し、A2（口縁端面に波状文・列点文など）は他地域産の割合が多くなっていた（総大溝で22.5%）。

鉢は口縁を拡張したB1・2（多くは廉状文が施されている）はほとんど在地産（総大溝96%）で、無文または凹線文などの見られる口縁を拡張しないもの（A）は他地域産の割合が若干高くなっていた（総大溝で12%）。しかし、B形態から変形していったと思われる口縁を拡張し全面無文のもの（西ノ辻N地点）は確認できなかった。

高坏は全体に占める割合は極めて少ないが（総大溝で2.9%）、口縁を拡張しないAには凹線文を施したものともに無文のものも見られた。

本来なら本遺跡における中期から後期にわたる土器の型式（様式）を再確認して系統立て、編年の

試みも考えたが、今回の調査においては型式差を追随・立証するための極めて良好な一括資料が少なかったこともあり、今後の課題としておきたい。

注1）a.『鬼虎川遺跡第26次　西ノ辻遺跡第18～20次調査概要報告』大阪府教育委員会　財団法人東大阪市文化財協会　1995年。

b.『西之辻遺跡第23次発掘調査報告書』東大阪市教育委員会　財団法人東大阪市文化財協会　1991年。

c.『西ノ辻遺跡第27次・鬼虎川遺跡第32次発掘調査報告書』財団法人東大阪市文化財協会　1994年。

また、『西ノ辻遺跡―第５次発掘調査概要報告書―』（財団法人東大阪市文化財協会　2000年）では、中期～後期土器を文様・調整からその変遷を見、各期の特性が論じられている。

2）　土器胎土内の角閃石の僅少なものについて、『西之辻遺跡第23次発掘調査報告書』（注１）では西ノ辻内の製品（この周辺の地質には角閃石の含有が少ないこと）と見なし、先の『河内平野遺跡群の動態Ⅱ』では低地産としているなど、同じ中河内の遺跡の調査報告書において異なっている。

3）　近畿自動車建設関連の瓜生堂遺跡全体の弥生中期土器の器種構成は、甕43.4%、壺19.4%、鉢7.5%など（『河内平野遺跡群の動態Ⅱ』前掲）。

4）　これまでの統計によると、在地産は86.6%（注１－ａ）、角閃石の多：少：無の割が７：１：１、すなわち約89%（注１－ｃ）と今回の数値はより高いが、ほぼ同じ傾向であるといえる。

5）　たとえば西隣の鬼虎川遺跡では、角閃石の多：少：無の割が２：１：１と、在地産75%（注１－ｃ）。

b．縄文土器（第32・33図、図版34）

本調査で出土した縄文土器は、深鉢胴部破片に突帯文が見られないことや深鉢口縁部に面取りがされてあることから、その大半が晩期滋賀里Ⅳ式に含まれるものと思われる。しかし、本資料は後世の包含層や遺構に混入した状態で出土しており、出土状態に於ける一括性は認められない。ここで挙げる資料はその中から明らかに縄文土器であると認識出来たものを抽出したものであるため、出土した縄文土器の正確な数を把握したとは言い難いが、資料を型式学的な属性に従って分類した上で概観し、若干の考察を加えたい。資料に関する本文中で触れない事項については第６表を参照されたい。

１．分類基準

出土資料は、形式と器形を基に大別し、これ以外の諸属性から細別を試み、以下の要領で分類した。尚、この分類に用いた名称は、報告者の任意である。

①深鉢Ａ類：いずれも胴部が緩やかに屈曲し口頸部が外傾する器形を呈するものと考えられる。突帯の有無や破片の部位の違い等から、次の様に細分する。Ａ－１類は、口縁部破片で突帯文を有するものである（172～175・197～199）。これらの突帯には刻みの有無の別が見られるが、突帯に刻みを有するものをａ類（172・173・197・198）、無刻みのものをｂ類（174・175・199）としたい。口縁部破片で無文のものはＡ－２類とする（202）。胴部と胴部破片はＡ－３類（176～182・200・201・203・204）とする。Ａ－１類もしくは２類の胴部・胴部であると思われるが、正確な特定は出来ない。胴部外面には削りもしく条痕が残る。尚、深鉢Ａ類の底部形態は抽出出来なかった。

②深鉢Ｂ類：中期末～後期初頭のものと思われる。口縁部と胴部を区画する隆帯表現が見られることから、北白川Ｃ式である可能性が高いか（208）。

③浅鉢Ａ類：外傾する短い口頸部を有する浅鉢。黒色磨研土器からの技法上の繋がりが考えられ、器面調整は全て磨きである。磨きは押し並べてＢ類よりも丁寧である。口唇部に突起を有するものがある。Ａ－１類は頸部がやや長く、頸部内面段差の程度が比較的弱い（184～186）。Ａ－２類は頸部が短く、段差の程度が強い（183）。Ａ－３類は胴部を一括した

（187・188）。口縁部は残存していないが、A－1類の肩部になるものと思われるためA類に含める。肩部直上に沈線の有無の別が見られる。

④浅鉢B類：口唇部直下に無刻みの突帯を貼り付けるものである。器面調整は磨き又は丁寧なナデであり、黒色磨研土器からの技法上の繋がりが考えられる。浅鉢B類は、鬼塚遺跡等の近接する遺跡からの出土例が多い一方で、滋賀里遺跡や口酒井遺跡からは、突帯文土器期の遺跡でありながら出土事例が極端に少ない。生駒山西麓地域の在地的色彩の強い土器の可能性がある。B－1類・2類に細分する。B－1類（189・196）は口縁内面に段が見られるが、B－2類（190・191・205・206）には見られない。

⑤浅鉢C類：外見は浅鉢B－2類と酷似するが、突帯を貼付する際に下からナデ上げる特徴があり、この技法の差異から浅鉢B－2類と区別する（192～194）。

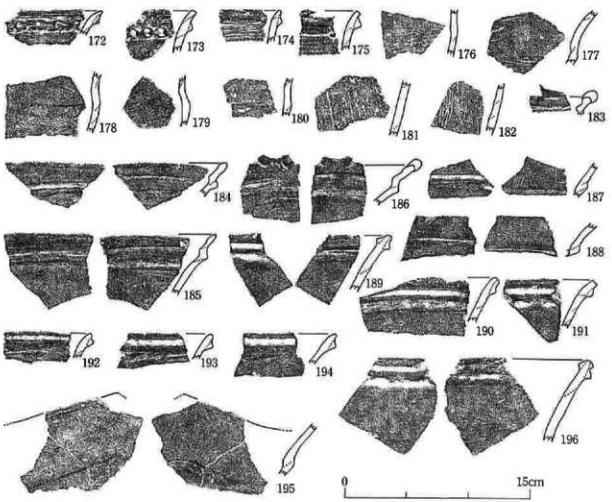
⑥浅鉢D類：大型の皿状の器形を呈すると思われるもの（207）。

⑦浅鉢E類：波状口縁方形浅鉢（195）。

⑧その他：時期・型式が不明なもの（209・210）。

2．南トレンチ出土資料

172・173は、深鉢A－1a類である。172は、淡暗黄褐色を呈し、胎土に石英・角閃石・雲母を含む。外面は、ナデ調整後、口唇部直下に突帯を摘みナデで貼付している[9]。このため断面は三角形



第32図　縄文土器拓影1

状を呈する。突帯は貼付後工具により押圧されている（D字刻み[21]）。内面にはナデ調整を施す。口唇部上端と外端は面取りされている。173は、明白褐色を呈し、胎土に石英・長石を含む。外面は、ナデ調整後、口唇部下約1cmのところに摘みナデで突帯を貼付している。突帯は貼付け後、竹管状工具によって押圧されており（O字刻みか）、断面は三角形状の部分と刻みにより蒲鉾状（半円形）になる部分がある。内面にはナデ調整が、口唇部には面取りが施される。胎土と色調から、非在地系の土器と考えられる。

174・175は、深鉢A－1b類である。174は、外面は淡暗黄褐色、内面は黒褐色を呈し、胎土に石英・雲母・角閃石を含む。頸部外面には二枚貝条痕と思われる状痕調整が施され、その後に摘みナデにより突帯が貼付されている。突帯は無刻みである。内面はナデが、口唇部には面取りが施される。175は、外面は黒褐色、内面は淡暗黄褐色を呈し、胎土に石英・雲母・角閃石を含む。頸部外面には二枚貝条痕と思われる状痕調整が施され、その後に摘みナデにより突帯が貼付されている。突帯は無刻みである。内面はナデが、口唇部には面取りが施される。器面調整は174と同様である。

176～182は深鉢A－3類であり、176～180が屑部破片、181・182が胴部破片である。176は、淡暗黄褐色を呈し、胎土に石英・角閃石・雲母を含む。外面屑部上半にはナデ調整、下半には削り調整が残る。内面はナデ調整が施される。177は、外面が暗茶褐色、内面が茶褐色を呈し、胎土に石英・長石・雲母・角閃石を含む。外面頸部は丁寧なナデ、胴部には削りが残り、内面にはナデが施される。178は、外面が淡暗黄褐色、内面が暗茶褐色を呈し、胎土に石英・角閃石・雲母を含む。外面屑部上部はナデ調整が、下半は削り調整が施される。179は、外面が淡黄褐色、内面が暗茶褐色を呈し、胎土に石英・角閃石・雲母を含む。外面頸部は丁寧なナデ（もしくは磨き）、胴部には削りが残る。内面はナデが施される。180は、外面が黒褐色、内面が淡暗黄褐色を呈し、胎土に石英・雲母・角閃石を含む。外面頸部には丁寧なナデ、胴部には削りが、内面にはナデが残る。内面は比較的丁寧なナデ調整が残る。屑部破片の内、177は頸部と胴部の境が比較的明瞭だが、他は緩やかに屈曲する。181は、暗茶褐色を呈し、胎土に石英・雲母・赤色斑粒を含む。外面には削りが、内面には軽い磨きが施される。器壁が緩やかに屈曲する箇所があることから、屑部である可能性もある。182は、暗茶褐色を呈し、胎土に花崗岩・雲母・角閃石を含む。外面には削りの後にナデが、内面にはナデが施される。184～186は浅鉢A－1類である。184は、暗茶褐色（一部茶褐色）を呈し、胎土に石英・角閃石・雲母を含む。全面磨き調整が施され、外面頸部屈曲部と内面口縁直下に工具調整痕が顕著に残る。185は、外面が暗茶褐色、内面が茶褐色を呈し、胎土に石英・角閃石・雲母を含む。全面磨き調整が施され、内外頸部屈曲部に工具調整痕が顕著に残る。186は、暗茶褐色を呈し、胎土に石英・雲母を含む。全面に磨き調整を施し、外面に工具痕が多数残る。口唇部に突起を持つ。

183は、浅鉢A－2類である。淡暗黄褐色を呈し、胎土に石英・角閃石・雲母を含む。前面磨き調整である。口唇部に突起を持つ。

187・188は、浅鉢A－3類で、共に屑部直上に沈線を持つ。187は、外面が暗茶褐色、内面が茶褐色を呈し、胎土に石英・雲母を含む。全面磨き調整を施される。188は、外面が淡暗黄褐色、内面が暗茶褐色を呈し、胎土に石英・角閃石・雲母を含む。全面に磨き調整が施される。

189・196は、浅鉢B－1類である。189は、淡暗黄褐色を呈し、胎土に石英・長石・雲母を含む。内外面共に突帯貼付後磨き調整が施される。外面の突帯には接合痕が、内面のものには工具調整痕が見られる。196は、淡暗黄褐色を呈し、胎土に石英・長石・角閃石・雲母を含む。外面は突帯貼付後磨き調整を施し、突帯直上に棒状工具で凹線を施している。内面は削り調整と思われる工具調整と突帯貼付後の磨き調整を施す。内面突帯には器面との接合痕が見られる。

190・191は、浅鉢B－2類である。190は淡暗黄褐色を呈し、胎土に石英・長石・角閃石・雲母を含む。外面には突帯貼付後磨きを施し、突帯直上に工具による凹線が施される。内面には丁寧なナデ調整が施される。外面突帯には接合痕が残る。191は、淡暗黄褐色を呈し、胎土に石英・雲母を含む。施文・器面調整は、190と同様である。

192～194は浅鉢C類である。192は、淡暗黄褐色を呈し、胎土に石英・長石・角閃石・雲母を含む。外面は突帯貼付後磨き調整が、内面にも磨き調整が施される。外面突帯には接合痕が残る。193は、外面は淡黄褐色、内面は淡暗黄褐色を呈し、胎土に石英・角閃石・雲母を含む。外面は突帯貼付後磨き調整が、内面にも磨き調整が施される。外面突帯には接合痕が残る。194は、外面は淡黄褐色、内面は淡暗黄褐色を呈し、胎土に石英・長石・角閃石・雲母を含む。外面は突帯貼付後磨き調整が、内面にも磨き調整が施される。

195は、浅鉢E類である。外面は淡灰褐色、内面は茶褐色を呈し、胎土に石英・長石・角閃石・雲母を含む。外面に削り調整後磨き調整、内面に磨き調整を施す。肩部屈曲部に加飾は無い。

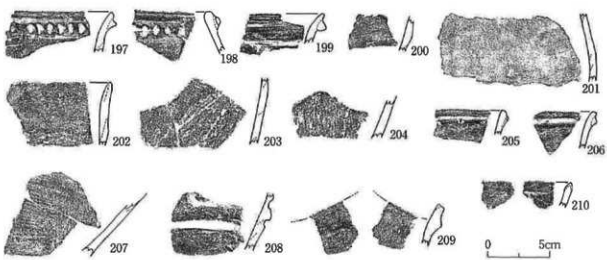
3．北トレンチ出土資料

197・198は、深鉢A－1a類である。197は、淡茶褐色を呈し，胎土に石英・角閃石・雲母を含む。外面は突帯貼付前にナデが施され、口唇部下約5㎜のところに摘みナデによって突帯を貼付した後、篦状工具による押圧が加えられる（D字刻み）。口唇部は面取りされ、内面はナデ調整が施されている。198は、淡黄褐色を呈し、胎土に石英・長石・角閃石・雲母を含む。外面は、丁寧なナデを施した後、摘みナデによって突帯を貼付している。突帯には工具によるD字刻みが入る。内面にはナデが、口唇部には面取りが施される。

199は、深鉢A－1b類と思われる。外面が黒褐色、内面が暗茶褐色を呈し、胎土に石英・花崗岩・雲母・角閃石を含む。外面は、突帯を摘みナデによって貼付した後、頸部を篦状工具と思われる工具によって磨きが施され、突帯と器面との接合痕を塞いでいる。突帯は、無刻みである。内面は丁寧なナデが、口唇部には丁寧なナデが施される。

202は深鉢A－2類である。外面が暗茶褐色、内面が淡暗黄褐色を呈し、胎土に花崗岩・角閃石・雲母を含む。外面の口頸部はナデが、胴部には削りが施される。内面はナデである。

200・201・203・204は、深鉢A－3類であり、200・201が肩部破片、203・204が胴部破片である。200は、外面が黒褐色、内面が淡暗黄褐色を呈し、胎土に石英・角閃石・雲母を含む。外面には



第33図　縄文土器拓影2

丁寧なナデ（もしくは磨き）が、内面にはナデが施される。203は、外面が淡暗黄褐色、内面が暗茶褐色を呈し、胎土に花崗岩・角閃石・雲母を含む。外面には削り痕が顕著に残り、内面には丁寧なナデ調整が残る。201は、暗茶褐色を呈し，胎土に石英・角閃石・雲母を含む。外面は、胴部に削り痕が見られるものの、基本的にナデが施される。内面は細密条痕が顕著に残る。204は、茶褐色を呈し、胎土に石英・長石・角閃石・雲母を含む。外面に削りが、内面にナデが施される。底部付近の胴部破片であろう。

208は、深鉢B類である。外面が黒灰褐色、内面が暗茶褐色を呈し、胎土に花崗岩・石英・角閃石・雲母を含む。内外面共にナデ調整が施されるが、磨滅が著しい。外面には、口縁部と胴部を区画する隆帯を挟んで、直下に横走する凹線が、直上にL字形を呈する凹線が残る。縄文が器面に見られない本資料の類例は、日本海沿岸地域に多く見られるという[3]。

205・206は、浅鉢B－２類である。205は、外面が暗茶褐色、内面が暗黄褐色を呈し、胎土に石英・長石・角閃石を含む。外面はナデが施され、突帯は貼付後下からなで上げられO字刻みが入る。内面はナデが、口唇部は面取りが施される。206は、淡暗黄褐色を呈し、胎土に石英・長石・花崗岩・角閃石・雲母を含む。外面はナデが施され、突帯は摘みナデにより貼付される。内面にはナデが、口唇部には面取りが施される。205・206共に、浅手の深鉢である可能性もある。

207は、浅鉢D類である。外面が淡暗黄褐色、内面が淡黄褐色を呈し、胎土に石英・角閃石・雲母を含む。外面には磨き、内面にはナデが施される。内面底部直上と思われる箇所に工具痕が残る。

209・210は、時期・型式不明のものである。209は、淡暗黄褐色を呈し、胎土に石英・花崗岩・角閃石を含む。外面はナデが施され、突帯はナデつけられている。内面にはナデが、口唇部には面取りが施される。家根祥多氏によると、突帯文土器出現期（（泉1990）による「鬼塚H地点下層」資料に相当か）の波状口縁を有する土器（形式不明）の可能性があるというが判然としない。210は、外面が淡暗黄褐色、内面が暗茶褐色を呈し、胎土に石英・雲母・角閃石を含む。内外面共ナデ調整。内面口唇直下に肥厚帯がある。家根氏によると、可能性としては、中期の船元式・里木式に相当することが考えられるという。

4．考察

以下、主に晩期に相当する資料を特に取り上げて記述する。

本資料は、後世の包含層等から出土しており、ローリングをうけていることから、出土状況に於いては一括性に乏しいと言わざるを得ない。然しながら、多少の混入があるものの、型式学的に見る限り、後述する様に、資料の時期幅は比較的纏っていると言え、概ね滋賀里Ⅳ式の範疇に収まるものと考えられる。焼成は概ね良好で、胎土は一部を除き生駒西麓地域のものである。尚、器面調整や器形等から、184～186は同一個体である可能性が高い。

組成上の特徴としては、深鉢の比率が全体で浅鉢の２倍弱と高いことが分かり、浅鉢がほとんど見られないという長原式期より古い資料であると言えよう。型式学的には、次のことが指摘出来る。①晩期の深鉢（深鉢A類）には、肩部突帯が存在せず、口頸部が無文もしくは口縁部に突帯が一条巡るもののみが存在すること。②晩期の深鉢（深鉢A類）の口唇部に刻みがなく、面取りがされているものが多いこと。③突帯を持つ浅鉢（浅鉢B類）が顕著に見られること。④波状口縁方形浅鉢（浅鉢E類）肩部に突帯や沈線が見られないこと。以上は滋賀里Ⅳ式の特徴と言え、大半の資料がこの時期に比定出来る可能性が高い。しかし、前述の通り、本資料は後世の包含層等から出土したものである。型式学的に変化が追えるとされる浅鉢A類とB類とが見られ、泉氏の滋賀里Ⅳ式の細分（泉1990）による、口酒井遺跡代15層資料以前、「鬼塚遺跡H地点下層」と橿原遺跡資料両者の時期に跨る若干

の時期幅があると思われる。

本文を纏めるに際し、(故) 家根祥多・千葉 豊両氏から御指導・御助言を賜りました。記して謝意を表します。

〈 註 〉

1) 摘みナデによる貼付とは、突帯を器面に貼付するため、或いは、突帯の形状を整えるための作業である。突帯を指で摘んだまま横方向にスライドさせることにより、突帯を器面に貼付させると考えられる。突帯の上下に指によるものと思われるなで、痕が観察され、突帯の断面が三角形状となる特徴が見られる。

2) 技法的には押圧であるにも関わらず名称を「刻み」としているのは、先行研究の分類名称との齟齬を防ぐためである。刻みの分類は、基本的に（中村1977、家根1982、泉・家根1985）に倣った。

3) 竪田直氏による平式C式に相当する可能性が考えられるが（竪田1966、河野1997）、ここでは平C式は北白川C式の範疇に含まれるものと解釈した。尚、位置付けに関しては、家根祥多・千葉 豊両氏より御教示頂いた。

〈参考文献〉

浅岡俊夫2000「凸帯紋土器の分類」『口酒井遺跡　第1次～第10次・第12次～第16次調査の概要』伊丹市教育委員会・六甲山麓遺跡調査会

伊丹市教育委員会・六甲山麓遺跡調査会2000『口酒井遺跡　第1次～第10次・第12次～第16次調査の概要』

泉 拓良1990「西日本凸帯文土器の編年」『文化財学報』8　奈良大学文学部文化財学科

泉 拓良・家根祥多1985『北白川追分遺跡出土の縄文土器』『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ　北白川追分遺跡の調査』京都大学埋蔵文化財研究センター

竪田 直1966『平遺跡発掘調査概要』帝塚山大学考古学研究室

河野一隆1997「平式（平ⅢC式）土器Ⅱ」『平遺跡』京都府埋蔵文化財調査研究センター

滋賀県教育委員会1973『湖西線関係遺跡調査報告書　本文編・図版編』

中村友博1977「和歌山県瀬戸遺跡の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和51年度』京都大学農学部構内遺跡調査会・京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会

福永信雄1997「縄文時代晩期の遺物」『鬼塚遺跡第8次発掘調査報告書』財団法人東大阪市文化財協会

第5表　縄文土器集計表（単位：個）

	南トレンチ	北トレンチ	計
深鉢 A1a	2（4．1）	2（4．1）	4（8．2）
A1b	2（4．1）	1（4．1）	3（6．1）
A2	0（0．0）	1（2．0）	1（2．0）
A3	13（29．4）	7（14．3）	20（43．1）
B	0（0．0）	1（2．0）	1（2．0）
深鉢小計	17（34．7）	12（24．5）	29（59．2）
浅鉢 A1	3（6．1）	0（0．0）	3（6．1）
A2	1（2．0）	0（0．0）	1（2．0）
A3	3（6．1）	0（0．0）	3（6．1）
B1	2（4．1）	0（0．0）	2（4．1）
B2	2（4．1）	2（4．1）	4（8．2）
C	3（6．1）	0（0．0）	3（6．1）
D	0（0．0）	1（2．0）	1（2．0）
E	1（2．0）	0（0．0）	1（2．0）
浅鉢小計	15（30．6）	3（6．1）	18（36．7）
不明	0（0．0）	2（4．1）	2（4．1）
合計	32（65．3）	18（36．7）	49（100．0）

※括弧内の数値は%。小数点第二位以下四捨五入。

※本文中で取り上げない資料を含む。

第6表　縄文土器一覧

番号	地区	層位・遺構	分類	部位	色調（外／内）	胎土	焼成
172	南T-H	大洞2	深鉢A-1a	口縁部	淡暗黄褐色	石英・角閃石・雲母	良好
173	南T-H		深鉢A-1a	口縁部	明白褐色	石英・雲母	やや不良
174	南T	土坑5	深鉢A-1b	口縁部	淡暗黄褐色／黒褐色	石英・角閃石・雲母	良好
175	南T	土坑10	深鉢A-1b	口縁部	黒褐色／淡暗黄褐色	石英・角閃石・雲母	良好
176	南T-H	大洞2	深鉢A-3	肩部	淡暗黄褐色	石英・角閃石・雲母	良好
177	南T-F調	第4層	深鉢A-3	肩部	暗茶褐色／茶褐色	石英・長石・角閃石・雲母	良好
178	南T-H	大洞2	深鉢A-3	肩部	淡暗黄褐色／暗茶褐色	石英・長石・角閃石・雲母	良好
179	南T-H	大洞2?	深鉢A-3	肩部	淡黄褐色／暗茶褐色	石英・角閃石・雲母	良好
180	南T-H	大洞2	深鉢A-3	肩部	黒褐色／淡黄褐色	石英・角閃石・雲母	良好
181	南T-H	大洞1	深鉢A-3	胴部	暗茶褐色	石英・雲母・赤色斑粒	良好
182	南T-F	土坑10	深鉢A-3	胴部	暗茶褐色	花崗岩・角閃石・雲母	良好
184	南T-H	大洞2?	浅鉢A-1	口縁部	暗茶褐色（一部茶褐色）	長石・角閃石・雲母	良好
185	南T-H	大洞2	浅鉢A-1	口縁部	暗茶褐色／茶褐色	石英・角閃石・雲母	良好
186	南T-H	大洞2?	浅鉢A-1	口縁部	暗茶褐色	石英・雲母	良好
183	南T-GH	第4層等（側溝）	浅鉢A-2	口縁部	淡暗黄褐色	石英・角閃石・雲母	良好
187	南T-H	大洞2?	浅鉢A-3	肩部	暗茶褐色／茶褐色	石英・雲母	良好
188	南T-H	大洞2?	浅鉢A-3	肩部	淡暗黄褐色／暗茶褐色	石英・角閃石・雲母	良好
189	南T-H	第4層下層	浅鉢B-1	口縁部	淡暗黄褐色	石英・長石・雲母	良好
190	南T-H	大洞2	浅鉢B-1	口縁部	淡暗黄褐色	石英・長石・角閃石・雲母	良好
191	南T-H	大洞2	浅鉢B-2	口縁部	淡暗黄褐色	石英・長石・角閃石・雲母	良好
192	南T-H	第4層下層	浅鉢B-2	口縁部	淡暗黄褐色	石英・雲母	良好
193	南T-H	第4層下層	浅鉢C	口縁部	淡暗黄褐色	石英・長石・角閃石・雲母	良好
194	南T-H	大洞2	浅鉢C	口縁部	淡黄褐色／淡暗黄褐色	石英・長石・角閃石・雲母	良好
195	南T-H	大洞2	浅鉢C	口縁部	淡黄褐色／淡暗黄褐色	石英・長石・角閃石・雲母	良好
196	南T-H	大洞2	浅鉢E	口縁部	淡灰褐色／茶褐色	石英・長石・角閃石・雲母	良好
197	北T-I	大洞1	深鉢A-1a	口縁部	淡黄褐色	石英・角閃石・雲母	良好
198	北T-G東	第2層・第3層上層	深鉢A-1a	口縁部	淡黄褐色	石英・長石・角閃石	良好
199	北T-GH東	第3層など	深鉢A-1b	口縁部	黒褐色／暗茶褐色	花崗岩・石英・角閃石・雲母	良好
202	北T-J	落ち込み	深鉢A-2	口縁部	暗茶褐色／淡暗黄褐色	花崗岩・石英・角閃石・雲母	良好
200	北T-I	大洞1	深鉢A-3	肩部	黒褐色／淡暗黄褐色	石英・角閃石・雲母	良好
201	北T-J	落ち込み	深鉢A-3	肩部	暗茶褐色	石英・角閃石・雲母	良好
203	北T-H	土坑	深鉢A-3	胴部	淡暗黄褐色／暗茶褐色	花崗岩・角閃石・雲母	良好
204	北T-H	地山上面精査	深鉢A-3	胴部	茶褐色	石英・長石・角閃石・雲母	良好
208	北T-H	弥生包含層	深鉢B	肩部	黒灰褐色／暗茶褐色	花崗岩・石英・角閃石・雲母	良好
205	北T-JK	大洞2	浅鉢B-2	口縁部	暗茶褐色／暗黄褐色	石英・長石・角閃石	良好
206	北T-K	第4層	浅鉢B-2	口縁部	淡暗黄褐色	花崗岩・石英・角閃石・雲母	良好
207	北T-J	落ち込み	浅鉢D	胴部	淡暗黄褐色／淡黄褐色	石英・角閃石・雲母	良好
209	北T-H	土坑11	その他	口縁部	淡暗黄褐色	花崗岩・石英・角閃石	良好
210	北T-H	遺構面精査	その他	口縁部	淡暗黄褐色／暗茶褐色	石英・角閃石・雲母	良好

※ここで取り上げない事項は本文参照のこと。

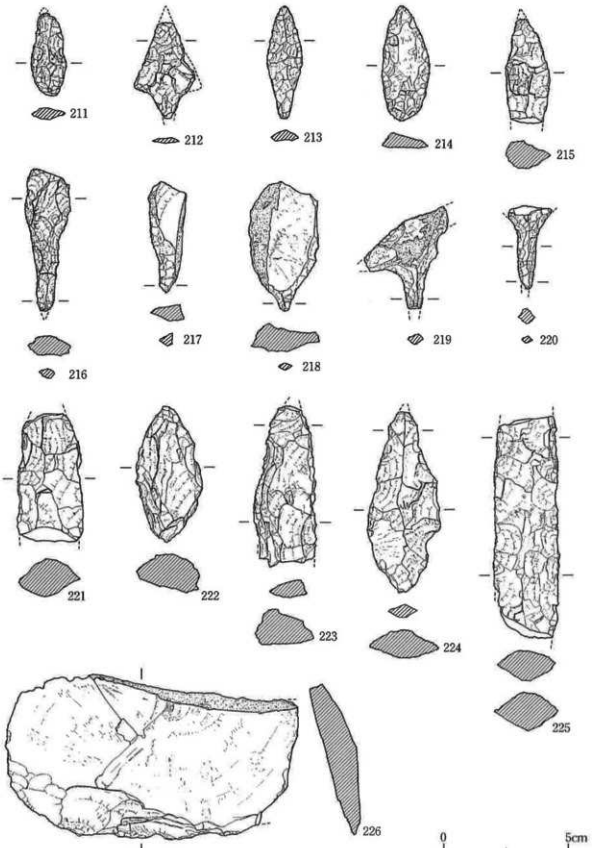
c．石製品（第34・35図、図版35～37）

出土した石製品資料は、打製石器の石鏃・石槍・石錐・削器・細部調整剥片・石核、磨製石器の石包丁・石斧、砥石などがある。石器の用途としては、武具・狩猟具・工具・紡織具・漁撈などがあげられるが、このうち石鏃・石槍は狩猟と併用、磨製石器は祭祀具として用いられ、農具には石包丁、工具には石斧・砥石などがあてられる。その他にサヌカイトの素材剥片のなかに削器とみられるものが多数認められる。

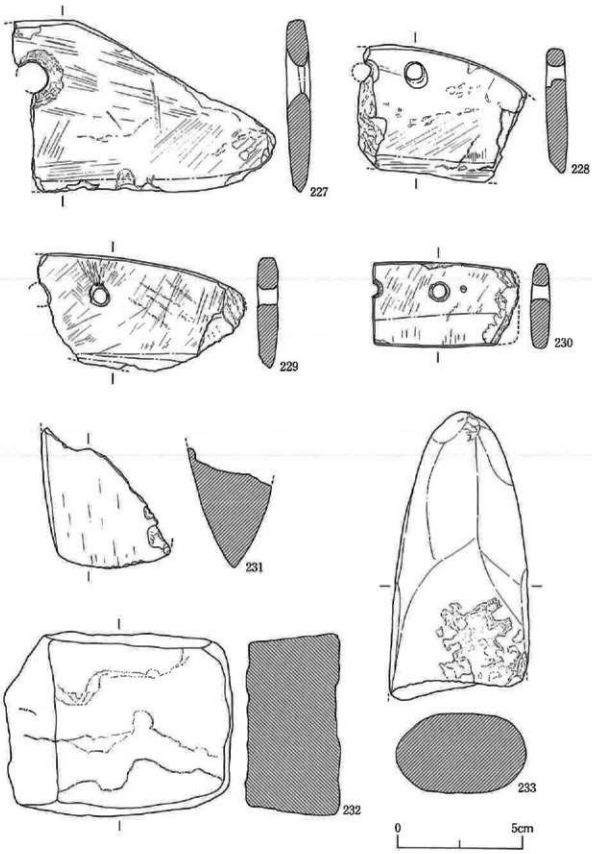
以下、打製石器に関しては石器タイプの分類を試み、分類項目の特徴を記載する。磨製石器に関しては器種ごとに個別の資料の特徴を記載する。各個体の法量・材質は表にまとめた。

打製石器（石鏃１～５）は基部の形態から円基式（１・４）・凸基有茎式（２）・凸基式（３）・不明（５）などに分けられる。（石錐６～10）は頭部と錐部の境界が不明瞭で全体の形状が涙形に似ているもの（６・７・８）・頭部と錐部の境が明瞭なもの（９・10）などに分けられる。石槍（11～15）は細身で肉厚、側縁に刃潰しがみられないなどの特徴をもち、中には製作途中品も含まれる。

磨製石器（石包丁17～20）は細片ではあるが残存状況から、大型のもの（17）・剣からの転用品（20）、不明（18・19）などに分けられる。（17）の紐孔は敲打によって穿かれたもの。（18）は石剣からの転用品で、刃部がみられないことから、製作途中と思われる。（21）は太型蛤刃石斧の刃先。使用による刃こぼれが見られる。（22）は砥石。全面砥面として使用。（23）は表裏面に使用による剥離、または敲打痕が見られることから、石斧から叩き石への転用品とも思われる。



第34図　打製石器実測図



第35図　磨製石器・砥石実測図

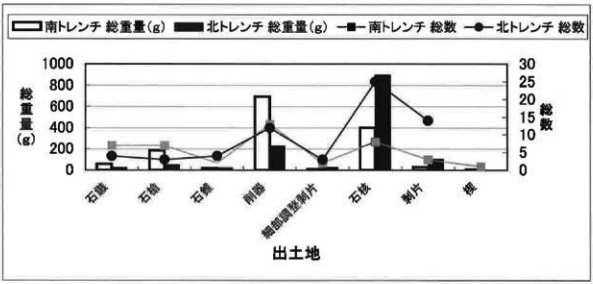
第7表　サヌカイト観察表

NO.	挿図	遺構	重さ(g)	種類	詳細
1	2	南トレ P35	2.65	石鏃 凸基有茎式	使用による、先端部の折損と片側側縁の刃部の刃こぼれ。
2	3	南トレ・H 3・4上	2.82	石鏃 凸基式	完形。基部に固定されていたと思われる著しい摩滅痕。
3	1	南トレ・G 第4層上面	2.06	石鏃 円基式	製作途中品。
4	4	北トレ・F 第5層精査	4.95	石鏃 円基式	片面調整。横型剥片。
5	5	北トレ・H 第4層	5.98	石鏃	基部に製作時における欠損。表面に原面。
6		南トレ・H 第3・4上層	8.16	石鏃	製作途中品。
7		北トレ・F東 第4下層	16.20	石槍	表面・側縁に原面。製作途中品。横型剥片。
8		北トレ・G 土12(井戸)	7.72	石鏃 円基式	表面・側縁に原面。製作途中品？横型剥片。基部側縁摩滅。
9		南トレ・H 第3層	11.70	石鏃	製作途中品。表面に原面。縦型剥片。
10		南トレ・G 大溝2	11.73	石鏃	製作途中品。横型剥片。
11		南トレ・H 第4層	20.45	石鏃	製作途中の、失敗品。横型剥片。
12	9	北トレ・F 第3層	6.60	石錐	先端部欠損。表面に原面。鏃の転用品？
13	10	北トレ・G 溝a	2.34	石錐	体部欠損。
14	6	北トレ・G東 第4層上層	6.76	石錐	先端部欠損。基部に原面。先端部回転穿孔による摩滅。
15	7	南トレ・GH 第4層など(側溝)	4.49	石錐	側縁・基部に原面。先端部回転穿孔による摩滅。横型剥片。
16	8	南トレ・G 大溝2東	13.44	石錐	側縁に原面。横型剥片。
17		出土地不明	0.30	石錐	先端部のみ残存。
18	15	南トレ・井G 大溝2東	43.06	石槍	両端欠損。(体部分残存)
19		南トレ・G 大溝2東	16.14	石槍	両端欠損。(先端部分残存)
20	13	南トレ・I 第4下層	21.48	石槍	両端欠損。(先端部分残存)
21	11	北トレ・G東 第2(下部) 第3層(第4層上面)	23.48	石槍	両端欠損。(先端部分残存)
22	12	南トレ・H 第3・4上層	21.30	石槍	製作途中品？
23	14	南トレ・G 第4層上面	19.44	石槍	先端部欠失。
24		南トレ・H 3・4上	29.23	石槍	製作途中品。表面・基部に原面。
25		南トレ・F東 第5層上面精査	22.57	削器	1辺の両面に刃部。横型剥片。
26		北トレ・F 土10	18.75	削器	1辺に原面。1辺を欠損。1辺を、片面調整。
27		南トレ・H 第4層	29.71	削器	1辺に原面。1辺に抉り入り。
28		南トレ 大溝2？	77.98	削器	表面に原面。1辺を片面調整。
29		南トレ・H 大溝2	35.49	石槍 未製品	全体を粗く打ち欠いておわる。
30		南トレ・G西 第4層	166.69	削器	背面に原面。1辺を刃部。
31		南トレ・F 第4層	33.17	削器	1辺を刃部。縦型剥片。
32		南トレ・G 第4層上面	6.46	縁部調整剥片	背面に原面。2辺を刃部。縦型剥片。
33		北トレ・H 遺構面精査	6.50	縁部調整剥片	背面に原面と、刃部。縦型剥片。
34		南トレ・H 第3・4上層	33.05	削器	1辺に原面と、刃部。縦型剥片。
35		北トレ・H 弥生包含層	43.54	削器	背面に原面。1辺を刃部。縦型剥片。
36		北トレ・G 大溝3西	13.76	削器	1辺に原面。1辺を刃部。縦型剥片。
37		南トレ・I 第4下層	33.15	削器	1辺に原面。1辺を片面調整の刃部。縦型剥片。
38		南トレ・G西 第3・4上層	32.83	削器 石核	石核剥片。折損しているが、1辺に摩滅した刃部。
39		南トレ・J 落ち込み1	4.56	縁部調整剥片	1辺に刃部。
40		北トレ・I 大溝1	15.80	縁部調整剥片	2辺に摩滅した刃部。
41		北トレ・G 第4層下層	11.17	削器	片面調整。横型剥片。
42		北トレ・I 第4層	26.70	削器 石核	1辺に刃部。
43		北トレ・G東 第4層上層	9.14	石槍	製作途中の事故品。基部に原面。
44	16	南トレ・G 第4層上面	121.47	削器 石包丁？	背部に原面。横型剥片。
45		南トレ・J 第3・4層	5.85	楔	背部に原面。
46		北トレ・G 大溝3西	249.45	石核 母岩？	1辺・表面に原面。
47		北トレ・G東 第4層上層	37.39	削器	背面に原面。2辺を刃部。横型剥片。
48		北トレ・I 大溝1	34.70	石核	剥片。1辺に原面。
49		北トレ・G 大溝3	18.51	石核	剥片。表面に原面。
50		北トレ・K P114	56.77	石核	剥片。1辺に原面。
51		南トレ・H 第4下層	65.66	石核	剥片。周辺に原面。
52		北トレ・G東 第2(下部) 第3層(第4層上面)	48.69	石核	剥片。周辺に原面。
53		北トレ・I 大溝1	23.17	石核	剥片。1辺に原面。
54		北トレ・G 大溝3	66.23	石核	剥片。1辺に原面。
55		北トレ・H 第3層下層	18.83	石核	剥片。1辺に原面。
56		北トレ・JK 大溝2	38.97	石核	剥片。1辺に原面。
57		北トレ・F東 第4下層	13.67	石核	剥片。1辺に原面。
58		南トレ・F東 第5層上面精査	34.33	石核	剥片。表面に原面。
59		北トレ・H 土坑11	16.88	石核	剥片。表面に原面。
60		南トレ・G東 第4層	97.28	石核	剥片。表面に原面。
61		南トレ・G東 第4層	20.00	石核	剥片。表面に原面。
62		北トレ・I 第4層	21.38	石核	剥片。2辺に原面。全体に著しく風化。
63		南トレ・F 土坑10	18.13	石核	剥片。2辺に原面。
64		南トレ・G 大溝2東	125.45	石核	母岩からの剥片。2辺・表面に原面。全体に著しく風化。
65		北トレ・JK 大溝2	35.20	石核	母岩からの剥片。3辺に原面。全体に著しく風化。
66		北トレ・精査 3層上面及壁	8.51	石核	剥片。1辺に原面。
67		北トレ・F 土坑西側	9.38	石核	剥片。1辺に原面。
68		南トレ・G東 第4層	9.83	石核	剥片。1辺に原面。
69		南トレ・F 第4層	27.92	石核	剥片。1辺に原面。
70		北トレ・H 弥生包含層	40.24	石核	剥片。1辺に原面。
71		北トレ・H 第3層下層	3.87	石核	剥片。表面に原面。
72		北トレ・G 落ち込み上層	19.22	石核	剥片。1辺に原面。
73		北トレ・G 第4層下層	20.93	石核	剥片。1辺に原面。
74		北トレ・G 大溝3西	17.07	石核	剥片。1辺に原面。
75		南トレ・H 大溝2	25.67	削器	1辺に原面。1辺を刃部。横型剥片。
76		北トレ・G 第4層下層	11.00	削器	1辺に原面。1辺を刃部。横型剥片。
77		北トレ・G東 第4層上層	28.89	削器	表面に原面。1辺を刃部。縦型剥片。
78		北トレ・G 落ち込み上層	5.65	削器	2辺を刃部。縦型剥片。
79		北トレ・I 大溝1	5.26	削器	1辺を刃部。縦型剥片。
80		北トレ・G 第4層下層	17.53	削器	2辺を片面調整の刃部。横型剥片。
81		南トレ・H 大溝2	32.97	削器 (楔)	表面に原面。楔の製作途中品？
82		北トレ・G東 第4層下層	6.57	削器	1辺に原面。1辺を刃部。
83		南トレ・H 第3・4上層	30.95	削器	1辺に原面。1辺を摩滅した刃部。縦型剥片。
84		南トレ・G 大溝2東	53.46	削器	1辺に原面。両辺を刃部。縦型剥片。
85		北トレ・K P114	19.67	剥片	

86		北トレ・JK 大溝2	19.56	剥片
87		南トレ・H 3・4上	15.49	剥片
88		北トレ・G東 第4層上層	23.27	剥片
89		南トレ・G 大溝2東	8.77	剥片
90		南トレ・G西 第3・4上層	7.93	剥片
91		北トレ・G東 第4層上面検査	8.98	剥片
92		北トレ・I 大溝1	5.15	剥片
93		北トレ・G 第4層下層	1.74	剥片
94		北トレ・G 第4層下層	3.42	剥片
95		北トレ・H 遺構図精査	1.80	剥片
96		北トレ・D西 第3層	3.04	剥片
97		北トレ・D西 第3層	8.26	剥片
98		出土地不明	8.30	剥片
99		北トレ・J 土13(井戸)	34.16	石核	剥片、2図に掲載。
100		北トレ・F南 第4層	4.59	剥離・可能	製作途中による未製品もしくは、事故品。
101		北トレ・H 溝d	2.51	剥片
102		北トレ・F P28	2.66	剥片
103		北トレ・F南 第4層	38.86	石核	剥片、接面。
104		北トレ・E 第3層	17.30	石核	剥片、接面。
105		北トレ・F南 第4層	3.33	石核	剥片、接面。
106		北トレ・K 4Py	3.05	敲石調整剥片
107		北トレ・F南 第4層	3.15	剥片
108		北トレ・E 第3層	3.39	剥片	接面。
109		北トレ・F南 第4層	36.13	石核	剥片。

第８表　サヌカイトの個体別表およびグラフ

	南トレンチ		北トレンチ		出土地不明	
	総重量(g)	総数	総重量(g)	総数	総重量(g)	総数
石鏃	59.77	7	23.24	4		
石槍	186.16	7	48.82	3		
石錐	17.93	2	20.29	4	0.30	1
削器	693.67	13	226.82	12		
細部調整剥片	11.04	2	25.35	3		
石核	398.60	8	893.58	25		
剥片	30.19	3	101.43	14	8.30	1
楔	5.85	1				
計	1403.21	43	1339.53	65	8.60	2
総計					2751.34	110
＊　NO.100　重複						



d．動物遺体

西ノ辻遺跡から出土した動物遺体は弥生時代から中世のもので、出土量が最も多かった時期は弥生時代中期である。出土した動物遺体はイノシシ、シカ、ウマ、烏類とヘビであり、弥生時代中期の遺構からは人骨が出土している。

人骨

人骨は弥生時代中期の溝のみ出土し、遺構としては北トレンチの大溝1と2、南トレンチの大溝3である。大溝1から出土した部位は右脛骨の前縁の一部であり、大溝2からは頭蓋骨の破片が2片出土している。大溝2から出土した骨片の断面は厚く、成人のものとおもわれる。大溝3からは脛骨、距骨と踵骨の一部が出土し、関節面の状態から同一個体と思われ、脛骨遠位端に骨端線が見られなかったことより成人と思われる。

これら3ヵ所の遺構から出土した人骨が同一個体かどうかは不明である。

動物遺体

1．イノシシ

イノシシは出土量が最も多く、弥生時代から古墳時代以降の各層より出土している。特に出土量が多い時期は弥生時代中期で、最小個体数は北トレンチの大溝1が右下顎骨の4、南トレンチの大溝2が左下顎骨の3で、総計は7個体である。出土部位は下顎骨と下顎臼歯など、残存しやすい部位が多かったが、大溝2では肩甲骨の関節窩周辺も2個体分出土している。大溝1から出土した下顎骨のうち2個体は歯の萌出程度から1才前後のものと、3才のものと推定でき、犬歯の歯槽の形態から2個体ともオスの可能性が高い。溝2から出土したイノシシの下顎骨から年令推定出来たのもは1個体であり、3才のオスと思われる。

その他の時代では北トレンチのみ出土し、最小個体数はそれぞれであった。北トレンチから出土している頭骨片は成体と思われ、層位不明の距骨は現生標本の3才のものよりやや大きかった。

今回出土したイノシシは令の推定のできた骨片は少なかったが、幼体より成体が多かった。

2．シカ

シカは弥生時代中期の南北の両トレンチからのみ出土している。角は落角も含めて10数片出土しているがいずれも破片であり、最小個体数には含まなかった。角には骨角器などに利用するためと思われる切断痕が見られた。

南トレンチの大溝2から右脛骨の遠位部が2片出土し、最小個体数は2である。その他は距骨が1片のみの出土であった。

3．ウマ

ウマの出土は、古墳時代以降と中世の整地層から臼歯のエナメル質と第1胸椎が出土している。これらの骨片から、体格の推定は出来なかった。

4．その他の動物遺体

哺乳類以外では小型の鳥類の中手骨とヘビの椎骨が出土している。いずれも種を同定するには至らなかった。ヘビは8個の椎骨が交連状態で出土している。

第9表 動物遺体同定表

番号	報告番号	トレンチ	地区	遺構・層	時代	種名	出土部位 左右	部位	詳細	備考	計測値
1		北	J	落ち込み	弥生～古墳	イノシシ	左	尺骨	滑車切痕の一部		
2		北	J	落ち込み	弥生～古墳	不明	不明	骨片	1		
3		南	J	P69	弥生	不明	不明	骨片	1		
4		北	I	大溝1	弥生中期	ヒト	右	脛骨	前縁の一部、脛骨粗面の下部約4cmが残存		
5		北	I	大溝1	弥生中期	シカ	不明	角	角座の一部		
6		北	I	大溝1	弥生中期	シカ	不明	角	破片 6		
7	239	北	I	大溝1	弥生中期	イノシシ	左右	下顎骨	右下顎枝は後半分破損, 左下顎枝破損	M3は萌出中, Pm2～Pm4は乳歯, Iは生え変わり	第11表
8	240	北	I	大溝1	弥生中期	イノシシ	左右	下顎骨	両側の下顎枝上部破損	M3は最終の咬頭が萌出始め	第11表
9		北	I	大溝1	弥生中期	イノシシ	右	下顎骨	下顎頭		最大幅:23.53
10		北	I	大溝1	弥生中期	イノシシ	右	下顎骨	M2歯槽後半～M3歯槽前半まで残存、M3の歯根のみ残存		
11		北	I	大溝1	弥生中期	イノシシ	右	下顎骨	M3より後部の下顎枝の前縁		
12		北	I	大溝1	弥生中期	イノシシ	左	下顎骨	M3(未萌出のエナメル質)と下顎枝の一部		
13		北	I	大溝1	弥生中期	イノシシ	右	下顎Pm2	後半分		
14		北	I	大溝1	弥生中期	イノシシ	右	下顎M2		咬耗あり	近遠心径:20.21、頬舌径:13.47
15		北	I	大溝1	弥生中期	イノシシ	右	下顎M3	未萌出のエナメル質		
16		北	I	大溝1	弥生中期	イノシシ	不明	下顎歯槽部と臼歯	2 歯は釘植, 臼歯はいずれも破片		
17		北	I	大溝1	弥生中期	イノシシ	—	腰椎	左横突起と後縁の一部破損		椎弓長:18.60
18		北	I	大溝1	弥生中期	イノシシ	左	大腿骨	遠位大腿骨頭		
19		北	I	大溝1	弥生中期	不明	不明	骨片			
20		北	I	大溝1	弥生中期	不明	不明	骨片	多数		
21		北	I	大溝1	弥生中期	不明	不明	骨片	多数		
22		北	I	大溝1	弥生中期	不明	不明	骨片	3		
23		北	J·K	大溝2	弥生中期	ヒト	不明	頭骨片	2		
24		南	H	大溝2	弥生中期	イノシシ	右	頭頂骨	側頭線周辺		
25	238	南	G	大溝2	弥生中期	イノシシ	左右	下顎骨	右下顎枝の後半分破損, 左M2以降破損	右M3の第2咬頭まで萌出,	第11表
26		南	H	大溝2、西コーナー	弥生中期	イノシシ	左	下顎骨とM2	Pm4～M2までの歯槽, M2は釘植		
27		南	H	大溝2、西コーナー	弥生中期	イノシシ	左	下顎骨	Pm4～M2までの歯槽		
28		南	H	大溝2、西コーナー	弥生中期	イノシシ	右	下顎Pm3			
29		南	H	大溝2、西コーナー	弥生中期	イノシシ	左	下顎M2	未萌出のエナメル質		
30		南	H	大溝2、西コーナー	弥生中期	イノシシ	左	下顎M3	未萌出のエナメル質		
31	241	南	G	大溝2	弥生中期	イノシシ	左	肩甲骨	関節窩から肩甲棘の基部まで残存		関節窩長:29.91、関節窩幅:25.79、関節突起最大長:36.25
32		南	G	大溝2	弥生中期	イノシシ	左	肩甲骨	肩甲棘		
33		南	H·G	大溝2	弥生中期	イノシシ	左	寛骨	寛骨臼の一部		
34	246	南	G	大溝2	弥生中期	シカ	左	落角	角座から第1枝部分枝部上方約4cmまで残存	第1枝は切断痕あり	
35	245	南	G	大溝2	弥生中期	シカ	左	角	第1枝～第2枝の分枝部まで		
36		北	J·K	大溝2	弥生中期	シカ	不明	角	3 うち1片は落角, 1片は先端		
37		南	H·G	大溝2	弥生中期	シカ	右	脛骨	近位		近位前後径:53.54, 横径:55.41＋
38	243	南	G	大溝2・東	弥生中期	シカ	右	脛骨	骨幹の遠位側1/3～遠位端まで残存		遠位端 前後径:31.88, 横径:39.60
39		南	H·G	大溝2	弥生中期	シカ	右	脛骨	遠位端並半分のみ残存		遠位端横径:33.65
40	242	南	G	大溝2	弥生中期	シカ	右	距骨			GL:45.35, BL:29.81
41		南	G	大溝2	弥生中期	イノシシ？	不明	下顎骨？	破片 1		
42		南	G	大溝2・東	弥生中期	シカorイノシシ	不明	顎骨	歯槽の一部		
43		南	H·G	大溝2	弥生中期	シカorイノシシ	不明	歯	エナメル質の破片 1		
44		南	G	大溝2	弥生中期	シカorイノシシ	左	肩甲骨	下縁の一部		
45		南	G	大溝2	弥生中期	シカorイノシシ	不明	肩甲骨	肩甲棘の基部		
46		南	H·G	大溝2	弥生中期	シカorイノシシ	不明	種子骨	1		
47		南	H·G	大溝2	弥生中期	トリ	左	中手骨	近位		
48		南	H	大溝2、西コーナー	弥生中期	ヘビ(小型)	—	椎骨	8	交連状態で出土	
49		南	G	大溝2	弥生中期	不明	不明	骨片	1		
50		南	H	大溝2	弥生中期	不明	不明	骨片	3		
51		南	H	大溝2	弥生中期	不明	不明	骨片	1		
52		南	H·G	大溝2	弥生中期	不明	不明	骨片	1		
53		南	H·G	大溝2	弥生中期	不明	不明	骨片	多数		
54		南	H·G	大溝2	弥生中期	不明	不明	骨片	3		
55		南	H·G	大溝2、覆土	弥生中期	不明	不明	骨片	1		
56		南	H	大溝2、先行トレンチ	弥生中期	不明	不明	骨片	骨角器 ヤスの先端?		
57		南	I	大溝3	弥生中期	ヒト	右	脛骨	遠位部の前半分のみ残存		
58		南	I	大溝3	弥生中期	ヒト	右	距骨	距骨滑車の前1/3から後方が残存		

番号	資料番号	トレンチ	地区	遺構・層	時代	種名	出土部位 左右	部位	詳細	備考	計測値
59		南	I	大溝3	弥生中期	ヒト	右	踵骨	後関節面から載距突起までの内側の前半のみ残存		
60		北	G	大溝3、西	弥生中期	不明	不明	長骨片	1		
61		北	G	大溝3、西	弥生中期	不明	不明	骨片	2		
62		北	G	P8	古墳～	イノシシ	左	頭骨片	鼻骨と前上顎骨の縫合部	成体	
63		北	H	土坑11	古墳～	イノシシ	右	中心足根骨			
64		南	E	土坑5	古墳～	ウマ	ー	第1胸椎	椎体		
65		北	F	土坑7	古墳～	小型のトリ	不明	長骨片	1		
66		南	E	土坑5	古墳～	不明	不明	骨片	14		
67		北	H	土坑11	古墳～	不明	不明	骨片	1		
68		北	H	P96	古墳～	不明	不明	骨片	1		
69		北	F	P33	古墳～？	不明	不明	骨片	2		
70		北	F東	第4下層	中世 整地	ウマ	不明	臼歯片	1		
71		北	F東	第4下層	中世 整地	不明	不明	骨片	1		
72		南	G	第4層上面	中世 整地	不明	不明	骨片	1		
73		Z		層位不明		イノシシ	左	距骨	破損が大きい	3才の標本より大きい	

第10表 出土哺乳類の出現頻度表

種名		イノシシ					シカ		ウマ	
時代		弥生中期		弥生～古墳	古墳以降	層位不明	弥生中期		古墳以降	中世整地
トレンチ		北	南	北	北		北	南	南	北
遺構・層		大溝1	大溝2	落ち込み	P8、土坑11		大溝1・2	大溝2	土坑5	第4下層
角							☆	☆		
頭頂骨	右		1							
頭骨片	左				1					
下顎Pm2	右	1								
下顎Pm3	右		1							
下顎M2	右	1	2							
下顎M3	右	1	1							
下顎骨	右	4*	1							
下顎骨	左	2	3*							
臼歯片	不明									1
環椎	ー	1								
第1胸椎	ー				1				1	
肩甲骨	左		2							
尺骨	左			1						
寛骨	左		1							
大腿骨	左	1								
脛骨	右							2*		
距骨	右							1		
距骨	左					1				
中心足根骨	右				1					

* 最小個体数
☆ シカの角は落角の破片も出土しているため最小個体数の推定の対象としなかった。

第11表 弥生時代中期出土のイノシシの下顎骨の計測値表

遺構・層	大溝 1				大溝 2
資料番号	7		8		25
性別	オス？		オス？		オス
年齢段階	I		III		III
下顎骨計測項目	左	右	左	右	右
下顎骨全長(1) id−goc	—	—	—	234. 60	—
下顎枝長 M後縁よりgoc	—	—	75. 95	74. 66	—
goc より Pm2 前縁まで	—	—	—	171. 96	—
歯槽最大長 id−M 後縁	126.21+	133.86+	—	165. 21	154.57+
頬臼歯長 Pm1−M 後縁	92.16	97.04	—	120. 24	110.83
頬臼歯長 Pm2−M 後縁	78.83	83.57	102. 14	100. 77	94.80
小臼歯長 Pm1−Pm4	53.68	52.56	—	53. 65	54.67
小臼歯長 Pm2−Pm4	38.55	38,88	35. 62	35. 49	40.03
大臼歯長	39.07	45.24	62. 48	66. 60	55.71
C後縁よりPm2前縁まで	—	—	—	26. 47	—
下顎枝高 gov−Cr	—	—	112. 36	—	—
下顎体高(1) M 後縁	42.89	48,30	50. 82	52. 85	45.31
下顎体高(2)	36.99	38,10	45. 41	44. 99	36.79
下顎体高(3) Pm2の前	40.92	41.41	42. 91	42. 63	40.05
下顎体厚 M1−M2	21.25	23.65	24. 98	26. 61	24.76
犬歯歯槽最大長	—	—	—	15. 10	—
犬歯歯槽最大幅	—	—	—	9. 70	—
下顎体中心長	48.82+		—		—
下顎体中心高	20.91		—		—
第1小臼歯の有無	有	有	有	有	有
下顎結合面下縁のくぼみ	すき間程度		わずかに窪んでいる		すき間程度

+ 骨質破損のため計測誤差がわずかにある。

5．調査の結果

以下、調査および整理作業において知り得た本調査地と検出資料の特色を箇条書きで記しておく。

1．調査地東～中部で地山上面において北東から南西方向の流れる二筋の自然流路を検出した。流路内からは遺物を確認できなかったが、流路埋没上の自然堆積層上面において弥生時代以後の遺構を検出したことから、明確な時期は不明であるが、縄文時代以前に遡るものである。

2．突帯文土器は弥生時代の遺構・中世の整地層などから、これまでの各調査地の出土量に比して多く出土した。北部にあった埋没谷内などからも少量出土し、一部遺構も確認されてはいるが、今回の調査地付近に縄文時代晩期の生活場＝集落があったものと思われる。

3．弥生時代では前期の資料は検出していない。中期でも前葉の資料は少なく中期中葉から後葉にかけての遺物・遺構を大量に検出した。後期土器は中世の整地層などから出土したが、この時期の明確な遺構は確認していない。

4．中期の遺構は、多くのピット（柱穴など）・土坑（井戸など）とともに、集落に伴う南北方向に延びる大溝４条、方形周溝墓などを検出した。この時代の遺構は方形周溝墓・大溝に先行するピット・溝、方形周溝墓および同時期のピットなど、大溝群とピット・土坑などの３時期に分けることができるが、調査幅が狭く各関係については不明な点が多い。

5．４条の南北方向の大溝のうち、北トレンチ大溝３は南トレンチに対応するものがなく、さらに北トレンチ大溝１は南トレンチでは方形周溝墓の周溝近くで浅くなって終焉していた。これは各大溝より方形周溝墓の方が先行し、その存在を意識して大溝は開削されたことを示している。このことは同溝から出土した土器に中期前葉に遡るもの（供献土器）があることからも窺える。

6．中期中葉から後葉にかけて大溝を伴う集落が営まれていた。各大溝には時期差は見られず、ほぼ共存していたと考えられる。大溝群の東・西両方にピット群があり、現段階では集落を画していたものとするのは難しい。ただ、南トレンチの大溝３の溝内に柵列が施されていた。

7．各大溝の出土土器には後期土器は含まず、中期末に周辺の土を集めて大溝を埋め尽くした整地が行われたようである。北トレンチ大溝１・２および南トレンチ大溝３の埋土内から人骨が出土しており、この整地時に方形周溝墓などに伴う埋葬施設も破壊されたものと考えられる。

8．検出した弥生土器の多くは中期中葉から後葉の土器で、その大半は在地産であった。これはこの時期西ノ辻遺跡の人々は使用した土器のほとんどを自給し、他地域との交流の少ない保守的なムラであったことを窺わせている。

9．古墳時代後期には、東西４間、南北２間以上の掘立柱建物・井戸・落ち込み・ピット・土坑などの遺構と須恵器・土師器などの遺物を検出した。南東方向に位置する第36次発掘調査地でもこの時期の掘立柱建物が確認されており、本調査地周辺は住居地であったと考えられる。

10．奈良・平安時代前半の出土遺物はそれほど多くないが、ピット・土坑を少数ながら検出した。これは北東部に位置する第43次発掘調査地においてこの時期の井戸などの遺構と遺物が検出されており、本調査地も集落の一部であったと考えられる。

11．平安時代後・末期以降を含む中世期の遺物は少なく、耕作に伴う溝以外ほとんど検出しなかった。この間、鎌倉時代に周辺部の土を運び込んだ大掛かりな整地と、その前後の耕作跡を確認した。耕作に伴った溝はほとんど南北・東西方向に延び、条里制施行によるものと思われる。中世期以後、本調査地は耕作地となり、集落などの住居域ではなく生産域となった。

12．近世期には、堤を構築し杭・石列を伴う溝を穿つなど、明確な棚田を形成して田畑として利用されていた。棚田の状態は変化するものの、この状況は明治から昭和初期にまで及んでいた。

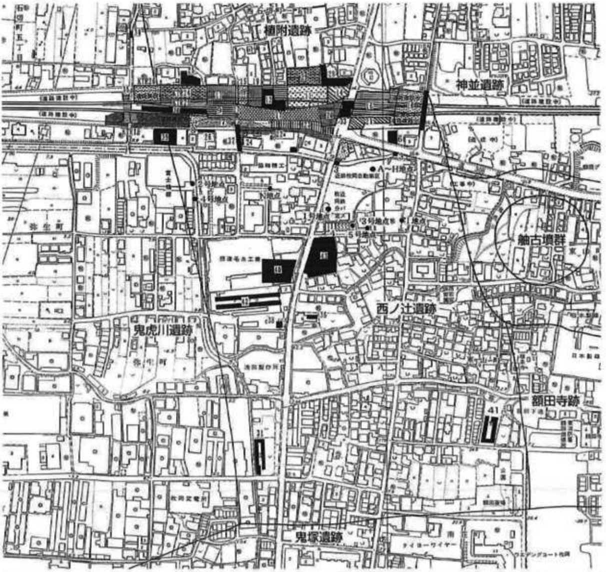
第4章 西ノ辻遺跡における歴史的景観の変遷概略—まとめにかえて—

西ノ辻遺跡は標高7～20mの東から西に緩傾斜している扇状地上に位置し、現在はその中央を旧東高野街道と旧国道170号線（旧外環状線）がほぼ平行して南北方向に走り、北部にはその内に近鉄東大阪線・第二阪奈有料自動車道路を含む国道308号線が東西方向に走って交わっている。河川としては恩智川に注ぐ新川とこれに合流する鬼虎川が見られる。そしてこれらの周辺には住宅・会社・工場・商店などが建ち並び、田畑はほとんど姿を消している。しかし、半世紀ほど前までは旧東高野街道沿いなどに住居が点在していただけの、田園風景の広がるのどかな地帯であった。今回の調査地もここ70～80年ほどの間に、棚田→軍需関連工場→化学製品会社・工場→高層マンションと様変わりしている（第36図参照）。これまでの調査から、約1000年前まで本遺跡の北部には東西方向の大きな谷筋が存し、約2000年前には大集落が形成され、その後も場所・規模を変えながらも断続的に集落が営まれていたことなどが明らかになり、地形を含む地域の景観は歴史的推移によって変貌してきた。

先に若松は弥生時代中期の状況について埋没谷、方形周溝墓群（2墓地群）と集落地の推定を行ない[1]、吉田は第43次調査までの調査地点および調査成果を含めた一覧表を作成した[2]。また、荻田昭次氏による昭和16・17年の調査地の確認[3]、中西克宏氏による古墳時代の状況[4]などが公になっている。今回、43次におよぶ調査結果および研究成果を踏まえ、後世の削平・撹乱などをも考慮しながら、本遺跡内での歴史的景観、土地利用の変遷過程について時代ごとの模式図（第38図）を作成し、その概要を窺っておきたい[5]。

本遺跡内において歴史的景観—地形上—が現段階と大きく異なるのは谷の存在であり、まずこのことを先に記しておこう。谷は遺跡の北部を東西に横断した谷1と、ほぼ中央を北東から南西方向に延びていた谷2があった。谷1は遺跡東端部で北北東からほぼ西に向きを変え、蛇行しながら西端部に至りさらに北西方向に向かっていた。全長約300m以上、幅7～10m、深さ2.5～3.5mを測った。途中南岸に舌状の突出部（流れ込み）があり、南東方向から合流する谷筋（第5・22・23次調査地）もあった。谷2は第42次調査地で検出したもので、神並遺跡西部で確認されている谷筋とつながるものと考えられる。西側は早い段階（縄文時代以前）に埋没し、流路を東側に変えたと思われる（後世の鬼虎川にあたるもの）。また、遺跡南部には額田谷から西方向に延びる古墳時代以前の自然流路も確認されている（第41・31次調査、後の長尾川）。

第36図　西ノ辻遺跡遠望（東より）
←調査地に建った共同住宅



次数	文献
—	『枚岡近と額田町代編額田町石器時代遺跡』1937 枚岡近額田町代編纂史委員会 小林行雄「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡、N、D・E・F・H地点の土器」（『弥生式土器集成資料編1』1958 弥生式土器集成刊行会） 藤田昭次「西ノ辻遺跡」『東大阪市文化財協会ニュース Vol.2 No.1』1986）
1	『調査会ニュース No.4』1976 東大阪市遺跡保護調査会
0～4	『発掘20年のあゆみ 市制20周年記念特別展示』1987 東大阪市教育委員会 (財)東大阪市文化財協会
5	『西ノ辻遺跡－第5次発掘調査概要報告－』2000 (財)東大阪市文化財協会
6～8	『西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡－西ノ辻遺跡第6次、第7次、第8次調査、鬼虎川遺跡第18次調査概要報告書－』1988 東大阪市教育委員会 (財)東大阪市文化財協会
9	『西ノ辻遺跡第9次発掘調査報告』1996 東大阪市教育委員会 (財)東大阪市文化財協会
10	『西ノ辻遺跡第10次調査報告書－遺物編－』1989 東大阪市教育委員会 (財)東大阪市文化財協会
11	『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要II－東大阪市東石切町・西石切町所在－』1986 大阪府教育委員会
16	『西ノ辻遺跡第16次調査報告書－遺物編－』1990 東大阪市教育委員会 (財)東大阪市文化財協会
17	『西ノ辻遺跡第17次発掘調査報告書』1989 東大阪市教育委員会 (財)東大阪市文化財協会 『西ノ辻遺跡第17次発掘調査報告書』1999 東大阪市教育委員会 (財)東大阪市文化財協会
18～20	『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要III－東大阪市東石切町・西石切町所在－』1986 大阪府教育委員会 『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要IV－東大阪市東石切町・西石切町所在－』1987 大阪府教育委員会 「鬼虎川遺跡26次・西ノ辻遺跡18～20次調査概要報告－東大阪市東石切・西石切町所在－」1998 大阪府教育委員会
21	『西ノ辻遺跡第21次発掘調査報告』1990 (財)東大阪市文化財協会
22	『西ノ辻遺跡第22次発掘調査報告書』1995 東大阪市教育委員会 (財)東大阪市文化財協会
23	『西之辻遺跡第23次発掘調査報告』1992 東大阪市教育委員会 (財)東大阪市文化財協会
24	『(財)東大阪市文化財協会概報集 1988年度』1989 (財)東大阪市文化財協会
25	『埋蔵文化財発掘調査概報集 1998年度(2)』1999 (財)東大阪市文化財協会
26	『(財)東大阪市文化財協会概報集 1989年度』1990 (財)東大阪市文化財協会
27	『西ノ辻遺跡第27次・鬼虎川遺跡第32次発掘調査報告書』1991 (財)東大阪市文化財協会
28～29	『西ノ辻遺跡第28・29次発掘調査報告書』1999 (財)東大阪市文化財協会
30	『西ノ辻遺跡第30次調査発掘調査報告書』1995 (財)東大阪市文化財協会
31	『東大阪市文化財協会概報集－1996年度(1)－』1997 (財)東大阪市文化財協会
32	『西ノ辻遺跡第32次発掘調査報告』1996 (財)東大阪市文化財協会
33	『西ノ辻遺跡第33次発掘調査報告』1996 (財)東大阪市文化財協会
34	『東大阪市下水道関係発掘調査概要報告書－1991年度(1)－』1992 (財)東大阪市文化財協会
35	『西ノ辻遺跡第35次発掘調査報告』1993 (財)東大阪市文化財協会
36	『西ノ辻遺跡第36次発掘調査報告』1994 (財)東大阪市文化財協会
37	『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告書－1994年度－』1995 (財)東大阪市文化財協会
41	『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報－平成11年度－』2000 東大阪市教育委員会
42	本書
43	『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告書－平成12年度－』2001 東大阪市教育委員会

第37図　各次数調査位置図（1／5000）（付・文献一覧）

縄文時代以前

旧石器時代の翼状剥片（第20次調査など）および縄文時代早期の押型文土器（第７・43次調査）・前期相当層から搔器（第35次調査）・中期後半から末の深鉢土器（第13・42次調査）・後期土器などは出土しているが、いずれも埋没谷内ないし後世の整地土などからである。前期以前に遡ると言われる土坑は検出されているものの（第35次調査）、後期以前の様相は谷筋以外不明と言わざるをえず、今後の調査に期したい。

おぼろげながらその状況が確認できるのは縄文時代晩期からである。遺跡北部の第５・17次調査地など国道308号線周辺において突帯文土器・石匙などの石器・土偶、中・南部の第42・31次調査地からも突帯文土器・石器と溝・土坑などが検出されている。しかし、遺物の多くは後世の遺構ないし整地土内などからの出土であり、谷１の北岸や南岸の東よりから遺跡南西部にかけて生活域のあったことは窺えるが、集落などその詳細については不明である。

弥生時代

弥生時代では、前期の資料は現段階において見いだされておらず、大半は中期から後期にかけての遺構・遺物である。遺跡の北・中部地域に多くの資料が見られ、とくに谷１（埋没谷）内からはそのつど投棄されたこの期間の土器が大量に出土している。遺構の多くは中期中葉から後葉および後期前葉のものが主流となっている。

中期ごろの谷１は下部約１mほどが埋まり、谷内に護岸施設や導水用の溝・壺棺・甕棺などがみられた（第23次調査など）。谷１を境にして北側と南側に方形周溝墓・土器棺などの墓域と住居域（ピット・土坑・溝群）があり、谷を挟んで別集落（北集落・南集落）が営まれていたと考えられる。南集落は第24・37次調査地付近に住居域、その西の第７・26次調査地以西に墓域があり、住居域はさらに南の第42・43および38次調査地（大溝、井戸、ピット・土坑群）まで広がるとともに別墓域（方形周溝墓・土器棺）をも確認し、南北約250m・東西約150m以上の大集落が形成されていたと思われる。また、谷を挟んだ北集落を別ムラとするか、同ムラの別集団の集落と見るかは考慮する必要があり、今後の調査によって明確になろう。

南集落は巨視的に見ると、旧外環状線あたりを境として、その周辺および西側に中期資料の割合が多く、後期資料はやや減少するもののその周辺および東側に（土器類、第43次調査の竪穴住居・土坑・ピット、第32次の貯木場など）割合が多い。これは谷１内に投棄された土器のうち後期土器は旧外環状線西接の第23次調査地あたりまでしか見られないこと、西ノ辻N地点（中期末土器）は旧外環状線より西に位置し、I地点など（後期土器）は旧外環状線より東に位置している。これらのことから後期には生活基盤が西から東へ若干移動するとともにムラも縮小化したものと考えることができよう。この間、中期末には方形周溝墓の溝および大溝を埋め尽くす（第７・24・42次調査など）整地が広い範囲で行なわれた。

古墳時代

弥生時代後期末から古墳時代初頭の資料は確認されておらず、前期後半から中期前半にかけても谷１内に人および動物の足跡（第20次調査など）、臼玉を内蔵した布留式土器などが確認されているものの（第33次調査）極めて少なく、その状況は不明である。

しかし、古墳時代中期後半から後期前半になると、遺跡北・中部に土師器・須恵器・韓式系土器・製塩土器などの遺物、集落関連および谷１内東部の石組貯水遺構・木樋を伴う水利施設などが検出されている。これはこの時期、谷１の北（第27・28次調査地周辺）および東・西[6]と南（第36・42次調査周辺）に竪穴住居・掘立柱建物（ピット群）などが見られ、住居・倉庫などが点在して営まれ

ていたことを示している。しかし、出土遺物から見て集落の存続期間はそれほど長期的なものではなく、その状況もあまり明確ではない。

奈良～平安時代

古墳時代末から飛鳥時代の資料はほとんど確認されておらず、奈良時代以降ふたたび人的足跡が見られるようになる。奈良時代前半には谷1内に祇列などの水利施設が設けられ、祭祀遺物（小型海獣葡萄鏡・ミニチュアのカマドセット・人形）が須恵器・土師器などとともに出土している（第22次調査）が、集落状況は不明である。

奈良時代末から平安時代前半になると、谷1の両岸に須恵器・土師器（墨書土器含む）などの遺物とピット・土坑群が見られる。とくに第43次調査ではこの時期の井戸・溝・ピット群、第42次調査でもピットが検出されており、谷1の北岸側（第27・28次調査地周辺）と、南岸では遺跡の中部付近を中心に集落が営まれていたようである。

平安時代中・後期には、谷1北側の第28次調査地周辺にトンネルを伴う土坑やピットなどの遺構が見られるとともに土師器・黒色土器などの遺物が出土し、遺跡の北部には集落が営まれていたようである。しかしとくに後期以降、中・南部地域で東西・南北方向の鋤溝を含む溝が検出されており（第42・43次調査など）、条里制の施行を窺わせている[7]。遺跡の中・西部の大半は田畑化が進み、住居などに伴う遺構はほとんど見られなくなる。

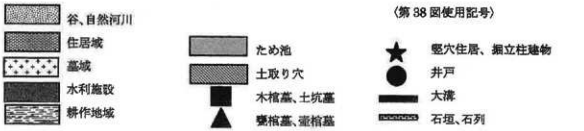
遺跡の東辺を南北方向に走る旧東高野街道は、古代の南海道の後身で、その測設は条里施行期（遅くとも平安時代）以前と言われる直線計画道路であった[8]。本遺跡内において道遺構は確認されておらず、この道がいつの時期まで遡るかは不明である。ただ、南方の市尻遺跡において旧東高野街道沿いから側溝をもつ奈良時代の南北道が検出されていることは参考になろう[9]。東高野街道は河内国を縦貫する唯一の南北道で、その名の示すとおり中世、とくに南北朝期以降盛行したと言われる高野詣の道であった[10]。また、この道とその縁辺は南北朝および応仁の乱以降の内乱期の舞台ともなり、生活・宗教の道であるとともに軍事の道でもあった。

鎌倉時代

平安時代末から鎌倉時代には谷1はほとんど埋没し、かろうじて南東方向から流れる自然河川として残存した（第5・9・22次調査など）。自然河川周辺（現・国道308号線）では掘立柱建物（ピット群）・作業所遺構・井戸・墓・土坑・溝が見られるとともに瓦器、土師器、陶磁器、ウマなどの動物遺体、木簡などの木製品、石・鉄・土製品など多くの遺物が出土しており（第25次調査など）、遺跡の北部地域ひきつづきに集落が営まれていた。集落はさらに北（植附遺跡）に広がっていたと思われ、いわゆる植附村の祖形となったムラの一部と考えられる[11]。この時期、遺跡西部の広い範囲で整地が行なわれ、中・南部一帯は整備され田畑として生産域になっていたと思われる。

室町時代

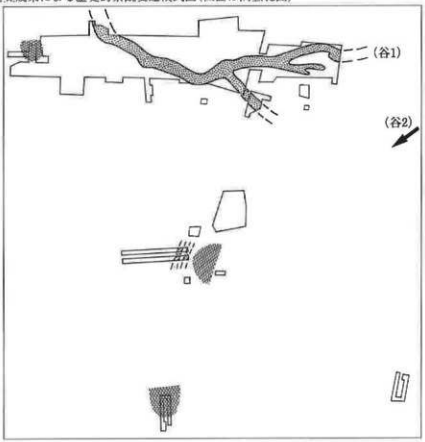
室町時代になると、遺跡北部の自然河川はその初頭期に堰状遺構（第23次調査）が構築されたり



第38図　調査成果による歴史的景観変遷模式図(区画は調査範囲)

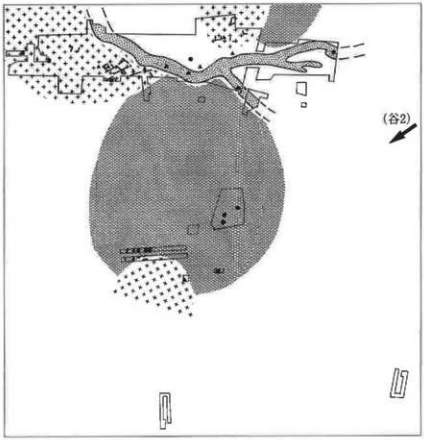
〈縄文時代以前〉

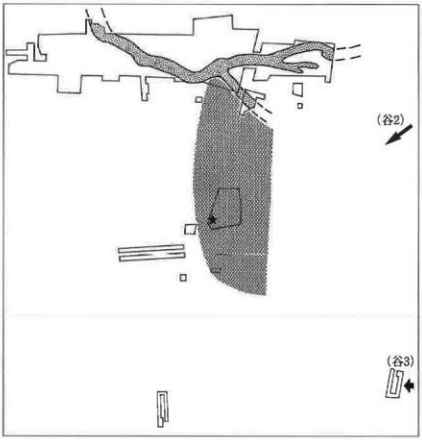
・5、9、10、13、14、16、17、22、23、25、27、32、33次；谷1
・42次；谷2
・35次；土坑(縄文時代前期以前)
・31次；土坑、溝、ピット(縄文時代晩期後半～末)



〈弥生時代中期〉

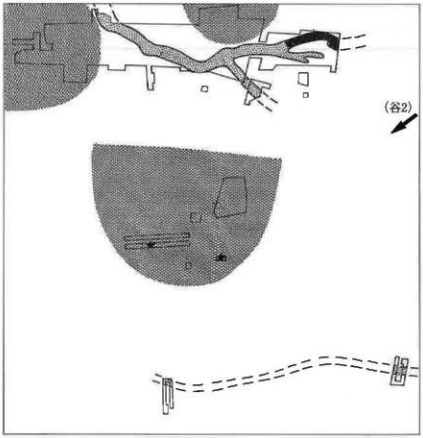
・5、9、10、13、14、16、17、22、23、25、27、32、33次；谷1
・7、9、11、28、42次；方形周溝墓
・17、20、23、27、38次；甕棺墓、壺棺墓
・24、42次；大溝
・22、32、42、43次；井戸
・17、23次；貯蔵穴(中期後半)
・4、24、36、37、42、43次；土坑、ピット群





〈弥生時代後期〉

・5、9、10、13、14、16、17、22、23、25、27、32、33次；谷1
・43次；竪穴住居、土坑、ピット
・32次；貯木場（後期初頭）



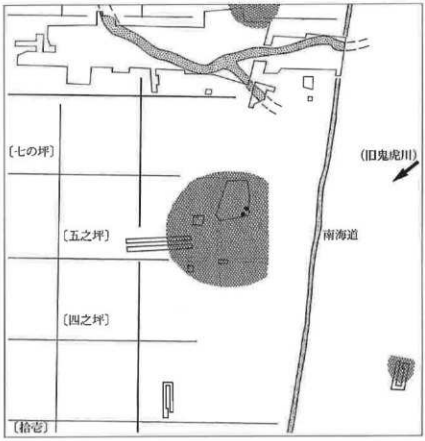
〈古墳時代〉

・5、9、10、13、14、16、17、22、23、25、27、32、33次；谷1
・31、41次；自然河川（谷3）
・10、16、32次；水利施設（5世紀中頃～6世紀初め）
・22次；杭列（後期）
・20、33次；人および動物の足跡（前期末～中期初め）
・36、42次；掘立柱建物
・28、29、36、42、43次；土坑、ピット群

〈奈良～平安時代〉

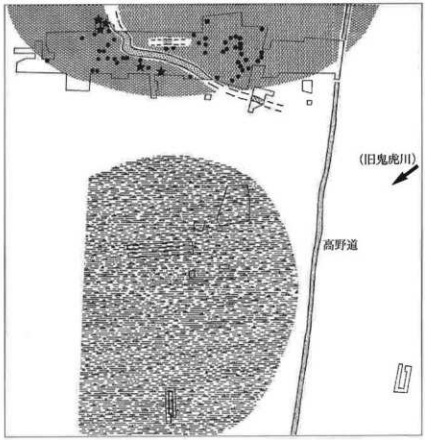
・5、9、10、13、14、16、17、22、23、25、27、32、33次；谷1
・22次；水流調節用の杭
小型海獣葡萄鏡、人形などの祭祀遺物出土
・17次；馬の埋納土坑
・43次；井戸（奈良時代末～平安時代初め）
・41次；ピット（奈良時代～平安時代前期）
・27、28、36、42、43次；土坑、ピット群

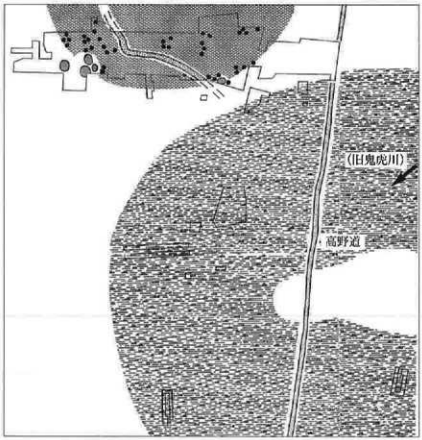
＊条里は小字・地形図より復元（鎌倉時代以降も変化しながら残存）



〈鎌倉時代〉

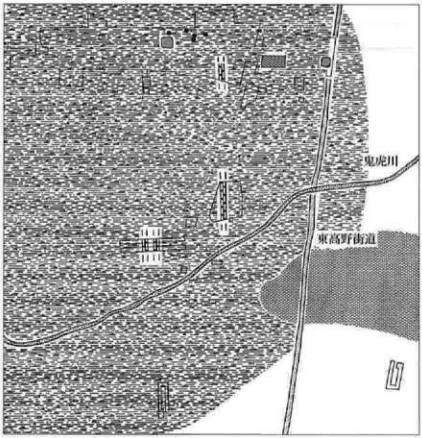
・15次；自然河川
・5、9、22、25次；自然河川
・15次；護岸用列石
・7、20、25次；掘立柱建物
・7、9、10、16、22、29次；木棺墓もしくは土坑墓（13世紀～14世紀）
・11次；作業所遺構（中期）
・33次；会所状遺構（12世紀後半～13世紀）
・33次；集石遺構（13世紀）
・9、17、20、22、25、28、33次；井戸
・9、10、11、16、17、18、20、22、28次；ピット群





〈室町時代〉

・3次；自然河川
・22次；自然河川
・20次；掘立柱建物
・8次；土坑墓？(14世紀末～15世紀初め)
・11、20次；配石遺構
・8、11、19、20、22、23、25、28、32、33次；井戸
・41次;人および有蹄動物の足跡（後半）
・23次；環状遺構
・22次；ため池
・8、19、20、28次；ピット群



〈江戸時代〉

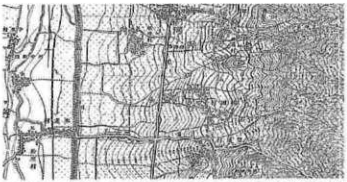
・19次；ため池、樋管
・32次；池
・21次；土取り穴
・5、21、22、42、43次；石垣、石列
・41次；溝（前半）、土坑（後半）

＊鬼庇川・東高野街道沿いの集落は明治20年版地図より推定

＜明治20年（1887）＞

主要道路は南北に東高野街道、東西方向に暗峠越奈良街道。

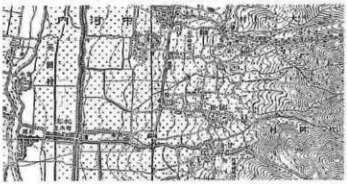
西ノ辻道跡内およびその縁辺での集落は植附村・額田村の各一部がみられるのみ。



＜大正元年（1912）＞

明治41～44年に石切新池を新設し、周辺の耕地整理を実施[注]。新池が灌漑・防災用としての役割を果たし、新池西側周辺は掘り上げ田耕作から区整理された田畑となった。現在、新池は埋め立てられ高層の共同住宅が建っている。

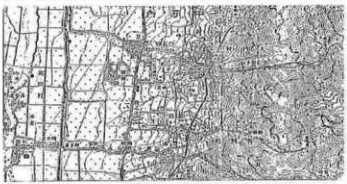
注　『耕地整理碑』『東大阪の石碑』（東大阪市史資料　第二集）昭和44年
『中河内郡誌』大正12年



＜昭和７年（1932）＞

この時期までに、集落名「宿」から「西ノ辻」へ（小字の整理による字名の改変によるものか）、新川の開削に伴い鬼虎川の流路変更。

大阪電気軌道の開通（通称・大軌、現・近鉄奈良線）、当時は上本町－油坂間。



＜昭和27年（1952）＞

旧国道170号線（旧外環状線）、府道15号線（大阪枚岡奈良線、通称・産業道路）の開通。

＜平成３年（1991）＞

特に昭和40年前後の高度成長期以後、大阪市のベッドタウンから都市化へと変貌、現在に至る。

各路線の開通
- 国道170号線（外環状線）
- 近鉄奈良線新生駒トンネル
- 国道308号線新線の整備
- 近鉄東大阪線
- 阪神高速道路東大阪線の水走ランプ
- 第二阪奈有料自動車道路

第39図　地図に見る近代から現代への変遷図（1/50,000）

したが、その直後には完全に埋没したようである。その後、埋没河川上面を含む遺跡の北西部から北中部にかけて掘立柱建物（ピット群）・井戸・墓などの遺構が見られるとともに、土師器、瓦器、陶磁器、動物遺体、木簡・漆器椀などの木製品、土・石・鉄製品などの遺物が出土しており（第14次・鬼虎川第26次調査[12]など）、この一帯に集落がひきつづき営まれていた（植附のムラの一部）。集落は鎌倉時代と比較すると、ムラが縮小し北西・中部にかたよりながらやや北上したものと推測できる。遺跡の北部南辺を含め、中・南部は引き続き田畑などの生産域となっていた。この時期以前にはすでに、南東部の東高野街道沿いにムラ（後の額田村）の一端があったと思われるが不詳。

江戸時代

室町時代末期以降、遺跡の北部地域ではため池・石垣・溝などの耕作関連の遺構は検出されているが、住居に伴うものはほとんど見られなくなる。これはそれまで遺跡北部にまで広がっていた集落が北上し、江戸時代には近代以降の植附村の状態（本遺跡範囲内まで集落が達していない、第39図の明治20年の地図参照）に近い形になっていたものと考えられる。また、額田村周辺については調査例がとぼしく、現段階においては不明と言わざるを得ない。しかしこの時期にも東高野街道沿いに東（額田寺跡）から広がる集落の一部が営まれていたと思われる。

以上、西ノ辻遺跡の範囲について歴史的景観の変遷を概観してみた。しかし、遺跡の範囲・境界は任意に設定されたものであり、本来的には各時代・時期とも周辺の諸遺跡—鬼虎川・植附・神並・額田寺跡・鬼塚など—の状況をも十分考慮して考察すべきものであろう。今回のものはあくまでも西ノ辻遺跡に限った歴史的景観の変遷過程の試案と了解していただき、今後さらに広い範囲でたどられ立体的にも復元されることを期待したい。

注1）「西ノ辻遺跡第24次発掘調査報告」『(財)東大阪市文化財協会概報集　1988年度』財団法人東大阪市文化財協会 1989年。

2）「西ノ辻遺跡の第43次調査」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告—平成12年度—』東大阪市教育委員会 2001年。

3）「東大阪市遺跡発見シリーズ（1）西ノ辻遺跡」『東大阪市文化財協会ニュース Vol.2 No.1』1986年。

4）『西ノ辻遺跡第32次発掘調査報告』財団法人東大阪市文化財協会 1996年。

5）『甦る河内の歴史』財団法人東大阪市文化財協会 1984年。国道308号線関連の各遺跡について、その調査成果を時代ごとに記述している。

6）東は神並遺跡西端（第3次調査）で掘立柱建物、西は鬼虎川遺跡東端（第22・23・33次調査）で溝を伴う柵列と掘立柱建物・竪穴住居などである。注4参照。

7）本遺跡はほとんど七条内で、北辺の現・新川の東西流路線が七条と八条の条境となり、北端部は八条に入る。南隣の暗峠越奈良街道がほぼ六条と七条の条境をなし、恩智川沿いおよび遺跡の中央には里境の南北線が走っていた。また、小字に四之坪・五之坪・七の坪・拾壱・拾三・拾五などの坪名が残存し、道・水路・田畑境などの現地形（図）に条里の遺制が見られる。遺跡東辺をやや西にふりながら南北方向に走る東高野街道は条里と合っておらず－日下町周辺などでは条里に規制されている－、条里施行以前の南海道と言われている（注8の文献参照）。街道西接地および東側には条里の遺制が見られず（小字は不定形）、この地域に集落が営まれていたことを窺わせている（付図参照）。

8）足利健亮「畿内とその周辺（11）交通」藤岡謙二郎編『日本歴史地理総説』中世編 吉川弘文館 1975年。足利健亮『日本古代地理研究』大明堂 1985年。

9）「市尻遺跡第1次発掘調査報告」『東大阪市文化財協会概報集—1997年度—』財団法人東大阪市文化財協会 1998年。

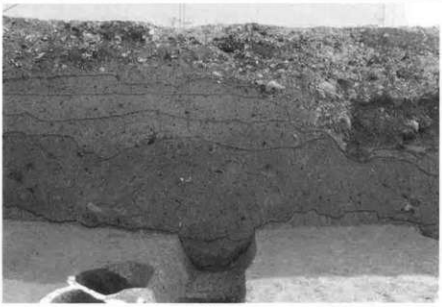
10）新城常三「中世の交通」『体系日本史叢書24』山川出版社 1970年。

11）植附は「水走氏文書」の元弘二年（1279）付け「藤原康政譲状」に「殖槻観音寺別当職」とあり、集落の存在を窺わせている（『枚岡市史—第三巻史料編—』枚岡市役所 1966年）。

12）『鬼虎川遺跡26次・西ノ辻遺跡18～20次調査概要報告』大阪府教育委員会 財団法人東大阪市文化財協会 1995年。

〔追記〕模式図（第38図）は若松の構想に基づき吉田が作成し、本文は両者の話し合いによってまとめたものである。

調査地全景（東より）



北トレンチ断面部分1
－F地区－

北トレンチ断面部分2
－H地区－

図版2　遺構

北トレンチA・B地区
自然流路（北より）

南トレンチA～D地区
自然流路（東より）

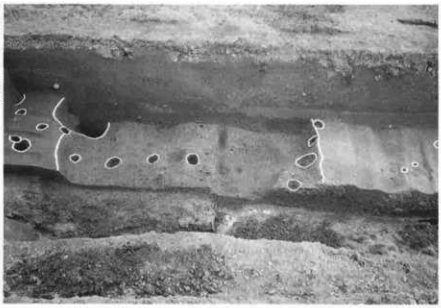
南トレンチA地区
自然流路堆積状況
－北断面－

北トレンチC・D地区
(北より)

北トレンチD～F地区
(北より)

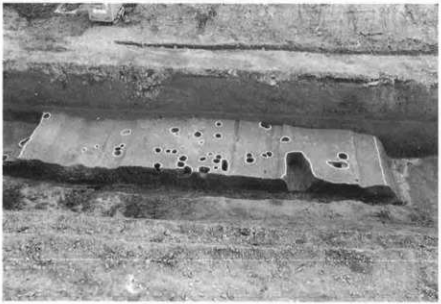
北トレンチF・G地区
(北より)

図版4　遺構



北トレンチG・H地区
（北より）

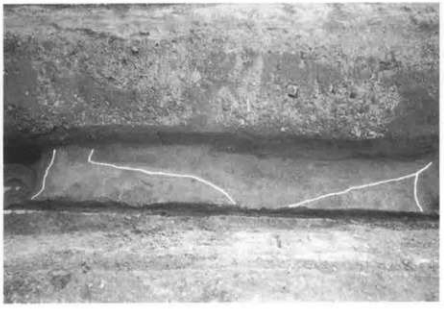
北トレンチ大溝３内
土器出土状況（南より）



北トレンチH地区
（北より）

北トレンチI地区
－大溝１・４など－
（北より）

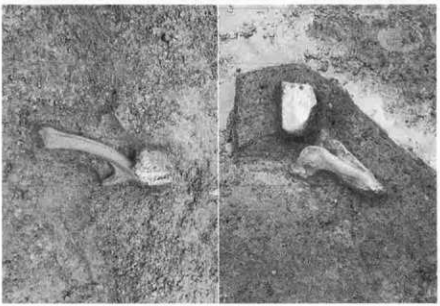
北トレンチ大溝１内
土器出土状況（南より）



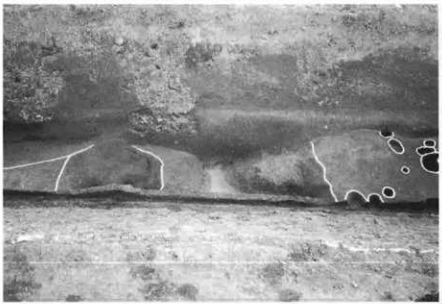
北トレンチJ地区周辺
－落ち込み－（北より）

図版6　遺構

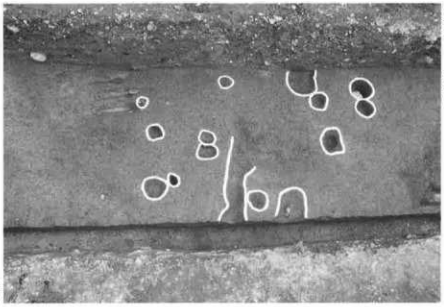
北トレンチ落ち込み内
土器出土状況（南より）



北トレンチ落ち込み内
シカ角・イノシシ下顎・
土器出土状況（南より）

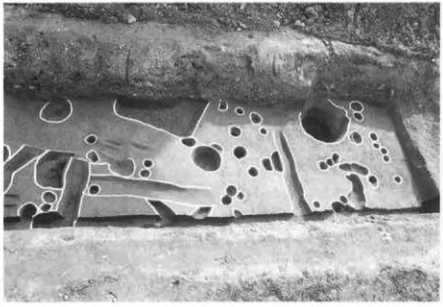


北トレンチJ～K地区
－土坑13、大溝３など－
（北より）



南トレンチD地区
（北より）

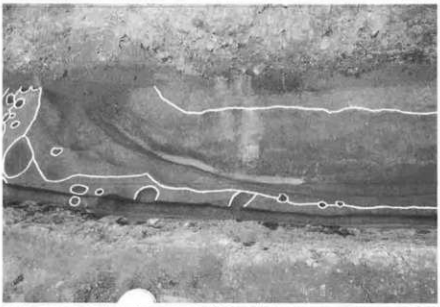
南トレンチE地区周辺
（北より）



南トレンチF地区周辺
（北より）

図版8　遺構

南トレンチG～J地区
（東より）



南トレンチG地区
－大溝2など－（北より）

南トレンチH地区
－大溝2など－（北より）

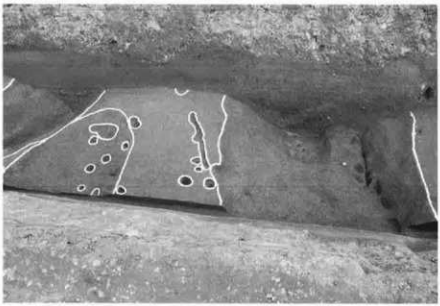
南トレンチ大溝２内
土器・動物遺体出土状況
（南より）

南トレンチ大溝２
西溝断面（北より）

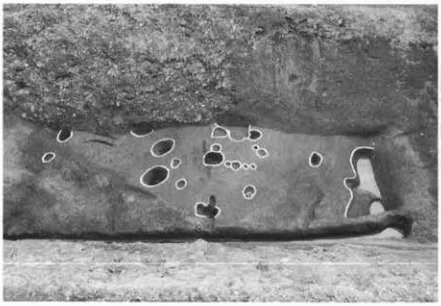
南トレンチ大溝２
東溝断面（北より）

図版10 遺構

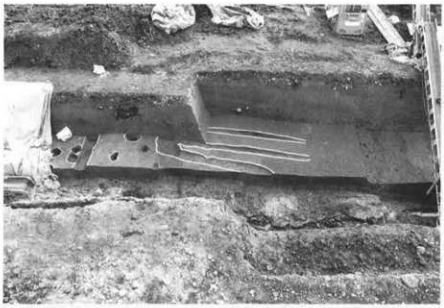
南トレンチ
方形台状部断面
(東より)



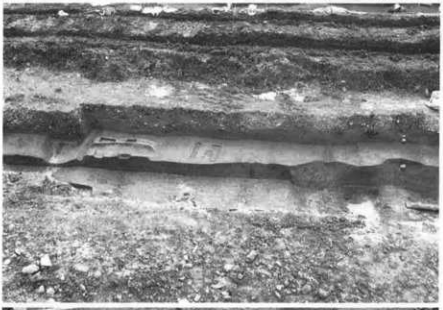
南トレンチI・J地区
一大溝1・3など一
(北より)



南トレンチJ地区
(北より)



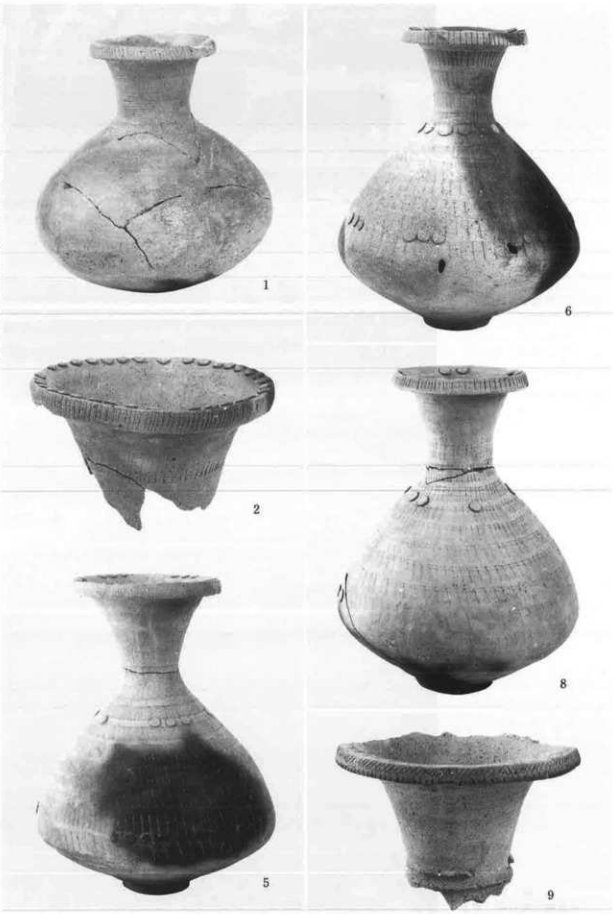
北トレンチG地区
中世期遺構（北より）



北トレンチD・E地区
中世期遺構（北より）

南トレンチG地区
近世棚田境石列（南より）

図版12　遺物　南トレンチ大溝2出土弥生土器



広口壺(1・2・5・6・9)

図版13　遺物　南トレンチ大溝2出土弥生土器

広口壺(3・4・10～12・14)

図版14　遺物　南トレンチ大溝2出土弥生土器

15

19

16

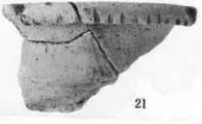
17

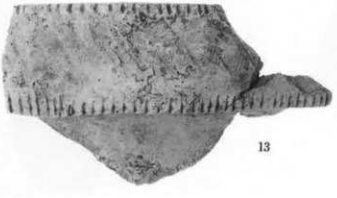
18

広口壺(15～19)

図版15　遺物　南トレンチ大溝2出土弥生土器

広口壺(20・22・27)





広口壺(7・13・21)無頸壺(24)

図版16　遺物　南トレンチ大溝2出土弥生土器

30

25

32

28

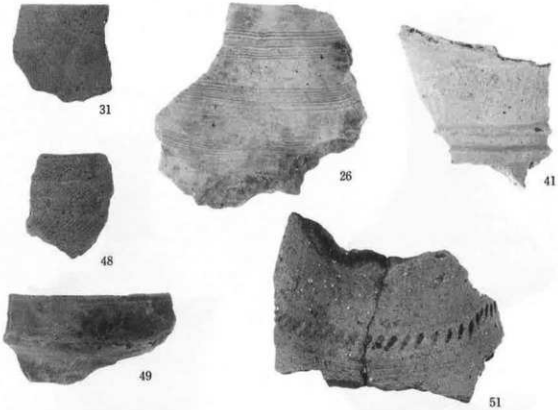
33

29

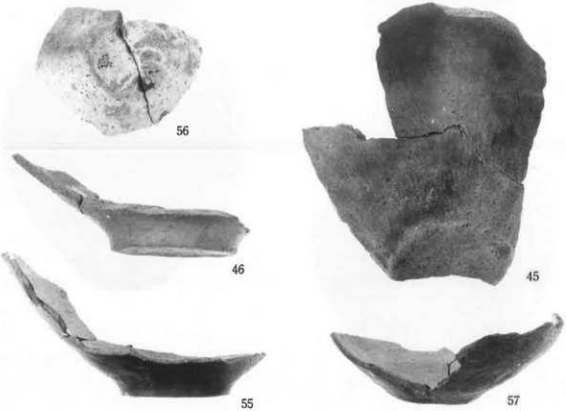
36

壺(33)無頸壺(25・28・29・32)鉢(30)水差形壺(36)

図版17　遺物　南トレンチ大溝2出土弥生土器



無頸壺(26)細頸壺(48)広口壺(49)壺(41・51)鉢(31)



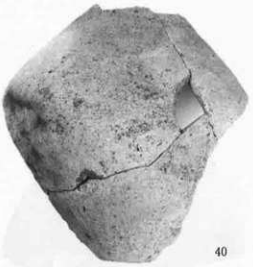
壺(45・46・55～57)

図版18　遺物　南トレンチ大溝2出土弥生土器

高坏(37)壷(38)

図版19　遺物　南トレンチ大溝2出土弥生土器

34


40

35

43

39

52

壺(34・35・39・40・43・52)

図版20　遺物　南トレンチ大溝2出土弥生土器

44

47

53

54

50

壷(44・53・54)縦瓶壷(47・50)

図版21　遺物　南トレンチ第4層・大溝2出土弥生土器

62

72

66

73

70

75

71

76

鉢(62・66・70～73・75・76)

図版22　遺物　南トレンチ第4層・大溝2出土弥生土器

77

123

78

124

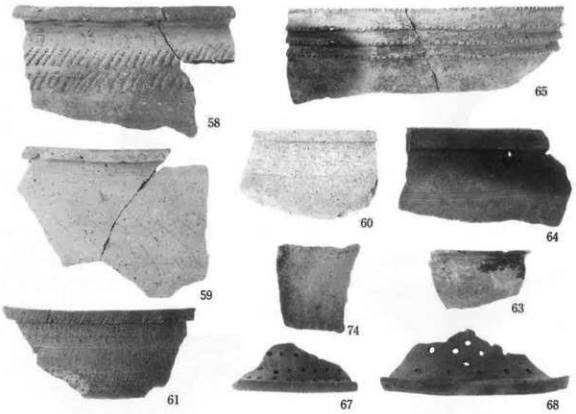
79

234

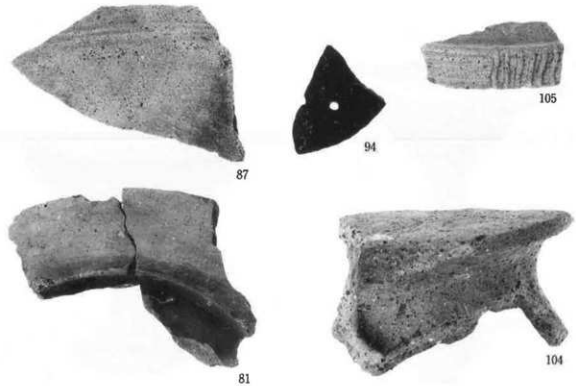
80

鉢(77)鉢または甕(80)大型甕(78・79・123・124・234)

図版23　遺物　南トレンチ第4層・大溝2出土弥生土器

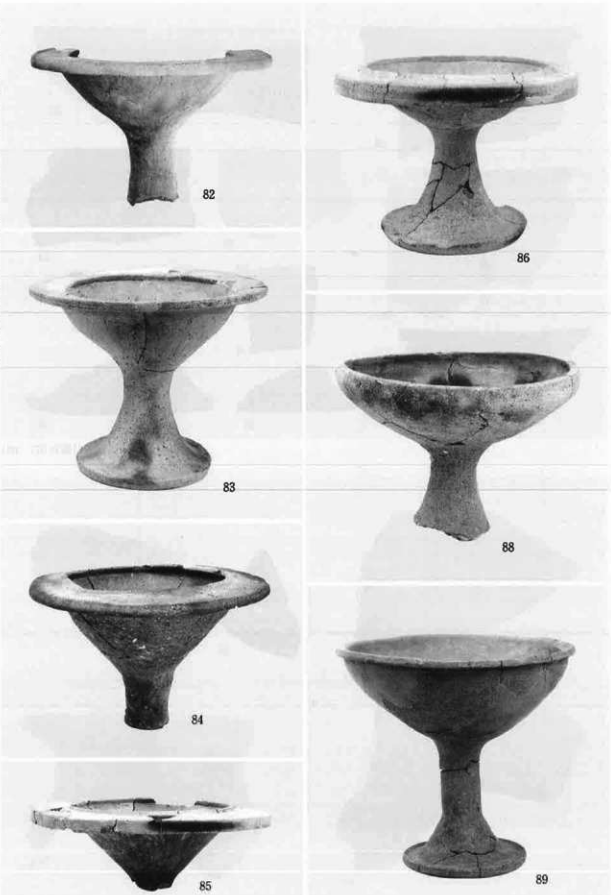


鉢(58～61・63～65・74)脚台(67・68)



高坏(81・87)壺蓋(94)器台(104・105)

図版24　遺物　南トレンチ大溝2出土弥生土器



高坏(82～86・88・89)

図版25　遺物　南トレンチ第4層・大溝2出土弥生土器

90

93

91

95

96

92

69

高坏(69・90～92)壷蓋(93・95)甕(96)

図版26　遺物　南トレンチ大溝2出土弥生土器

102

103

111

112

113

106″

106

106‴

甕蓋(102・103)高坏(111～113)異形土器(106)

図版27　遺物　南トレンチ大溝2出土弥生土器

100

108

101

140

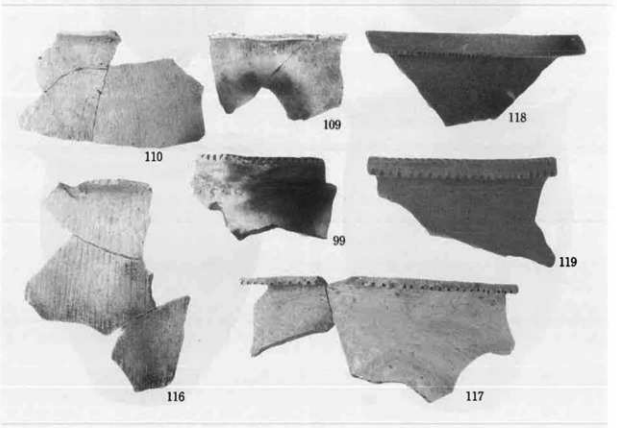
107

114

中小型甕（100・101・107・108・114・140）

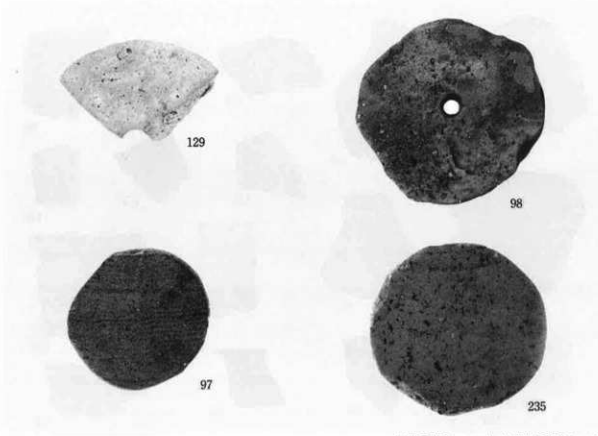
図版28　遺物　南トレンチ大溝2出土弥生土器

甕(115・120・121)

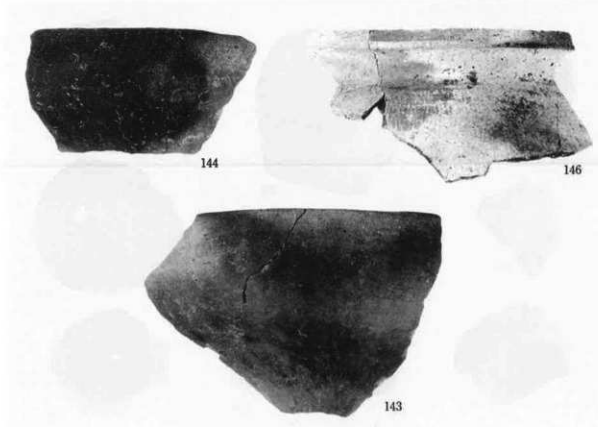


中小型甕(99・109・110)甕(116～119)

図版29　遺物　北トレンチ大溝1・落ち込み出土土製品　南トレンチ大溝2出土弥生土器

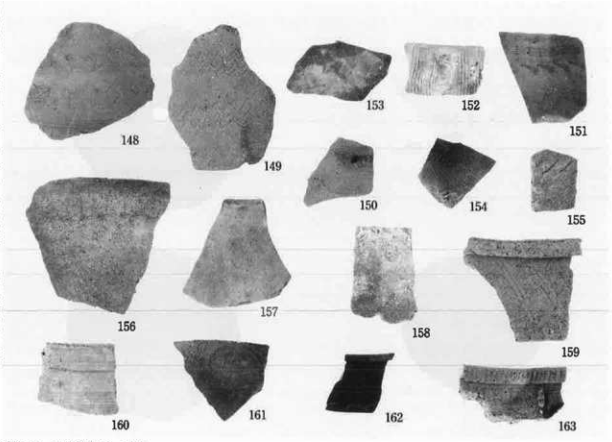


土製円板(97・235)土製紡錘車(98・129)

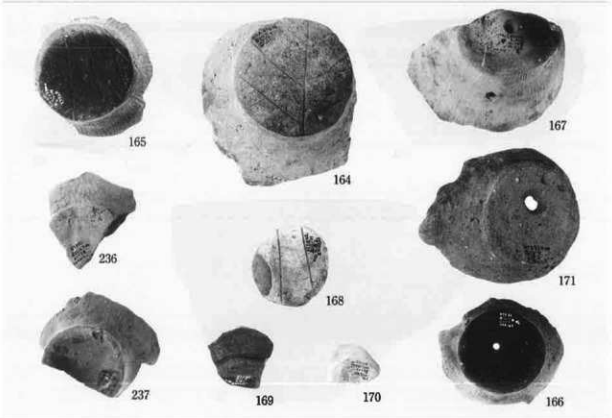


高坏(143・144)中小型甕(146)

図版30　遺物　南トレンチ大溝2出土弥生土器



壷(148～155)鉢(156～163)

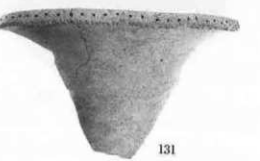


底部(164～171・236・237)

図版31　遺物　北トレンチ大溝3・落ち込み出土弥生土器

125

127


131

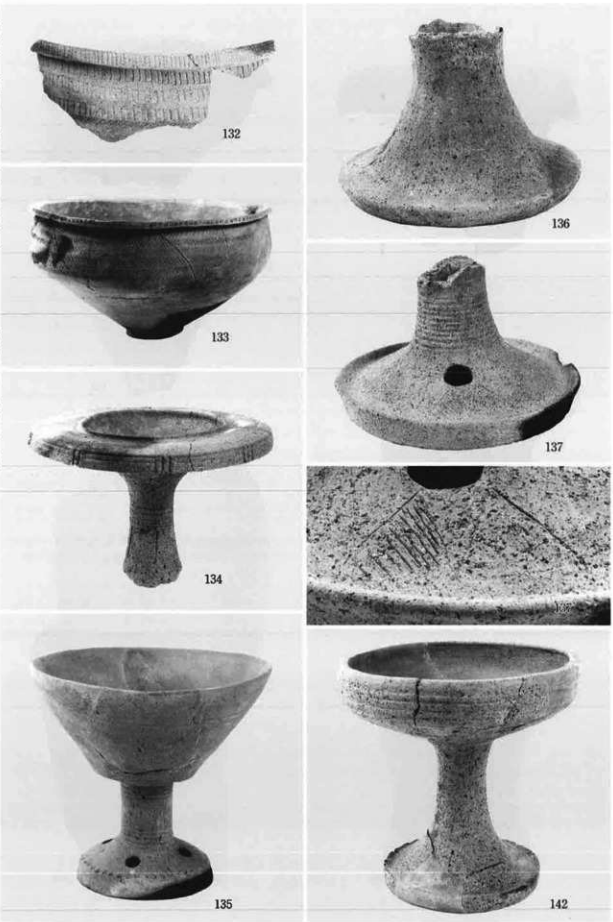
126

128

130

広口壺(125～128・130・131)

図版32　遺物　北トレンチ大溝1・3・土坑13出土弥生土器



鉢(132・133)高坏(134・135・142)脚台(136・137)

図版33　遺物　北トレンチ大溝3・落ち込み出土弥生土器

138

139

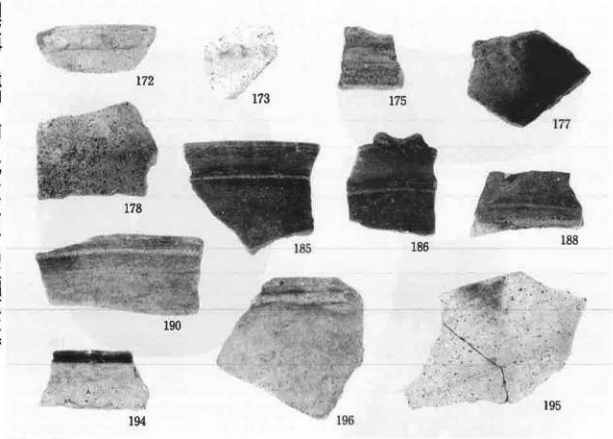
141

145

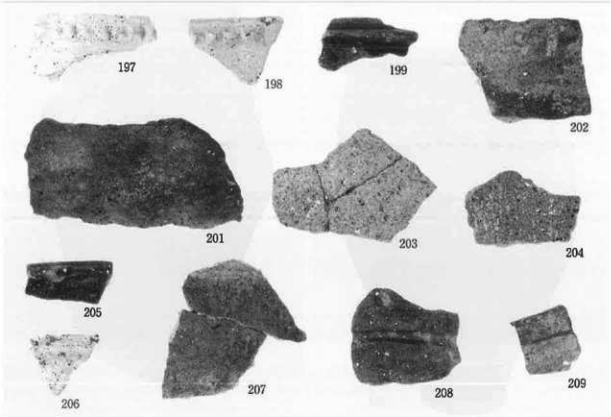
147

鉢(138)脚台(139)中小型甕(141・145・147)

図版34　遺物　南・北トレンチ出土縄文土器

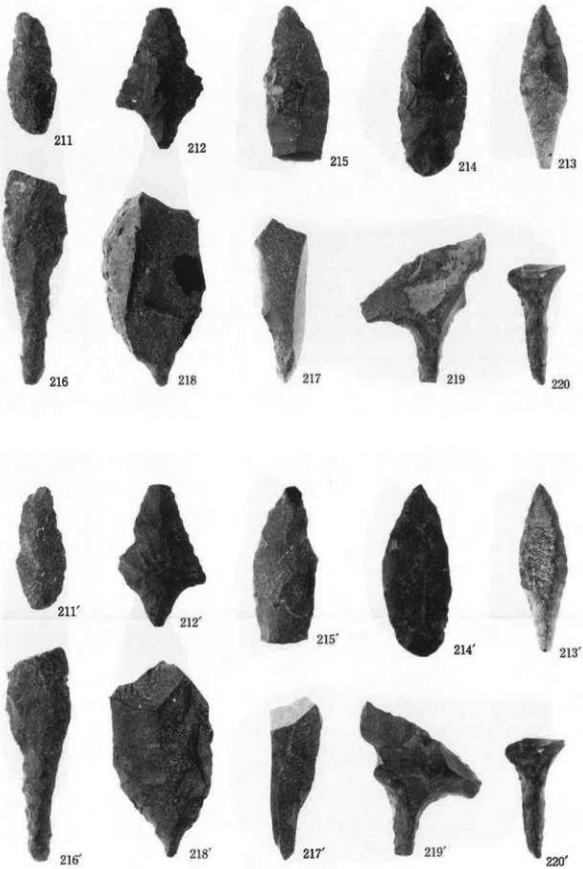


深鉢・浅鉢



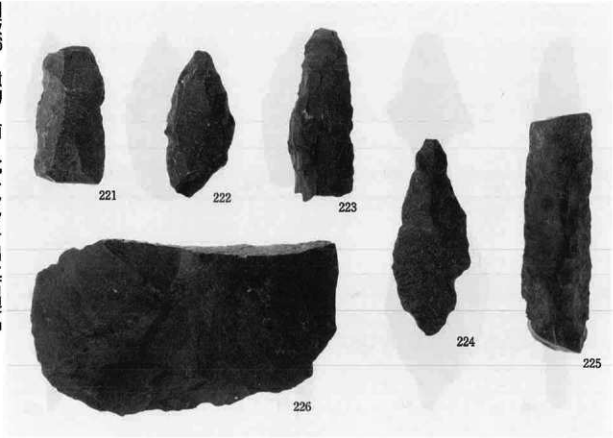
深鉢・浅鉢

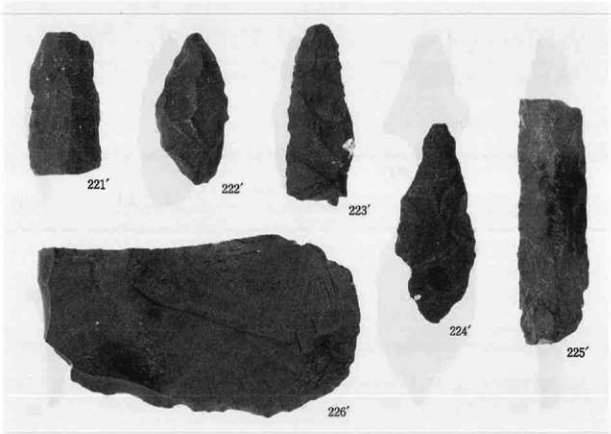
図版35　遺物　南・北トレンチ出土石製品



打製石器

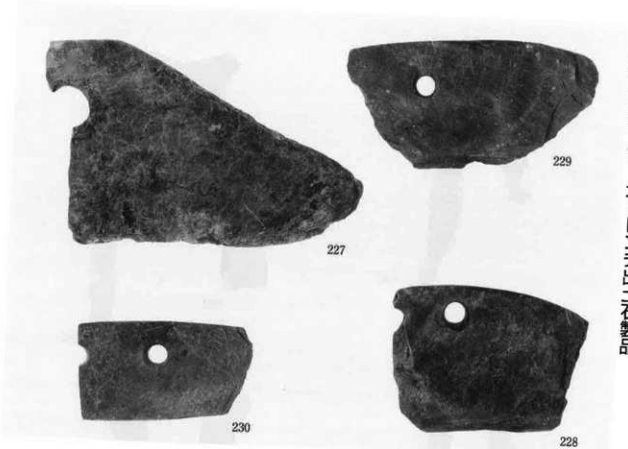
図版36　遺物　南・北トレンチ出土石製品



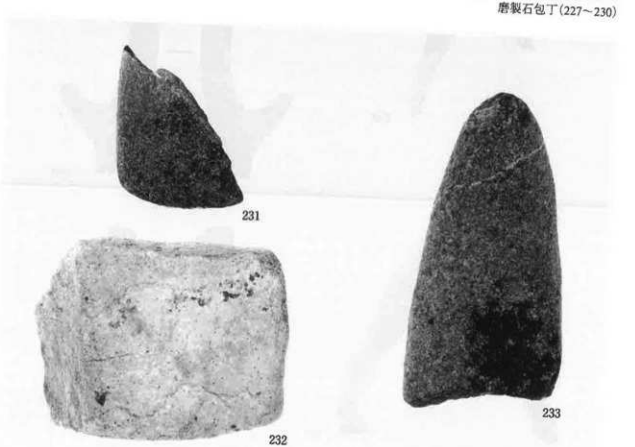


打製石器

図版37　遺物　南・北トレンチ出土石製品

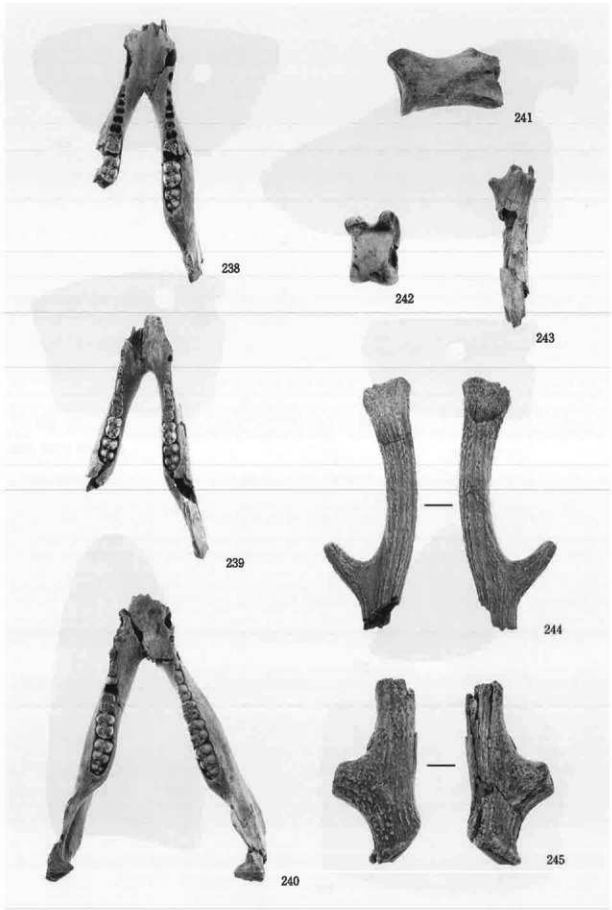


磨製石包丁(227～230)



磨製石器(231・233)砥石(232)

図版38　遺物　南・北トレンチ出土動物遺体



イノシシ(238～241)シカ(242～245)

付　図　西ノ辻遺跡周辺小字切図

報告書抄録

ふりがな	にしのつじいせきだい42じはっくつちょうさほうこく
書名	西ノ辻遺跡第42次発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	若松博恵・安部みき子・槇原美智子・吉田綾子・村上昇
編集機関	東大阪市教育委員会
所在地	〒577-0843　大阪府東大阪市荒川3丁目4番23号 電話　06−6728−9361
発行年月日	2001年9月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
にしのつじ 西ノ辻	おおさかふひがしおおさかし 大阪府東大阪市 にしいしきりまち　ひがしやまちょう 西石切町・東山町 やおいちょう　なんそうちょう 弥生町・南荘町 たからまち 宝町	27227	45			2000年1月7日 〜 2000年2月26日	640 m²	共同住宅建設

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西ノ辻	集落	縄文 弥生 古墳 奈良・平安 鎌倉〜江戸	自然流路 大溝・方形周溝墓 井戸・ピット・土坑 土坑・落ち込み ピット・土坑 耕作跡	突帯文土器・石製品 弥生土器・動物遺体 土製品・石製品 須恵器・土師器 土師器・瓦器 陶磁器・金属製品	

西ノ辻遺跡42次発掘調査

平成13年9月28日

発行　東大阪市教育委員会
印刷　東和印刷　株式会社